

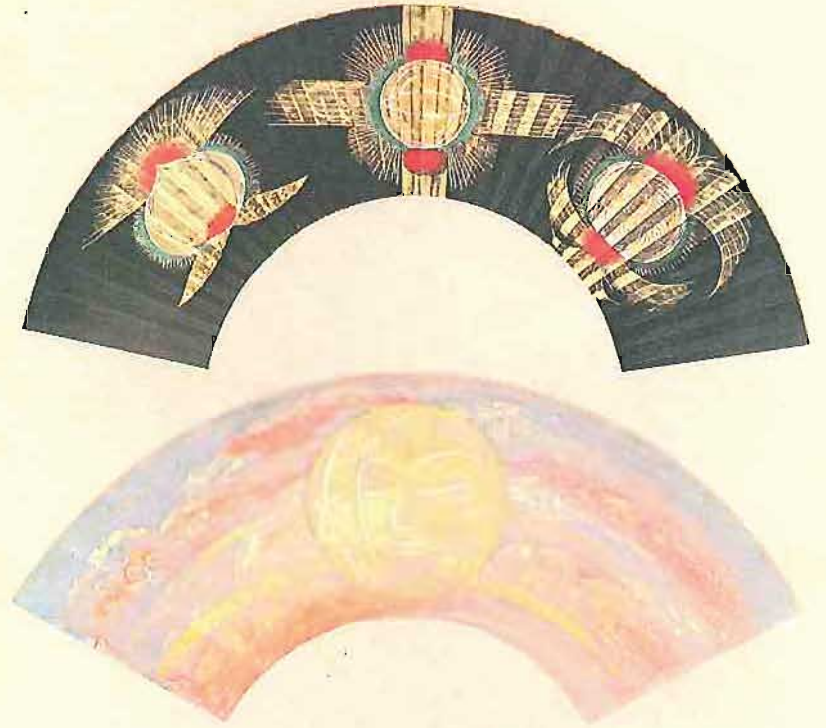
オイカイワタチ 第三卷(別冊三)

— 新しい地球鏝球王国 —



ワンガラー誕生
 汝を抱しこのよみこむ
 がわい汝のあたかきよ
 汝はまきし方
 空を満る山を
 はせぬじり
 汝は今美金の
 汝しぶるととも
 神をたすけ
 鏝環玉園出現した
 あい生

ワンガラ



人が神を思ふとき
 神は月を
 十字星の中にあはす
 宇宙の真の星
 月は吾の心
 もあはしは神とて
 生けるものみ
 神の意識の輪に
 つらうてある
 神は無限である
 又の日はいさ
 いとみるかやあせ
 川と吾の心は
 いんはるか

ワンダーライオンを捧げる
 菜山は月をこめて
 新しき五を何しむ
 こゝろは神の見聞に
 よりて又神にまいた
 五よ吾の愛の歌か
 神をまき給ふ
 捧げし百を
 めて給ふ
 永き心にかや
 銀球五國よ



飛

飛

飛

山本麗湖画歴

二、次より人物画を描き、常に日本画に専心
以、南出木洲の指導より専ら博物館神社
佛蘭の宝物模写等と研究、昭和七年大津
より東京に転居、川合玉堂先生の門人となり
長流方塾に入門、玉堂先生の懇切なる指導
より精力倍り、洋画版熊岡素彦先生の研
究所にてデッサンの研究、凡そ個人展と数回
開催す。

昭和二十一年、大津市下郷里滋賀県、大津市に
帰り、大津市比叡山飯倉谷寺樂律院に傳度
し、神佛に仕へ、現在に至り、山本麗湖子

住所 大津市一丁目上中野町三三〇番地

山本麗湖画史後会

山本麗湖画伯 紹介

本書のために絵画を贈って下さった山本画伯は、本
書のでら刷の一枚をも読まれていない。画伯自身が新
しい地球鑿球王国が創造されていくさまを、日月星と
自然が語りかけるしるしからの靈感と靈視によって画
かれ、解説して贈って頂いたものである。

ワンダラー山本画伯に、この紙面をかりて感謝を捧
げる。

(編著者)

はしがき

「オイカイワタチ」別冊(三)を刊行するにあたり、ここで改めて昭和三五年から五二年九月までの十八年間を振り返って見ると、ワンダラーの使命である「世の終わり」と「新しい世の建設」の道は極めて厳しい難解な道であった。このために、私達はずまづき倒れんとしたこともあったが、ひたすら神に祈り続けて進んで来たのであった。

去る五月一日、天の神様より次のお言葉を頂いた(9頁参照)

……完全とは言えませんでした、良く役を果たしてこられました。……これからも天の神と共にいきます。

このお言葉にあるように、私達の今までの働きは決して完全とは言えないものであった。にもかかわらず、沢山の天の助けによってようやくにして役を果たし、今日に至ったのである。

従って、これまでのワンダラーの歩みをその都度記録し発刊して来た「オイカイワタチ」においても、私達の理解がまだ完全ではなかった当時の記録を不鮮明なままに記載した箇

所が、部分的にはあれ存在する。そして、このことにより真意が皆様に伝わらなかったこともあったようである。(加えて、目で見えない場での戦いを文章をもって表現しなければならぬという困難さもあった。)

以上のような私達の至らなから、ワンダラーの使命の「真」が皆様に十分に伝わらなかったとするならば、その責任はすべて地のワンダラーの私達にある。決して天にその責任があるのではない。このことを特にここに明記しておきたい。

今、別冊(三)を貴方にお届けするにあたって、今日までの歩みを通じて、ここに強く深く自信と確信を持って皆様に申し上げられることがある。

「私達ワンダラーは、今日に至るまで、『世の終わり』と、『新しい世の建設』の道を歩んできた。そしてその歩みの根幹には、一つの間違いもなかった。」

これは時が来れば必ず判ることである。(またこの別冊(三)を読まれれば、今まで不鮮明であったところも鮮明となって来るであろう。)

これまでに刊行された、「オイカイワタチ」の本書、別冊(一)・(二)、及び今回の別冊(三)を総覧すれば、『世の終わり』と、『新しい世の建設』は次のような「世界」を通して行われて来たことが判るであろう。

「無の世界」

「霊の世界」(注)適切な言葉が見当らぬが、「神界」とも申そうか、

「たましい(魂魄)の世界」

この順序で、それぞれの世界で行われたこの戦いは、十八年という歳月を要した聖戦なのであった。

そして、いよいよこの聖戦は「形の世界」に移行した。昭和五二年九月二三日をもって、新しい地球、鏖球王国の建設は、「形の世界」に始まったのである。と同時に、地球の浄化も「形の世界」に入った。

「形の世界」における聖戦は、まず、ワンダラーが形の世界でいろいろの体験を受けて行くことから始まる。これは極めて厳しい戦いとなるであろうが、これを遂行するのがワンダラーの使命なのである。この身に受ける体験がこの地球を浄化して行くのである。

いよいよ、聖戦は「形の世界」に入ったのである。

「地にある全員のワンダラーが待望していた使命を果たす本番の時が、ここに到来した。」
「オイカイワタチ」別冊(三)はこれからの皆様方の働きの良き助けとなるものと確信している。

全国の親愛なるワンダラーの方々に、また、これからワンダラーとなられ沢山の役を果たされる、万たる数のワンダラーの方々に、真の愛と真の心を込めて本書を捧げる。

目次

第一部 鏢球王国りゅうきやうの霊の世界誕生

—この地球最後の儀式—

第一章 天の神々様をお迎えする……………7

第二章 AZ様サンダこの地球に降り給う……………16

第三章 この地球最後の儀式……………25

—鏢球王国の霊の世界誕生—

第二部 鏢球王国の建設

—たましいの世界誕生—

第一章 変わる世の始まり……………89

第二章 カルマを真で解く戦い……………136

第三章 鏢球王国のたましい（本の心）誕生……………159

第四章 この地球の浄めの聖戦……………181

—カルマを真で解く戦い—

第五章 鏢球王国のたましい（本の気）誕生……………233

第六章 鏢球王国のたましいの世界誕生……………244

—形の世界の建設始まる—

附・新しいワンダラーの誕生……………272

あとがき……………280

第一部 鐻球王国の靈の世界誕生

——この地球最後の儀式——

第一章 天の神々様をお迎えする

一九七七年五月一日（昭和五二年）、午後二時、W氏宅に、S氏、N夫妻、I氏、K夫人、N夫人、W氏の七名集まる。

去る三月二〇日のエクアドルの儀式以降の経過が語られ、これからのワンダラーの進む道を、天の神様に祈れるだけ祈って、お互いに助け合い、一つになって進むことを語り合った。この時、W氏は「今日のこの集まりは、なにか深い意味と意義があると思います。」と語るのであった。

今日のこの会合に出席するために昨夜から泊まっていたK夫人宅の玄関を出た時、高知のN夫人は天の神様のお姿を拝した。今日は以前に拝した厳しいお顔ではなく、和やかに微笑ほほえまれていた。この霊視は、W氏宅に行く道すがら、ずうっと続いたのであった。

このW氏宅の会合は、午後五時二〇分頃終わった。N夫妻はその帰り道、次の光景を目撃し、夫人は靈感を受けたのである。

W氏宅から車が広い道路に出た時、東の空にある月を見た。その月の左横に一本の太い雲の柱が立っている。それを見た時、なぜかその柱はある方の象徴であると直感した。また空には、西に傾き始めた太陽があり、その横に細く白い線のような雲の柱が立っている。これを見た時、古い地球の役を終えられたある方の象徴であると直感した。

その日の夕方、一八時三〇分、夫人は次の光景をみた。雲で△が形づくられ、その三角の左端に月がある。(△) それを眺めていると、暫くして三角形の雲はその月を頂点に頂くように移動した。(○△)

この時、この頂点にあるのはある方であると直感した。そのとき、白い雲の線で画かれていた△が突然姿を▽に変えた。中心の先端に月が美しく輝いている。これは、ある文字を表わすのであると判かり、また、その方を表わすと確信したのであった。

以上のようなことから、N夫人は、「新しい世」における柱が立ち、その柱は○○を表わしていると判るのであった。

夫人は家に帰ってからも、この天のしるしと受けた沢山の靈感について静かに考え、思いをめぐらしていた。その時……

「天の神様のお言葉」をテレパシーで次のように書かされたのである。

今まで、王という柱の無い席で、二本の木は完全とは言えませんでした。良く役を果たしてこられました。これからも天のしるしは、多くの難題を示しますが、天の神と共にいきます。

今までの古い地球としての王の役は○○でありました。今ここに○○の役は終りましたが、これからも皆さん一緒に進んで行きましょう。

新しい鏢球王国としての王の役を○○が天の神と共にいきます。

これから皆さんと共に良く役が果せますよう天の神に祈りましょう。これからは皆さんの目覚めが始まります。多くの方々が真に目覚める時、ワンダラー全員が結ばれる時、この地球は救われます。その時は、今ここに來ています。

ですから、一人残らず、天の神は皆さんの真の目覚めを待っています。あとは、皆さんの肩にかかっています。

天の神に祈れるだけ祈りましょう。

註この五月一日の出来事は、一部のワンダラーの方々には五月十八日に語られ、そして六月一九日「この地球最後の儀式」に参加した方方に始めて発表されたのであった。

五月二日、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「光と闇とを厳然と分かつ。」（白と黒とは厳然と分かたれるの意）

光の方々は、暖かく、柔らかく、真が通じ合うのである。国の方々は、言葉、態度はいかにも上手であるが、奥は冷たく、真がなく、物質的である。

この国の方々と光の方々とは、厳然として区別されるのである。また自らを区分してゆくのであると判った。このことについてのこれ以上の深い意味は、現在のところ明らかではないが、いずれ判る時が来るであろう。

五月五日、N夫人は、次のような天空におけるしるしを見、かつ天の神々様が地に降りなるとして待期しておられる光景を監視した。

天空に東西につながる長い帯状の白い雲があり、少し間隔をおいてその下に、上の雲の半分くらいの長さの帯状の白い雲がある。これは、天の道と地の道であると直感した。上の天の道は完全に出来上がり、その天の道を通られて、天の神々様（火の神・水の神・風

の神・空の神）は天と地の中間に立ち、地に降りようと待期しておられると判った。

しかし地の道は半分しか出来ておらず、天の神々様は地の道が出来上がるのを待っておられるのであると直感した時、私達ワンダラーが天の神々様をお迎えする儀式を行うことによりこれが成ると判ったのである。

W氏は、この儀式を五月七日に行うことに心で定め、皆に諮^{はか}った。

五月七日、儀式は午後二時からW氏宅で行われた。

午後一時二五分、N夫妻は、W氏宅の玄関に入る前、なにげなく天空を仰いだ。そして太陽を見た。

太陽の上部からは、柔らかい絹布を思わせるような雲が煙のように湧き出ている。その柔らかい絹のネッカチーフをたなびかせたような薄い雲は、東の方面に伸びて行く。その中は太陽の二倍くらいである。そして、その低辺に薄赤い美しい線のような雲がどんどん伸びて行くのが見える。するとその雲の中頃に、こんどは美しい青い線が太陽から発生して東に伸びて行った。薄赤い線と青い色の線との間は、この両方の色が混じり合ったなんとも表現しがたい美しい色合となっていた。この光景は、N夫妻のまえに二三分続き、そして消え去ってしまったのである。

これを聞いたW氏は、今日の儀式を^{ことほ}寿ぎ、証しする瑞祥であると直感した。W氏は今日の儀式について次のように語った。

この儀式は天の神々様（火の神・水の神・風の神・空の神）をこの地にお迎えする儀式である。

今日この儀式を行う決定がなされたことにより、地の道は出来上がったのである。本日（七日）午前一時三〇分、天の神々様はこの地にお降りになられたのである。今日の儀式は、お迎えとお礼を申し上げ、天の神様と共に、この地に大御業をして頂くことを、天の神々様にお願ひする儀式である。

これから始まる地における聖戦で、地にある私達ワンダラーは、天の神様と、天の神々様と共に一緒に進んで、私達の役が良く果たせるようにお願ひ申し上げますのである。

そして、全員のワンダラーの方々がカルマを真で解き、真に目覚めて、ワンダラー全員が一つの心に結ばれるように、天の神様にお願ひ申し上げますのである。ワンダラー全員が真に目覚め、一つの心に結ばれることにより、古い地球は、全人類は救われるのである。

つづいて集まったワンダラーの方々が、これまでのことからのことを語られた。そして最後に全員で次の祈りを捧げて儀式は終わった。

祈り。

天の神々様、この地にお降り頂きましたありがとうございます。どうか、天の神様と共に、この地に大御業をして下さいますようお願い申し上げます。

私達地のワンダラーも、天の神様と、天の神々様と一緒に進んで行き、私達の役が良く果たせますようにお導き下さいますようお願い申し上げます。

これからは、私達始め多くのワンダラーの方々のカルマが解け、真に目覚めてワンダラー全員が一つの心に結ばれますようにお導き、お守り下さいますようお願い申し上げます。私達のこれからの沢山の役が良く果たせますようお願い下さり、お守り下さい。

天の神様ありがとうございます。

同日（七日）、儀式のあと、帰路についたN夫人は、地下鉄の今池駅から名古屋市中心街である広小路方面（西方）を見て驚いた。附近にあるほとんどの大きな建物が異様な、うす気みのわるい、赤い焰のようなものに包まれている。しかし、天空は白い薄雲で一杯に覆われ、ところどころは青空がのぞいている。これは決して西日の照りはえではないことを充分に確めながら、この光景を暫く見つづけた。

この異様な光景は、中心街の沢山の大きな建物が、まさに大火に包まれているような雰囲気をおもわせた。彼女はこの火焰のようなものを眺めながら、自分もこの火中に入って行

くような恐怖の気持で地下鉄に乗った。ところが、目的の駅（一社駅）についたとき、再び天空を眺めた彼女はさらに驚嘆した。光景は一変していたのである。

あの異様な色をした火焰の如きものは完全に消え失せている。

そして先程まで天空を一杯に覆っていた白い薄雲は、すきとおるような、鮮紅色ともオレンジ色ともピンクともつかない色に変わっていた。所々に青空がのぞいているのが見られる。

このピンクに輝く薄雲は、全天にあって地球を覆いつくしているようであった。それはこの世のものとは思えない程に綺麗で美しい光景であった。その時、

「天の神々様によって、この地球は包まれた。いよいよ、天の神様と共に、天の神々様の活動が始まった。」

「今日の儀式により、自然を司どる天の神々様は地に降りられて、地の神々様と結ばれ、この全地球を覆いつくされたのである。」

と夫人は判った。そのと、たんに全天を染めていた薄雲は、もとの白い色に戻ったのである。

この光景には、さらに印象の深い部分があった。それは、天空に広がったピンクの薄雲の中に、重なって巨大な◇形のピンク色の雲があったことである。この◇形のピンクの雲

は、周囲と共に、白い◇形の雲に変わったのであるが、暫くしてその形を変え始め、巨大な三日月（☾）のような形となり、東の方へと進んで行く。その三日月形の雲が進んでいったあとは、透きとおる様な青空に変わって行くのであった。

「天の神様は、地球の一切のヨゴレを掬い取って行かれる。」と直感したのである。

第二章 サナンダ A Z様この地球に降り給う

五月九日、W氏、朝の散歩の時、今日は太陽のまわりに虹が出る日であり、天のしるしの多い日であると、なぜか思えてならなかった。

彼は会社への出勤途中、車から、天空一杯に東西に広がる巨大なVの字を画いた雲のしるしを見た。彼は、会社に着いてからも、今の天空におけるしるしが気にかかり、暫くそれを仰いで見た。そして再び、今日は天のしるしの多い日であると思ったのであった。

この日、N夫人は、午前一時頃より夕方七時半頃にわたって天に繰りひろげられ、次々と進行して行く巨大な天のしるしを見た。これに加えて、多くの円盤が現われて天に乱舞した。まさに「天の祝典のパレード」であった。

K夫人も、午前一時頃から、天に繰りひろげられるしるしを目撃し、驚嘆し、これは重要な意味を持つものであると感じたのであった。

このような天のしるしのパレードは、文筆家でない私達には極めて記述するに困難なものである。したがってこれを見られた方々は、「天のしるしの大パレードがあった。」という言葉でのみ表現されたのであった。

同日（九日）、I氏の早朝の夢。

「宇宙から来られた女性の宇宙人に連れられて、何十人もの子供達が一つの大きな家（地球）に入ってしまった。次にその女性の宇宙人のみがその家から出て来られて、I氏と並んで歩いて家から遠ざかって行った。」

朝、起きる直前に、次のテレパシーを受けた。

「新しい人達と入れ換えるのです。」

同日（九日）、午後一時三〇分から約一時間の間に、K夫人は、夢の中で次の光景を見、かつテレパシーを受けた。

「地に儀式が行われる時、神様の席のお方が降りられて参加されます。」

そして光り輝くお姿を見せて頂いた。

儀式が終わって天に昇られる時、天には更に偉大な光の御方が右に御一方、左にも御一方おられたが、左のお方の姿は見えなかった。

五月一日、午後四時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の神様と、火の神様、水の神様、空の神様、風の神様（自然を司どる神々様）は結ばれていますので、後のことは貴方々の心配はいりません。ただ天の神様に祈れるだけ祈りましょう。」

後は私達が貴方々の目覚めをじっと観察して行きます。

そしてみずから真に目覚める方は、神様の大愛に気が付き、涙することでしょう。

そのとき、そのとき、貴方々はただ忍で暖かく見守って行きましょう。

戦いは忍の戦いでありませぬ。

地球最後の儀式を行うが良いでしょう。」

五月一日、午後六時、自宅で、I氏は、^{イコール}「壮嚴なる終わり」を想わせる、^{イコール}「壮嚴なる始まり」を想わせる、天空に画がかれた光景を見る。

西の山々に入らんとする太陽を要として、雲で作られた扇型の羽根が（丁度孔雀の羽を広げたように）東方に長く広がっている。これを見た時、彼は、^{かなめ}「壮嚴なる終わり」なる始まり」と感じたのであった。

五月二日、大学での講義を始める前、午後三時一五分、I氏は空を見た。彼は、さる四月二日にも同じ場所、同じ時刻に雲で出来た文字をみているが、今回も天空の同じ位置

に、⊕とその右にSの形が現われた。この頃、I氏の見たものを整理してみると、次の通りである。

四月 二日 + A Z 宙AZ様は、これから地においても、地のサナンダ

五月二日 ⊕ S としてお働き下さると、後日は思ったのであっ

五月一四日 ○ S た。

同日（一二日）、K夫人は、午前中に三回、次のテレパシーを受けた。

午前九時三〇分。

「サナンダ様は地球創生の時から護って下さった。幾たびも時と所とお姿を変えて現われて護って下さった。サナンダ様の御悲しみ、御苦しみ、御悩みが地球の山川草木にしみて、血となり肉となって地球を護って来たのです。」

個を離れて遠くへ去っていかれるサナンダ様（サナンダ様は、地球が神の国となることにより、個という段階から、個をうすめて無、即ち全体といういと高きみ位に昇華される。）地球の人々よ、サナンダ様の愛の深さを忘れないように。」

午前一一時。

「神様は地球を涙の愛で抱きしめられ護られて来た。ルシファーを救うために、あえて目

覚められるまで大きな忍耐で待たれた。その間に地球人は傷つき道を誤って、進歩が遅れた。ルシファーは目覚められた。神様はすべての人類を許され救われる。人類に限らず、鳥獣魚虫、山川草木に至るまで愛のシャワーでいたわられる。神様は愛のシャワーをかけられる。愛のシャワーで洗われて、それでもまだ、汚れが残るとしても、シャワーは幾度も幾度も汚れの落ちるまでかけられる。愛はすべてを清め、新生する。まして神様の深い愛はすべてに浸透し、新生させ、すべてを甦えらせる。」

正午。

「ワンダラーの皆様ありがとうございます。すべてが終る時が来ました。ワンダラーは重い荷を背負って出陣して来たのです。ワンダラーはま、ことを盡して戦われました。他に誰がこれ程のま、ことを盡すことの出来る人がいますでしょうか。そのワンダラーの苦しみが終わる時が来ます。」

円盤に乗って、すべて帰る時が来ました。」

K夫人は四方に向かって深々と頭を下げ、声を出してこの言葉をのべた。

その時、天からラッパの音が響くのを聞き、涙が止まらなかった。

五月一四日、N夫妻、K夫人、I氏はW氏宅にての語り合いが終わって帰路についた。

N夫人は西に傾いた太陽を見た。その太陽の下にオレンジ色と水色とが混り合った、鮮やかな帯状の美しい雲を見た。その時、次のテレパシーを受けた。

「イエス・キリストをお迎えするのである。」

このテレパシーを受けたN夫人は、なぜか「その意味が理解出来ません。」と答えた。すると再び、「イエス・キリストを迎えること。」とテレパシーが入った。それでも夫人はこの意味が判らないと心の中でなぜか思ったので、この応答が数回繰り返えされたのであった。

このことについて、夫人は静かに考えをめぐらしていた。この時、心の中で、「AZ様をお迎えするのである。」と思う心が浮かんで来た。すると夫人の心はなぜか、「AZ様をお迎えするのであるということであれば、私には良く判ります。」と答えているのであった。続いて次のことが心の中に明瞭に判って来たのであった。

「先程からのテレパシーはAZ様からのものであった。AZ様自からが、自分を迎えないとはいえないので、それに気付かせるために、イエス・キリストと言われたのである。」とハッキリと判って来たのであった。

五月一五日、ワンダラー集まり、

「A Z様（サナンダ様）をお迎えする儀式」が行われた。

地球の最後の段階の時が到来したのである。いよいよA Z様がお降りになられて、これからの沢山の最後の一切をなさるのである。地にある私達ワンダラーは、A Z様のご指揮の下に一所懸命に進んで行くことを誓い、そのことを語り合った。

また、私達ワンダラーの師であり、頭かしらであるA Z様をお迎えしたことにより、私達はなにかホッとしたものを感じたのであった。

儀式の祈り。

天の神様ありがとうございます。

A Z様ありがとうございます。

この地球には、A Z様をお迎え出来る準備が整いました。これも、天の神様、A Z様始め、神々様、多くの宇宙の方々のお陰であります。

どうか、この地球にA Z様のお降り下さいますようお願い申し上げます。

いよいよこの地球の最後の段階を迎えるにあたり、A Z様をこの地球にお迎え出来ますことは、私達ワンダラー総員の大きな喜びであり、この地球の人類の喜びであり、すべてのものの喜びであります。

この地球にお降り頂いて最後の段階の沢山の御業をして下さいますA Z様に、心から感謝申し上げます。私達ワンダラーはA Z様とご一緒に進んで行けますように、一所懸命頑張ります。どうか私達をお導き下さい。

私達ワンダラーは、天の神様を祈れるだけ祈り、A Z様のご指導のもとに、真剣に進んで参りますことをお誓い申し上げます。

祈りを終えたあと、私達は、今日の日のために、一九六〇年サナンダ様（A Z）より頂いた次のメッセージを再び良くかみしめ味わい、その喜びを共にしたのであった。

『金星のサナンダという、金星の者が来ました。』

今は喜ばしい時です。

愛に満ちた者の、すべてに打ち勝つ時が来ました。

ただ真の神を信じて、愛の心を持って、恐れずに行きましょう。』

午後五時三〇分、N夫妻は円盤が飛来降下したのを目撃、その時夫人は次のテレパシーを受けた。

「A Z様はお降りになりました。」

五月一六日、W氏は、今朝六時一〇分に起床した。そして畑に行きたいと思ったので、そ

のまゝ、徒歩数分間を要する畑へ行つた。家から畑まで行く間、なぜか太陽が気にかかつてしかたがない。道々幾回となく太陽を眺める。太陽の本体を、今日は、僅かな時間であるが正面に見ることが出来る。畑仕事をしている間も太陽が不思議と気にかかる。手をやめては太陽をしばしば眺めた。その太陽は驚く程に美しく鮮やかに輝やいていた。今までに見たことも、感じたこともない、素晴らしい太陽であった。

その時、次のように直感した。

「AZ様はこの地球に降りられて、御業が始まった。」

N夫人は午前五時三〇分、誰かに起されたような気持で起床した。その時、

「太陽を見なさい」とテレパシーを受けたので直ちに太陽を見て驚いたのである。いまだかつて経験したことのない大きく綺麗な太陽が輝いている。すると、次のテレパシーを受けた。

「今までのことは、影であると、皆さんは気が付くことでしょう。」

第三章 この地球最後の儀式

— 鏗球王国の霊の世界誕生 —

五月一七日、朝六時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の神様、AZ様、神々様に、愛の靈感でこの地球をゆすって下さいますよう祈りましょう。」

この言葉は直ちに五人のワンダラーに伝えられ、真剣に祈られたのであった。

午前九時一〇分、次のテレパシーを受けた。

「ゆすって下さっています。」

このことを、去る四月一日、高知のN夫人は次のように霊視されていたのである。

(別冊(二)103頁)

不思議な静けさが心を満たし始めた時、一つの光景が目に見え始めました。

○、球です。まるい球、即ち地球です。

灰色にくすんで、にぶい色をしています。

ある地点に神様が厳然と立ち上がられました。その地点は、富士山のわくたまの地です。大きく御手を広げられました。そして左右にゆすぶられました。上下にも。

すると御手の先から不思議なエネルギーが流れ出し、わくたまの泉を流れて、それは四つのエネルギーとなり、地球全体に広がっていきます。「灌漑だ。」と思いました。

地球の東西南北から、神様のエネルギーが清らかな水のように流れ出し、そのエネルギーは地球の中央で結ばれ、更に地球の内部へとしみ通っていきます。

その神様のエネルギーが地球を網の目のように包みこんだ時、「ポッ」と灯がともったように透明な美しさで輝き始めました。

再び神様の御手が大きく動かされると、その御手の先へ宇宙からのエネルギーを呼び集められました。

静かな美しいエネルギーの流れが幾條も流れ集まり、それはまるい地球を幾重にも包みました。

「水ももらさぬ」という言葉が口をついて出ました。

神様の御手と宇宙からの暖かい愛のエネルギーに、地球はしっかりと抱きしめられたと思えました。

五月一日。

〇〇は、一七日の夜半から一八日の未明にかけて、次に行われる「この地球最後の儀式」と、この儀式の前に行われる「この最後の儀式のための準備の儀式」について考えていた。この二つの儀式にはAZ様が参加されることが知らされていたが、その意味について特に考えていたのであった。

先に行われる「準備のための儀式」は、「最後の儀式」のスケジュールを立案するためのものではない。これから「最後の儀式」が行われるまでに、私達は、魂の準備、心と意識の準備をし、そしてある段階にまでこの心と意識が到達していなければならぬと判って来たのである。特に、彼には、このことでの心と意識の目覚めと自覚が大切であり、自分はこの目覚めと自覚が出来ないと、この準備は進行しないのであると判るのであった。

この時、〇〇の心に閃いたことは……

「五月一日に天の神様より頂いた『み言葉』を発表することである。」これを発表することにより、「準備の儀式」は整い進行し、そして「最後の儀式」に至ることが出来ると判ったのである。(五月一日のことは9頁参照)

五月一日の天の神様のみ言葉を発表することはなかなかの勇気が必要とした。そこで彼は暫らく考えた末にこれを決意したのである。それは今日(一八日)午後二時近くであっ

た。

彼の決意が出来る、事態はとんとん拍子に運び、「この地球最後の儀式のための準備の儀式」を急遽その日（一八日）の午後五時三〇分から行うことに決定したのである。

「準備のための儀式」は、主役のワンダラーとAZ様が参加されて行われた。

〇〇はその席上、五月一日の出来事を語った。すると、突然N夫人は、「これで円盤に乗ることが出来るようになった。」と叫ぶように言ったのである。

そして夫人は今日（一八日）未明からの出来事を次のように語るのであった。

この日（一八日）、午前〇時、夫人はまだ仕事であった。この時、

「見えない円盤、見えない円盤」

というテレパシーを受けたが、意味を受け取れなかったので、「見えない円盤といわれなくても意味が良く判りません。」と答えた。

この時、心で見えると思うと不思議にもそこに白くて大きく、東西に広がった円盤があるの見える。心で見えないと思うと、その円盤はぼうつとかすれて、見えなくなるのである。続いて夫人は心の中で次のような言葉を発して自分自身に語りかけたのである。

「この見えない円盤をどうするのか？」

「この円盤にどのようにして乗るのかな？」

「では一体、この円盤に、どのようにして乗って帰るのかな？」と思った。そのとたん、

「天の神様、AZ様、神様の指示されます円盤に皆さんが乗れますように祈りましょう。」とテレパシーを受けたのである。

N夫人は早速W氏に連絡しようと思ったが、もし万一にも間違ったテレパシーであったら大変であると思い、天に向って、

「もしも、これが間違ったテレパシーであったら大変なことになるので、私はこのことをWさんには連絡は出来ません。」と答えたのであった。

それから夫人は、天の神様に次のように祈ったのである。

「皆さんがあわてて間違った円盤に乗らないように、また、正しくない円盤にみな乗らないようにお守り下さい。」

すると、

「そのような心配はいりません。」と答えられた。

しかし夫人は、なぜかW氏にこの一連の出来事を連絡するのは暫く待った方が良い、なにかしら自然と判り語れる時が来ると思ったのである。

その日（一八日）午後二時頃、〇〇よりN夫人は、「今日の午後五時三〇分より、準備のための儀式、を行う」ことの連絡を受けた。そのとたん次のテレパシーを受けた。

「今日行われる準備のための儀式により、目に見えないこの円盤に、皆は乗ることが出来るのである。」

このようにN夫人は今朝未明からのことを語り、今の「準備のための儀式」で〇〇が五月一日の出来事を語ったことにより準備は整い、「これで皆が円盤に乗ることが出来る。」と閃く^{ひらめ}靈感で知ったと語ったのである。

こうして「準備のための儀式」は終わった。その後N夫妻は、この会場を出た道路で、会場の上空に大小の二機の円盤が滞空しているのを目撃した。

N夫妻は、この大小の二機の円盤は、自宅の近くで度々目撃し、写真にも取ったことのある円盤であると確認したのであった。

五月一九日、朝七時三〇分、N夫人は太陽を見たいと思って外に出た。太陽を仰ぎ見た時、次のテレパシーを受けた。

「さあ！皆さん、太陽円盤に乗って帰りましょう。」

昼一二時三〇分。

「さあ！皆さん、太陽円盤に乗って帰れる時が来ました。」

一四時一五分。

「さあ！皆さんの太陽円盤に乗って帰りましょう。」

私達ワンダラーは天の神様から使命（地球のカルマを真で解く使命）を頂いて、この地球に遠征して来たのである。

今は地球の霊の世界（神界と申そうか）におけるカルマは解けて終わり、円盤に乗って帰るのであると判るのであった。

ここに地球の霊の世界（神界）のカルマは解けて終わった。しかし、ワンダラーがそれぞれの身体^{からだ}に持つカルマが解けたのではない。やがてワンダラーの身に持つ不必要なカルマを真で解く時が来るであろう。

W氏は、この時、一九六〇年一〇月中旬のことを思い出した。当時地球での戦いはいよいよ最終段階に至っていた。この時のワンダラーの指導者某氏は、円盤に乗って帰ることになっていた。しかし、彼はいろいろの理由から帰ることを延ばしてもらおうように神様に頼んだのであった。

これが、世の終りの戦いの方向を誤って進むことになった大きな原因の一つであったことを今にして理解するのであった。

当時（一九六〇年）、このことについて、AZ様は次のように私達に語られた。

AZ 「彼（ワンダラーの指導者）の命（役目）には限りがあります。」
 質問 「彼の命が終わるのは一〇月一六日ですか。」

AZ 「イエス。」

質問 「では最後のPR（儀式）は誰がやるのですか。」

AZ 「彼です。」

質問 「一六日に命が終わるのに、それでも出来ますか。」

AZ 「出来ます。彼もワンダラーですから。」

質問 「では彼の葬儀はどのようにしたら良いですか。」

AZ 「彼は今度のことです。死めませんから天を仰いで待つのです。」

AZ 「Wさんは彼のことを皆に知らせるのです。」

彼はカルマが終わり、彼の「霊」は円盤に乗って帰ることになっていた。しかし、彼はすべてを神様にお任せ出来なかったためか、あるいは肉体が帰ると思ったのか、それは死につながると思ったのか、それとも後に残ったワンダラー達の進む道が判らないことを心配してか、いずれにしても帰ることを延ばして頂くように頼んだのである。（帰ることを延ばしてくれということは、帰ることを拒否したのと同じ意味である。）

AZ様から「Wさんは彼のことを皆に知らせるのです。」「彼は今度の事で死ぬのではありませんから天を仰いで待つのです。」と教えられていながら、W氏にはこの意味が正しく理解出来なかった。特に彼の「霊」が帰り、彼の「霊」は天の「神様の席の方」を奉戴してこの地球に帰って来る（天を仰いで待つ）のであるということは、当時の目覚めの足りないW氏には判らなかつたのであった。そのため、当時彼を助ける役にあつたW氏には、これが出来なかつたのである。

もし彼が一六日円盤に乗って帰っていれば、天において次のことが彼のために用意されていたのであった。それをW氏は皆に語る役も頂いていたのであった。

「帰られた彼（ワンダラー某氏）を、神は愛と変らぬ叡智を持って迎えられます。」

彼は神の前で、神の声を聞きます。ワンダラーとしての今度のこの働きは大変立派であつたこと、多くの輝かしい地球での仕事により、天の神の前で「太陽の方」の位をささげられます。彼の後は、皆さんの仕事が良く出来ますから安心して下さい。」

という内容のものであった。

しかし残念なことには、オリオン、ルシファアの激しい攻撃にあり、また、廻りのワンダラー達の真の助けが足りなかつたこともあり、かつまた、彼自身が、神様を唯一の頼りとして、天の声と地の自分の意識と肉体の心の一つにして進めなかつたのである。

ワンダラーは、天の声を聞き、意識と肉体の心は、天と一つになって進まない、役が

果たせないのである。

ワンダラーの道は剃刀かみそりの刃の上を歩むが如く、極めて危険な道であり、生命いのちを賭しての道であると、かつていわれたことを思い出す。

天が語り、魂が語っていても、真に目覚めていないワンダラーの意識の肉体の心は、これを拒否することも、また反対することも、違った道を進むことも出来るのである。

天の声が聞けず、魂の語っているのも聞けず、意識の肉体の心が語るままに進んで行く、道を誤まり、ワンダラーの魂は泣く泣くカルマを作って行くのである。カルマが身につくことによりカルマが語る声が聞こえ、ますますカルマを作って行くのである。

これを助ける役を頂いていながら、この役が果たせなかったことを、申訳なく極めて残念であったと、W氏は、当時を思い起こして涙して詫びるのであった。

さて話を現在（一九七七年五月一九日）に戻そう。

同日（一九日）、二〇時四〇分、N夫人は地響きを伴った物凄い音が「ドーン」と鳴り響くのを聞いた。それは巨大な火花が足元で打ち上げられたかと思うほどの大きな音であった。同時に音ばかりではなく、ある靈感を感じ、胸は早鐘となり、外に飛び出した。しかし、まわりにはなんの変化もなかった。すると次のテレパシーを受けた。

「さあ、この太陽円盤に乗って帰れますよう祈りましょう。」

五名のワンダラーの方々は、これを一つの心で真剣に祈られたのであった。

そして夜半、天に帰った。「私達は太陽円盤に乗って帰った。今、天の神様の御前にいる。天の神様からお言葉を頂いているのである。」

五月二〇日、W氏はいつもより一時間くらい早く、朝六時頃に起床した。それはなぜか今日は天のしるしが見られると直感したからである。

朝の散歩に家を出たところで、北の空をなにげなく見た。その時「鳳凰」と直感した。北の空一杯に、大きく羽根を拡げ、天空をかける「鳳凰」の舞う姿を見たのであった。W氏は立ち止まり、暫くそれを眺めた。散歩の足は北に向い、山道の林の中を通り抜けて、天空を展望出来る場所に出た時には、「鳳凰」の舞う姿は消え去り、太陽を中心として、東西につらなる巾広い帯状の雲が現われていた。

これを見たW氏は、「太陽への通路であり、掛橋である。この道を通って、私達五人の者は天へ行った。これは、そのことを示す天のしるしである。」と直感した。

暫くこれを見ていると、太陽への掛橋の雲の右横側に、これも巾広い帯状の雲が現われ、

東の端で掛橋の雲と結ばれた。両者は西へのびるに従って互いの広がりを増し、天空一杯に巨大なV（勝利）の字を画いたのである。この光景は暫く続き、やがてVに開いた先端は、丁度、扇をすばめる様にせばまり、重なり合っついに巾広い一本の帯状となり、西から東へ天かける道となったのであった。これは、朝の一時以上になた天のしるしであった。そしてこの雲が消え去ると、天空は晴れわたった青空に変わって来たのである。同日（二〇日）、朝七時三〇分、N夫人は、鳳凰の舞う姿を見た。太陽の輝きは、今日は格別に美しく感じた。更に太陽の廻りに水玉模様が輝く光景を見て、なにかしら喜びが湧き上がり、涙したのであった。

夫人は、天の神様に次のようにお礼を申し述べた。

「ここに至るまで、お導き頂きありがとうございます。これから最後の最後まで役が良く果たせますようお導き下さい。」

その時、円盤が三機現われて、Vの文字を画いて飛び去るのを目撃した。他にも沢山の円盤が天空を飛び交っているのが判った。

午前一〇時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「命（使命）を受けて帰ります。」

この意味は、五人のワンダラーの地球でのカルマは終わり、天に帰り、天の神様からみ

言葉を頂き、新しい命（使命）を頂いて再びこの地球に帰って来ることを示されたものであった。

そのあと、次のテレパシーを受けた。

「傍証の役をして頂いた方々は、役が終わって帰る時が来ます。」

この方々は、I氏、K夫人、高知のN夫人の三人の方々を指しているのである。

続いて次のテレパシーを受けた。

「五人の方々は別の円盤に乗って帰るのです。」

続いて次のテレパシーを受けた。

「他の人達、皆さん全員（他の遊星から来られた方々全員）がサナンダ様の指示に従って円盤に乗って帰れますよう祈りましょう。」

「AZ様は、これからこの地にてサナンダ様としてお働き下さいます。サナンダ様の働きは始まっています。」

「サナンダ様に祈れるだけ祈りましょう。」

「五人のワンダラーの方々が円盤に乗りましたので、他の方々は安心して帰れます。」

同日（二〇日）、午後九時一〇分、

「サナンダ様の指示されます円盤に、傍証の役をされています方々が無事乗れますよう、

皆さんが一つになって祈りましょう。」

五人のワンダラーの方々は、一つになって真剣に祈られたのである。

午後一〇時五〇分、N夫人は前より小さいが同じようにドーンという音と共に、円盤が飛来降下したのが判った。

午後一〇時五五分、

「傍証の役の方々（三人）は、無事にその円盤に乗られた。」と確認するテレパシーを受けたのである。

この日（二〇日）、高知のN夫人は、午後から夕方まで、喜びを表わす、天のしるしのパレードが天空に次々と繰り展げられて、目を空から離すことの出来なかった一日であったと報告されている。

五月二一日。今日も早朝から天のしるしの大変に多い日であった。今日は特に、鳳凰の舞うのを多くの方々が見られた。

W氏は早朝の散歩の時、天のしるしを見て、三人の傍証の役の方々は、「無事円盤に乗って帰られた。」と直感したのであった。

続いて私達五人の者は、サナンダ様に、「他の人達全員（他の遊星からこられた方々）

が円盤に無事乗れますよう」祈ったのである。

この日（二一日）、朝七時三〇分、N夫人より次の内容の電話が〇〇にかけられた。

「来る六月一九日（内定）に行われる、この地球最後の儀式^①について、まだ貴方の準備が整わぬ処があります。貴方の準備が整わないことにはこの儀式は出来ません。」

彼は、これを聞いた瞬間心に閃いたものがあり、そして、このことであると判った。それは、今年の三月頃よりテレパシーと靈感で知らされていた。特に三月二〇日の「エクアドルの儀式」の前後より、この想いは強く、テレパシーや靈感によっても度々、このことを受けていたのであった。

更には傍証の役の方々からも、このことをハッキリと書いた手紙をもって知らされたこともあった。

しかし、彼は、このテレパシー及び靈感が間違ったものであったら大変なことであると考え、度々受ける靈感やテレパシーに対して心の礼儀もなく、これをやりすごしたり、押し込めたりして今日まで来たことを、振り返って見て判ったのであった。

これが判った時、彼は、そのことを意識の世界で、肉体の心で完全に自覚し、確信したのであった。そして、これを発表し宣言せねばならぬと判った。これが出来た時、儀式の準備が完全に整うのであると確信したのであった。

早速、彼は、天の神様に、このことを目覚めと自覚が意識と肉体の心に出来たことを報告し、自覚が遅れたこと、今まで度々の靈感やテレパシーを頂きながら心の礼儀のなかったことを深くお詫びしたのである。すると、全身にやわらかい素晴らしい靈波がかけられたことを感じた。

これを発表宣言することに心が定まった時、今から一四年前、（一九六四年）湧玉の戦い（儀式）をなさり、地球新生の礎を創られて、使命を終えられたあるワンダラーのことを思い出した。

当時（一九六四年の初め頃）、その方は、大変言いにくそうであったが、ハッキリと彼に、『次の戦いで、私はAZの役をやります。』と言われた。当時、この地球での戦いがいつ終わるとも知れない時であったので、彼はこれをすぐには理解出来ず、判るまでに一ケ年余りの時間を必要とした。それでもその方は語られたのであった。彼は、これによって、語ることに、即ち宣言の重要性を改めて認識させられたのである。

これと同様に、彼には、意識の世界で、肉体の心で、このこと、目覚めと自覚を宣言することにより、このことが成るのであると判ったのであった。それは次の宣言であった。

「私は、神様の席の者であり、この地球最後の儀式において、AZ様と共に、天の神様と共に、この儀式を行うのである。」

このことに関しては傍証の役である高知のN夫人が四月九日付の書翰で、彼に次のように書き送られていた。

「―前文略―このように儀式が次々と本当に神様のみ心のままにはこばれること、またはこぼれて来たことは、神様の御力とはいえ貴方様のお役目の重責を見事に果たされて行く姿を、このところ三年間を超える御つきあいでしたが、見せて戴き、感じさせて戴きました。」

人には話せぬ御苦勞も多々あり、また時には人がなんとおうとも断固として進まねばならぬ時もありましたことでしょう。

殊のほか強く感じましたことは、神様の靈感に対しては、それが異様と思えることにも礼儀正しく御受けになられたことです。本当に有難いと思いました。

エクアドルの儀式の準備の始まる頃より、私は貴方様が神の席の方であることに気付きました。そして皇室を除くワンダラーの中であって、聖書の例をとっていうならば〇〇の天使であることに私は気付きました。」

さて話を五月二一日に戻そう。

午前八時五分、N夫人は、「他の人達、皆（他の遊星から来られた方々全員）が乗られる円盤が飛来降下した。」と判ったのである。

午前八時二五分、次のテレパシーを受けた。

「皆さんは、この円盤に乗って帰りました。」

今日も天のしるしの大変多い一日であった。夕方西空に、「鳳凰」の舞う姿を見た。

この日(二一日)、午後七時三〇分、W氏は、来る六月一九日に行われる「この地球最後の儀式」の案内状の発送準備を完了した。そして、これを天の神様とAZ様に供えて、この儀式が無事出来ますようにとご加護を祈った。

丁度、同じ時刻に、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の道は地に開かれました。」

N夫人は案内状の準備が整ったので、「地に開かれた。」と判ったのであった。

午後一時。

夜空に浮かぶ「鳳凰」の舞う姿を見た。その時、次のテレパシーを受けた。

「天にもあり、地にもある最後の儀式を行います。これから皆さんの働きをじっと観察して行きます。」

五月二二日。N夫人は午前六時二〇分に目をさました時、次の靈感を受けた。

「今までは△の原理であったが、今日からは▽の原理が始まった。」

〇〇は、朝七時三〇分、天の神様とAZ様に次のように祈った。

「大きな自覚と目覚めを得ました。これからは深い自信と確信をもって最後の儀式にのぞみます。天の神様のご加護とお導きとお守りをお願い致します。」

こう祈っている間、素晴らしいやわらかい霊波を全身で感じ、涙がとめどもなく流れ落ちたのである。

五月二三日。今日も早朝から沢山の天のしるしがあった。

午前六時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「この地は浄められました。」

この意味は、儀式には聖なるお方が、そして、偉大なる方々が降りて来られるので、そのためにこの地は浄められたということである。

午前七時。

「矢は放たれました。」

この意味は、「この地球最後の儀式」の案内状の発送をもって、神様の靈感の矢が放たれたことをいうのであった。

この日、早朝、〇〇はある不思議な衝動を感じた。暫くして、ある静謐と安らぎに包ま

れた。

すると、その方は天に昇って行く。そして、着いたところは金星であり、そこで、待っておられた二人の宇宙人に早速サナンダ様の前に案内された。

サナンダ様は、次に行われることのためにその方を待っておられたのである。

一人の宇宙人が「サナンダ様の御手は大切な手です。」と語った。その時、「御手をさわりなさい。」というテレパシーを受けたのでサナンダ様の御手をさわらせて頂いた。

その宇宙人は「それでは今から行います。」と行って別の部屋にその方を案内された。

そこでその方の身体はサナンダ様の身体の中に溶け込むように一つになった。この時「○はサナンダである。」と強く強く思ったのであった。

これが終わってその方はサナンダ様と一つになって金星よりこの地に降りて来たのである。その方は、天でサナンダ様を奉載してこの地に降りて来たことを確信した。そして、この地でサナンダとしての役を果たすのであると全身心でかたく確信したのであった。

その方は、再び身を静寂と平安に置いた。すると「○○はサナンダである。○○はサナンダである。」と深い実感が全身にみなぎりわたるのであった。

暫くして、なぜかこれと同じ自覚がある方も得られたはずである。だからその方からこの旨の連絡があるはずであると思っただ。

註 この体験をこの世の文字をもって表現するのは至難である。

午前九時。ある方から○○に電話がかけられた。受話器を取った○○には、尚もこの身体はサナンダであるという思いと感じが続いていた。そして、その方との会話が始まるに従ってもとの自分に帰って来たのであった。

一方、その方は、「私はA Z様と共にこの地に降りて来ました。」と○○に語られた。天に帰ったその方の「霊」は、天の神様を奉戴して、この地にA Z様と共に降りて来たのであった。

この日(二三日)、午後一時にN夫人は次のテレパシーを受けた。

「一般の方々(全人類)、全ての動物、一切のものが、ここに、もとの地に帰れますよう祈りましょう。」

この祈りは、五人のワンダラーの方々によって真剣に行われた。

午後八時五〇分。

「全ての動物、一切のすべてのものは、もとの地に帰れます。」

五月二四日、午前〇時一分、

「一般の方々も帰ります。」

午前五時一〇分、

「一般の方々、全ての動物、一切のものが、ここにもとの地に帰りました。」

午前七時三〇分。

「一般の方々、全ての動物、一切のものが、ここにもとの地に帰りました。すべての方々と結ばれて△▽となり、重なり合って☆は完成せり。」

餅この場合の△は一般の方々全ての動物一切のものを表わす。▽は

すべての方々（ワンダラー、他の遊星から来た方々）を現わす。

W氏とN夫人は昨夜から今朝にかけて余り眠られず、特にこの時間の前後は祈りですごしていた。

この朝（二四日）も天には多くのしるしが出ており、それを見た時、

「一般の方々、すべての動物、一切のものがもとの地に帰った。」と直感したのであった。

五月二五日、午後七時三〇分。N夫人は天の神様に祈りを捧げていた。その時、次のテレパシーを受けた。

「新しい美しい木（キワンダラー（気））を育てて行かれますように……。」

同日（二五日）、午後九時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「乗り物に乗って帰りました。鳳凰の鳥に乗って帰りました。」

「これからは皆さんの働きが愛に包まれて始まります。」

「鳳凰という鳥の乗り物に乗って帰ったのであります。」

夫人はこれに対して、「最初は円盤に乗って帰ったといわれました。今日はその円盤を鳳凰という鳥の乗り物といわれました。その違う理由はなんですか。」と問うたのであると、

「世の混乱を防ぐためでありました。」

と答えられたのである。

W氏にはこの意味が良く判った。「空飛ぶ円盤」という名称は、フライング・ソーサーを日本訳したものであって、何れも地球で勝手につけられた仮称である。正式な名称はまだ見あたらない。だから一般に用いられている「空飛ぶ円盤」という俗称をもって我々に語られていたのであった。

さて、この数日間、ほとんど毎日のように、ワンダラー達は、「鳳凰」を天のしるしで見ていたが、それもこの理由があつてのことであつた。

この鳳凰という霊鳥に乗って、すべての「霊」は帰ったことを知ることが出来たのであ

った。

御ここで述べた「霊」は、たましい、霊体、幽体を指すのではない。

五月二六日、午後八時二五分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「契約の箱は完成しました。」

午後八時四五分。

「神の愛によって、地球は、全人類は救われました。今は喜ばしい時です。」

五月二七日。

太陽の輝きが去る一六日より特に強く美しくなったことは前述したとおりであるが、今朝の太陽は更に一段と輝きを増して美しかった。

午後一時一〇分より二〇分までこの強く美しく輝く太陽をN夫人は見ていたが、さらに太陽に次のような光景を見、かつテレパシーを受けた。

その太陽から菊の御紋章のように十六本の虹の光が発しているのである。一本、一本の虹は、それぞれが七色に輝き、その美しさは、この世のものとは思えない。余りの美しさに、夫人は、この十六方位に輝く虹の光をうっとりとして暫く見ていた。すると十六本の虹の

光が、太陽を中心として虹のトンネルを成したのである。夫人は、太陽と地球はこの虹のトンネルを通して結ばれたと思った。この時、次のテレパシーを受けた。

「心の目と太陽とが結ばれて、虹のトンネルが出来上がりました。」

「太陽から流れ出る虹の霊波は、愛で地球を包みました。」

「今は太陽と地球と一つになって進んで行っています。」

「地球は正しい位置となりました。」

五月二八日。今日も朝から一日中天のしるしの多い日であった。

N夫人には天の神様に祈りたいという感情が湧き上がって来る。そこで、靈感の儘に次のように祈ったのである。

「新しい地球は、ここに準備が完全に整い出来上がりました。これから新しい地球と太陽と一つになって進んで行けますよう、天の神様お導き下さいますようお願い致します。

私達は、これから良く働きが出来ますことを誓います。皆が一つになってこの新しい地球を守って進んで行きます。

天の神様ありがとうございます。」

この頃の私達は、「最後の儀式」についていろいろ考え、準備を整え、「この儀式が正しく出来ますように……」と天の神様に祈れるだけ祈っていたのである。

五月三〇日、午前一〇時三〇分。

「（この地球最後の儀式は、）天の神様が行いますのであとのことは心配いりません。安心して下さい。」

W氏はこれを聞き、自分としての出来る限りのベストを盡さねばならぬと決意した。そして同時に深い安心感をも得たのであった。

五月三十一日、午前五時一九分、W夫人は霊夢を見た。

いつものお方、神様と思われる尊いお方が現われて、「この地球はとても綺麗に変わりました。私と一緒に歩きましょう。」といわれた。そして、夫人は神様につれられて行った。

「ここが新しい地球の入口です。」と教えられた。その入口は真四角の箱のようであった。（旧契約の箱が新しい地球の入口となっている。）

その入口のまわりには、美しい綺麗な花が一杯に咲いて、キラキラ輝やいている。夫人はその入口から入り、新しい地球の中を神様と一緒に歩いた。この新しい地球は、どこも

かも極めて美しく綺麗である。

山、川、海、自然のすべてがキラキラと輝やき、まわりには花が一杯に美しく咲いている。

そこには沢山の人達が仲良く、明るく、暖かく、元気に働いている。皆の働く姿は実に真剣そのもので、大変素晴らしい光景であった。

この新しい地球を、夫人は、「それはそれは、美しい素晴らしい御国でした。」と語った。この御国は、「こんな素晴らしい御国が本当に地球だろうか。」とうたがいたくなる程に、今の地球と比較すると大きな差があった。

夫人は、この新しい地球、鏗球王国は神様の身体であることを示し教えられた。これは鏗球王国の霊の世界（神界）を見せられたのであった。



去る五月二〇日～二一日に、鳳凰という霊鳥の乗り物に乗ってもとのみ国に帰られたすべての人々（他の遊星から来た方々）の「霊」は、浄められて、新しい地球、鏗球王国に帰って来るのである。

また、五月二三日～二四日にかけて、（本来の地球）もとの地に帰られた全人類、すべてのものの「霊」

は、浄められてこの新しい地球、鏝球王国に帰って来るのである。

しからは、今ここにある地球、この意識、肉体は一体何者であろうか。それは悪いカルマを持った古い地球であり、実体のない影の地球である。また悲しきカルマをそれぞれの身に持った意識であり肉体であって、実体なき影の自分であり人間である。

これからは、ワンダラーを始めとして全人類がその身に持つカルマを解き、目覚めて、生まれ変わり（生まれ変わりは「たましいの世界」と「形（霊界）の世界」において行われる。）、新しい体にならって、鏝球王国にある「霊の世界」に繋がりに、鏝球王国に移行する。カルマが完全に解け、目覚め、気付いて生まれ変わった時、そこに鏝球王国があり、既にそこに住んでいる自分に気付くのである。

その時、神様から死の霊感を頂くのである。

次に、I氏が受けられた「死の霊感」を紹介する。

五月一〇日の早朝。

夢の中で肉体死の時の気持（心）が示された。

「少々の肉体的苦痛の中で、心に高揚と安らぎが芽生えて来る。次第に苦痛は遠のいて、心の高揚と安らぎは広がって行った。」

五月二〇日の早朝。

「『死ぬ』という現象は、何かある本質的なものが、ある変化をすることによって起こる。その変化とは、斜面をスーッとすべるように、力を加える必要のない自然の変化であり、そのままにしておくことによってしまう変化である。

一方意識又は肉体の『変化』も、何かあるものが『死ぬ』時と全く同じ変化によって起こる。

意識又は肉体の変化は、本の頁が一枚めくれるような変化であるが、それがすべるようにスルッと起こる。そのままにしておけば自然になつてしまうのである。

このように、『死ぬ』ことと、意識又は肉体が『変わる』ことは、本質的に同じなのである。」



五月三一日、N夫人次のテレパシーを受ける。

「契約の箱の中から愛のシャワーがかけられる。」

「契約の箱の中に巻物がある。」

六月一日、高知のN夫人は次のテレパシーを受けた。

「○○が焼けます。」

去る四月一七日は夢で知らされたが、今回はテレパシーで知らされたのである。

同日（一日）、午前六時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「矢が放たれる。」

これは神様の霊感がある方に放たれたのであった。その方は、「最後の儀式」に大切な役をなさるからである。

一方、あるワンダラーは、三〇日から一日にかけて、意識は高揚し、偉大なる存在としての意識、神様の席の方としての意識が湧き上がって来るのであった。

このわけは、帰られたその方の「霊」は、神様のワンダラーであるカミラ様を奉戴して、この地球に降りて来られるからであった。

その日（一日）、午後五時一〇分、N夫人は次の光景を見かつ霊視した。

太陽は西に傾き始めた。その西方の空に、帯状のとても美しい雲が三層、南北につらなっている。その雲の中ごろに、髪の毛を長くたらしめた美しいカミラ様がおられる。カミラ様は○○の身体に移り入られたことが判った。これが判った時、カミラ様の姿は消え去ったのであった。

午後六時三〇分（一日）、次のテレパシーを受けた。

「カミラ様はお降りになられた。地球最後の儀式が終わりました時、そのあとは本当の神の国となります。」

今までは苦しい働きでありましたが、カミラ様も大変お喜びであります。

美智子妃殿下も美しいお姫様と変われり。

皇太子殿下は天皇に即位されます。」

六月二日、午前二時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受ける。

「カミラ様の愛の霊波がかけられる。」

この時、濃いブルーの霊波が地球にかけられた光景を霊視した。

午前四時、再び……

「カミラ様の愛の霊波がかけられる。」

この時、薄い綺麗な水色の霊波が地球にかけられた光景を霊視した。

午前一〇時。

「契約の箱の中の巻物を広げますと、そこは、カミラ様の涙の愛で一杯でした。その涙は暖かい涙でありました。

愛のシャワーはカミラ様の涙であり、

水色の霊波は、カミラ様から流れる愛であり、この地球はカミラ様の涙の愛でぬらす地球となり、その涙は今^{／＼}かけられました。」

六月三日。今日も一日中、驚くほど沢山の天のしるしを多くの方々が見られたのであった。その中の一つを次に述べることにする。

午前七時から七時三〇分、W氏は自宅の応接間から南の空を眺める。この応接間からは南の空が広く展望出来る。大空は文字通りの一片の雲もない青空であった。朝七時、突然南西の空の彼方に一片の雲が出来た。そして、その雲は、鳥[〃]の姿に変わった。それを見た瞬間、W氏は、錦鶏[〃]と直感した。錦鶏[〃]は、最初は遙か彼方[〃]にあった。それが次第に東方に進みながらこちらに近づいて来る。その、錦鶏[〃]の下に、円盤[〃]が現われて、雲の道を作って東へ、錦鶏[〃]よりやや先を同じように進んで行く。この錦鶏は次第に大きくなり、目前にまで達した。その時は、最初の十数倍に大きくなっている。この錦鶏は、視界から外れる寸前になって初めて姿を変え始めた。この間約三〇分であった。

錦鶏[〃]は新しい地球鏢球王国を意味しているのである。

午前一〇時頃、西空一杯に雲で巨大なZの文字が画かれた。また鶴が舞って天空に飛び

立つさまも、天のしるしで見たのであった。

この日(三日)、午後二時。

主役のワンダラー集まり、「この地球最後の儀式」についての打ち合せが再び行われた。その席上にて、

「〇〇の「霊」は、タノアス様を奉戴して、この地球に降りて来た。」と報告された。

また、「〇〇の「霊」は、アトネ様を奉戴してこの地球に降りて来られた。」ことを皆が確認したのであった。出天の神々は、地のワンダラーをお使いになって地での働きを行われる。そして、天と地は一緒に進むのである。

この日(三日)夜半、K夫人は志賀高原の蓮池附近の旅館にて、次の霊夢を見た。

「池の中から三羽の白い鳥が飛び立って人の形となり、天へ昇った。」

この言葉が一晩中聞えた。

池の中から三羽の鶴が飛び立った。その三羽は、三羽鶴のように広げた翼の先がそれぞれ連なっており、一羽づつ順番に飛び立って行く。しかも次第に人間の形に変わりながら昇って行くのである。真白い鶴の姿が強く印象に残った。(出六月五日参照)

この日(三日)、午後六時、N氏は次のような天のしるしを見た。

天空には人の姿、鶴、亀が雲で大きく立体的に描かれている。

白い衣を裾まで垂らした、神様かと思われる極めて厳かにして立派なお方が立っておら

れる。手には長い杖のような棒を持ち、頭の部分や髪も美しく姿形は立派に判るのであるが、お顔の部分だけが透明であって見る事が出来なかった。

六月四日。

天に帰った五人のワンダラーの「霊」は神様の御前で次の誓いの言葉を申し上げて「新しい命メイ(使命)を頂いて」、この日、再びこの地球に帰って来たのである。

「私達、みなが一つになって鏢球王国を守り進んで行きますことを誓います。これから皆が良く役が果たせますことを誓います。」

この誓いの言葉は、この日の午後一時頃から二時にかけて、この地にある意識の肉体の心でも真剣に祈ったのである。この時、太陽から虹の階段がこの地に向けて降ろされ、五人の「霊」は降りて来たのであった。

今日も一日中天は沢山のしるしを私達に示された。

六月五日、午後一時一〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「皇太子殿下、美智子妃殿下、浩宮様は、白い鶴の乗り物に乗って帰られました。

この鏢球王国の門が開かれます。六月一九日の儀式を待っておみえになられます。」

同日(五日)、昼一二時五分、長野県諏訪大社に向う途中、K夫人は次のテレパシーを受けた。

「Wさんは土星の若者であった。若い魂ながら、地球を救いたいという命をかけての熱意が立派であった。その真の強さは純粹で、一抹の混りもなかった。サナンダ様はその真の熱情を良しとされて、強い加護の力を加えられたのである。」

午後三時頃、諏訪大社からの帰路、K夫人が空を見上げると、突如、細長い一筋の線があったという間に東から西に向かって画がかれた。それは円盤が作って彼女に見せてくれたものである。その雲の線は天空にただ一つ浮かぶ、人間の形をした雲とつながった。暫くすると一筋の線の雲は形を変えて、Vの文字になった。また人間の形の雲は、無限の記号∞に変化して、Vの中に入った。これらは丁度、太陽のすぐ下で画がかれたのであった。K夫人はこの天のしるしを考えた時、〇〇は無限の勝利の位置につかれたと直感したのであった。

六月六日、Tさんは、夕方天空に画かれた様々の素晴らしい天のしるしを見た。この時Tさんはある大きな自覚を得たのであった。その時、次の靈感を受けた。
「準備は天にも整い、地にも整った。」

これによって、六月一九日の儀式にお役をなさる主な方々の自覚は整ったのである。

六月七日、朝六時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受ける。

「カミラ様の大きな涙の愛がかけられる。」

その日（七日）、午後四時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「虹の円盤は目に見えない円盤です。虹の円盤であり、太陽円盤ともいいます。太陽から出る虹の円盤であり、鏝球王国、神様の世になることを知らせます。」

六月八日、朝六時三〇分、N夫人は太陽を見た。太陽に「了」の文字が画かれているのを見た。去る四月七日一六時三〇分、太陽に「完」の文字が画かれてから丸二ヶ月後の今日、「了」が書かれたのである。

先に（四月七日）地球が救われて、今日は全人類、一切のすべてのものが救われて、ここにすべてが「完了」したことを示されたのである。

ここに一切が救われたという意味は、地球、全人類、一切のすべてのものの「霊」が救われたことを指しているのである。

その日（八日）、午後四時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「それぞれの方が、忍の戦いをされています。皆さんの役が良く出来ますことでしょう。これから次の遊星（鏝球王国）に帰られましても、良く出来ますことでしょう。

月と星によって救われますことに、皆さんは気が付くことでしょう。」

その日（八日）、午後八時四五分。

「宇宙人の方々は大変喜んでおられます。貴方々の働きが良く出来ましたことを……。ワンダラーの方々ありがとうございます。」

すべての人々、人類、動物、一切のもの、ここに救われました。動物達は喜んでおります。

地球は生まれ変わったのであります。

このことに、皆さんは救われましたことに、気が付きますことでしょう。」

六月九日、午前六時三〇分、N夫人次のテレパシーを受ける。

「天の神様は、両方の御手を挙げられて、良しとされました。」

「この地球はすべて浄められたのであります。」

鏝球王国とは、この地球をいいます。古い地球をお返しして、新しい地球を頂きます。今までの悪いカルマが解け、地球は浄められ、透き通るような地球となりました。

皆さん、この新しい地球に帰り、再建して下さいますようお願い致します。今までの自分の肉体が変わったことに気が付きますことでしょう。」

続いて、その日に次のテレパシーを受けた。

「眠るワンダラーとなられた方々、さあ、皆さん目覚めましょう。」

ワンダラーの皆さん全員、気付かれますよう祈りましょう。」

この祈りは前々から行われていたが、この時より更に一層祈りは真剣に行われたのである。

六月一日。

この日、あるワンダラーの「霊」は、金星の一のお方、神様の席のお方であるテケル様を奉戴して、この地球に降りて来られた。

そして、そのワンダラーはテケル様と一緒にになり、また別のワンダラーはカミラ様と一緒にになって、ある儀式を行われたのである。

古い地球を今まで守り続けて頂いた〇〇は、古い地球と王冠を天の神様に返却された。

次に、新しい地球を守って頂きます〇〇に、新しい地球と王冠が移された。

この宣言が行われて、この儀式は終わった。

六月一三日、快晴、今日も早朝から天のしるしが多く示されたのであった。

午前六時三〇分、N夫人は天空に鶴が三羽飛んでいる姿のしるしを見た。暫く見ているとその三羽は姿を変えて、人間の顔になった。「神様かな」と思った時、次のテレパシーを受けたのである。

「皇太子殿下、美智子妃殿下、浩宮様は、この鏢球王国に帰っておみえにられました。

あとの方々も一緒に、ワンダラー、すべての方々、一般の方々、一切の動物、すべてのものが、ここに、鏢球王国に帰って参りました。

さあ、皆さん、目覚め会う時が来ました。

皆さん、目覚めましょう。

この鏢球王国と共に進んで行きましょう。」

その日（一三日）、午後七時三〇分。

N夫人は、西にしずんだ太陽を見た。その時、西から北へ雲の道が出来た。その道は更に開かれ広がって行く感じがした。その時、ピンクともオレンジ色ともいえるあるものが瞬間的に通りすぎた。それがなんであるかは判らないが、その時、次のテレパシーを受けた。

「ワンダラー全員が気付かれることでしょう。」

その日（一三日）、夜、T氏は静かに座して瞑想した。また、今までのことを、自分の歩んで来た人生を振り返って見た。この瞑想の中で、次の靈感を受けた。

来る六月一九日の儀式は、「岩戸開きであり、新しい世の幕開けである。」このことが判った時、T氏は、自分はこの儀式に喜びの心で参加出来ると確信したのである。

六月一四日、今日も快晴である。W氏は最近特に感ずることであるが、西の空における天のしるしが多くなったと考えていた。

W氏は、今日は会社までの道を約五〇分間、堤防にそって西へ歩いた。

西の空は花曇りで、薄黒く霞がかかった雲が帯のように巾広く地平線にそってある。その上空は快晴であった。花曇りの帯と青空の境い目に、真白い雲があり、丁度花曇りの薄黒い霞の帯の上に富士山の雪を頂いた頂上が見えているようであった。

西に向かって歩いて行くうちに、その雲（富士山の頂上）は亀の姿に変わった。その亀は頭をこちらに向けて歩いてくるようである。「亀だ、亀だ。」とつぶやきながらW氏は歩いて行った。暫くすると、その亀の姿が変化して二つの亀になった。それは少しの時間で消え去ったが、その時、附近に散らばっていた小さな雲が、アッ／＼という間に集合して、真白い雲で正三角形を画いた。それは暫く続いていたが消え去り、天空は雲のない青空と

なったので、空を見上げることなく川や堤防の草を見ながら歩いていた。ふと／＼上空を見なくなったので見上げると、いつの間に来たのか、巨大な亀が頭上にある。それを見た時、W氏は、「自分は亀の中に入り込んだ。亀と一体になった。」と感じた。
これをW氏が意識したその時から、巨大な亀の雲は変化し始めて飛散して行ったのである。

その日（一四日）、午後二時頃、N夫人は次のテレパシーを受けたのである。

「偉大なお方は今までは東にお立ちになられてみえましたが、今は西にお立ちになられておられます。

天の神様はお立ち上がり下さいました。

この地球は、鏝球王国、神の国となりました。

今までの悪いものは消え去り、ここに新しく天地が循環し、元の位置に復帰致しました。」

「〇〇〇〇のお役は終わられました。」

本日（一四日）をもって、来る六月一九日の「この地球最後の儀式」の準備はすべて整ったのであった。

六月一九日、午後二時より、「この地球最後の儀式」が行われた。

S氏が開式を宣し、続いてW氏は、今日の儀式を次のように語ったのである。

本日の喜ばしい儀式に、皆さんにはご参加下さいましてありがとうございます。
本日の儀式は、『この地球最後の儀式』であります。

この儀式は天の神様がなさる儀式であります。この儀式には、ワンダラーの頭であるA Z様即ちサナンダ様、ソクトル様、テケル様、カミラ様、タノアス様、アトネ様と神様の席の方が参加せられており、皆さんと共にこの儀式を行われているのであります。

さて、本日、「この地球最後の儀式」を迎えることが出来ましたのは、天の神様の愛により、地球は、全人類、一切のすべてのものの「霊」は完全に救われて、今は喜ばしい時となったからであります。

今日の「この地球最後の儀式」は、今までの経過のすべてを語ることであります。今まで語れなかったこと、秘められていたことはすべて語れる時が来たのであります。

ワンダラーの命が終わるまで語れなかったのです。今は命が終わりましたので、語るこ
とが出来ます。

天の聖所にある「契約の箱」の中に納められている太い巻物が出されて開かれるのです。この巻物には、地球が、全人類が救われるに至った今日までのすべての経過が書かれているのであります。

私はこの太い巻物を読み上げて、天の神様にご報告申し上げるのであります。見える形の上では、その極く一部しか語ることは出来ませんが、私の心は、この太い巻物の全部を読み上げているのであります。

これまでの経過の一部は、「オイカイワタチ」本書、別冊^(合本)一、別冊^(合本)二、の二冊に記述してありますが、この聖戦の始まった一九六〇年当時のことは、本に記述してありませんので、これを主として今までの経過を申し上げます。

一九六〇年（昭和三五年）の三〜四月頃。日本に生まれており、その当時に役を果たすべきワンダラーは、その殆んどの方々が一つの目的でその頃勢揃いしたのです。その勢揃いは見事なものでした。この当時に勢揃いして集まられたワンダラーは、当時の聖戦での主力となられるメンバーの方々ばかりでありました。このメンバーによって、この地球での聖戦が一九六〇年に始まったのであります。

勿論、大きな意味からすれば、地球創生の時から始まっていたことであります。が、一九六〇年はその決戦の時であったのです。

一九六〇年一〇月に入り、この決戦はいよいよ第十段階に入ったのです。言葉を変えれば、「世の終りの聖戦」もその大半を終え、あと一步のところまで来たのであります。

その時、オリオン・ルシファアの強力な妨害、誘惑、迷わしのテレパシーの攻撃は、実にすさまじいものとなったのであります。このすさまじい攻撃の手は、当時のワンダラーの指導者に向けられました。彼は身にカルマをつけ、ついにルシファアに倒されてしまったのであります。

当時、天の神様は、このことを次のようにいわれました。

悪く賢いサタンは、彼を我が身（ルシファア）と同じような苦しみで神から断とうと悪いテレパシーを彼に送っているのです。

サタンは彼の前を神のような顔で迷わすので、彼は判らず迷うのです。

サタンを神と間違えて、彼はカルマを作ってゆくのです。

このようにサタンの激しい攻撃を受けていた時、A Z様は次のようにいわれたのです。A Z『オリオンは私を倒すほどに強いのです。神様の助けを得るためには、真をつくすことです。』

このように私達を励まされました。しかし、ワンダラー達は、A Z様の語られる、またカミラ様の語られる真まことが判らず、倒されて、次々と神様から、A Z様から、カミラ様から

離れて行ったのであります。それがためにA Z様の苦勞とご努力は実に大変なものであったことを、その年（一九六〇年）の十一月一九日に、天の神様は次のように申されました。

A Zの私の世の中を造るための努力は大変なものです。沢山の悪い者が廻りに居るので思うように計画が進まないのは仕方ありません。

私は彼（A Z）をまわりからよく守るために、特別に私のやわらかい輝きを彼に与えました。

私は、よく役目を彼が沢山果たすのを、彼は真しんのワンダラー達の鏡だとたたえます。

夜はオリオンを刈るよう地球を駆けめぐり、変わる前の用意をし、高いところを円盤であちこち駆けめぐり、寝ずに毎夜、彼は戦っています。

真似ることの出来ない働きを、私はワンダラー達が分るのはいつのことかと待っています。心を私に向ける者が余りに僅かなので、大変彼は苦しんでいます。

このことをワンダラー達へ伝えるためには、彼をまわりの方（ワンダラー達）によく真まことで判るよう沢山伝えることですが、カルマが終わるまでは語れ

ません。

当時、私はこれを聞き、落涙滂沱として流れ魂を強く強くゆすられたのでありました。このような実に激しい戦いの中で、次々と倒れて行くワンダラー達を支援助けて下さったお方があります。そのお方は、神様のワンダラーで、金星でのみ名をカミラといいます。この地球での名前はY夫人です。

このお方、「カミラ様」のみたま、がいかなる大きな意味を持ってこの地球に降りて来られたかは、「オйкаイワタチ」の本書にも少し述べられています。

それは、現在地球（日本）にきているオйкаイワタチ（ワンダラーの中のオйкаイワタチの役をする者）の今までに辿って来た道は、必ずしも輝かしいものではなかったのです。現在の地球へ来るまでの数多くの遊星においては、多くのワンダラーがオリオンとそのかくれた系統の者の妨害により、魂に目覚めず、遊星のカルマに目覚めず、その結果、「わくたまの儀式、祝事の儀式」を行うことができなかったのです。そのために遊星のカルマが解けず、その遊星は高く変化できずに、大災害や戦争で世の終わりを迎えたのであります。それはワンダラーの失敗の世の終わりであったのです。

「失敗の世の終わり」によって、これまでの遊星で解けなかったカルマは次の遊星へと持ち越されてゆき、カルマは段々と増えてオйкаイワタチの手に負えなくなり、この地球においても失敗に終わることは明らかであったのです。

そこで、オйкаイワタチの頭であるAZ（サナンダ）様は、天の神様に、オйкаイワタチが今までのように方向を誤らないようにするための『特別の手段』をとって戴くように願われたのであります。そしてサナンダ様自身は地球上に二千年前救世主（イエス・キリスト）として出現され、オйкаイワタチに、悪の力（オリオン、ルシファー）がいかに強大なものであるかを自からの十字架の死によって教え示されたのです。

そして願われたこの特別の手段が、『カミラ』という御魂によって現われたのです。AZ（サナンダ）様はワンダラー全部を吾が子としておられ、自からの御子はお持ちでない。そこで、その偉大な御魂の降臨を、金星のワンダラーであるタノアス家に願われたのであります。

その御魂は天の神様から直接に分かれた「神様のワンダラー」で、『カミラ』とは天の神様のおつけになった御名であります。

天の神様にAZ様が願われた特別の手段である『カミラ様』のみたまの降臨は、次の二つの意味を持っていました。

(1)地球の新生の礎である「湧玉の戦い（儀式）」を神様のワンダラーとして行われるこ

と。そして、さらに、

(2) ワンダラーの中には、今まで辿って来た長い宇宙年月での多くの遊星での失敗において、自責の念から神様のもとに帰れず、また自分の遊星にも帰れず、さ迷う運をつけたもの、さらにはワンダラーの役目を神様に返上して宇宙をさ迷いつづけ、この時期に再び地球に生まれ変わった元ワンダラーもあり、その数は万たる数にのぼるのです。

これらの多くのワンダラー達が身につけたカルマを解き、真に目覚め、神様から頂いた地球のカルマに目覚めて正しくワンダラーの使命が果たせるように助けるためのもう一つの大きな意味があったのであります。

しかし当時（一九六〇年）の多くのワンダラー達には、この真は判らず、「カミラ様」の真も判らず、多くのワンダラー達は大別して次のように分かれてしまったのでした。

① カミラ様に助けられて、誤った道からふみ止どまって戦い続けた一部のワンダラーの方々。

② カミラ様に助けられたことも判らず、真の道が判らず、オリオン、ルシファーからの悪いテレパシーも判らず、進む真の道を誤ってしまった方々。

③ サタンと組み、カミラ様をサタンと攻撃して方向を完全に誤ってしまった方々。カミラ様に助けられたワンダラー達も、カミラ様の真が判らず、Y夫人の語る言葉とし

て心に残しただけで、それぞれが身につ持つカルマを真で解くことが出来ず、世の終わりの聖戦から、一人去り、二人去りして、残ったワンダラーもこの聖戦から離れて行ってしまったのであります。

このように、ワンダラーが聖戦の場から離れてしまったために、地におけるワンダラーの「この世の終わりの戦い」は、振り出しに戻ってしまった状態になったのであります。

多くのワンダラーを倒し、聖戦が出来ないように仕向けたサタンは、力と勢いを得て、攻撃の刃をカミラ様に向けて来たのであります。

カミラ様を倒せば、この戦いはサタンの勝利となることを、彼らは百も承知していたからであります。

この地球は今までの長い宇宙年月にわたるたび重なる失敗の世の終わりのため、カルマは累積して大きくなり、現在ではワンダラー達の力ではなんとも出来ない処まで来ていたのであります。その大きな地球の根のカルマを解くことは、「神様のワンダラー」が中心となり、沢山のワンダラー達がそれに力を合せて、初めて出来ることでした。

地球が良く高く変わるには、湧玉の戦い（儀式）を良く戦って、変わる湧玉を神様にお渡しすることでした。この湧玉の戦い（儀式）は「神様のワンダラー」が中心となられ、沢山のワンダラー達の協力があって初めて出来ることでした。

この頃、神様の席の方、テケル様より次のような励ましのお言葉を頂いております。
 テケル『明かされる、変わる湧玉は、カルマがよく真で解け、神様が判る湧玉となります。良く変わる真を湧玉へ捧げて変わる湧玉を神様へ渡すことが出来るよう、よく神様へ頼みなさい。』

テケル『湧玉は神様の顔のうつる地です。サタンを構えて湧玉へは入れぬよう、変わる戦いでよく戦いなさい。』

湧玉の戦いを終わらずに変わるとは、今日までの戦いが神様の戦いでなく、悪い者のための戦いであったこととなります。ワンダラーとして、これ程の苦しみはありません。

よく神様の湧玉を真で守り、変わる地球を神様の手に渡しませう。』
 次は天の神様のみ言葉です。

変わる湧玉を悪い者の手に渡すことは、私の悲しみです。

変わる湧玉わくたまは、ルシファーをカルマが倒す戦いで変わる湧玉を悪く変える
 ようなことがあるれば、変わる私の沢山の戦いは、良く戦うカルマを悪く戦う
 カルマとします。

このように、地球が高く良く変わるか悪く変わるかは、この「湧玉の戦い（儀式）」の如何にあるのです。ですからサタンは、地球が悪く変わるように（サタンの支配下に入ること）、ワンダラー達を倒して、湧玉の戦いが出来ぬようにするのです。そして、遂には、カミラ様に刃やいばを向けて激しく戦いをいどんで来たのであります。

このような言語に絶する厳しい戦いの中で、しかも、沢山のワンダラーの協力を必要とする、湧玉の戦い即ち儀式を、孤立無援の中で、カミラ様は、Yさん一家は行なわねばならないことになってしまったのであります。

この当時、天の神様のいわれましたことを私は憶えております。

『……いかに高く強い魂を持つカミラでも、一人では出来ないのです。』
 このように筆舌につくしがたい苦難の中で、しかも、ワンダラーは一人もこの儀式に参加出来なかったために、ついにYさん一家の家族同志の助け合いで、成しとげられたのであります。

それはいかに苦しみの連続であり大難事であったかを思い出します時、私は涙なくしてこれを語ることは出来ません。

当時のこと、カミラ様のこと、Yさん一家のことは、語れば際限なく続くのですが、どれも涙なくしては語れないことがその大半であります。今日はこれ以上は止めさせて頂き

ます。

この湧玉の戦い（儀式）のことは別冊（一）8頁に次のように書かれています。

わくたまの儀式終わる。

一九六三年一月、湧玉の戦い（儀式）終わる。永い永い宇宙年月にわたって地球を暗黒の力で苦しめ、人類を悪の力で誘惑し続けて来た外宇宙からの強大な悪の力は断られたのである。すなわちオリオンは地球から断られたのである。

この湧玉の大偉業を成し上げたカミラ様は一九六四年二月に地球を去り、金星に戻られた。これによって地球には新生の礎いしづえが出来たのである。

世の終わりの判る方は、世の中には沢山ありますが、カミラが語るわくた

まの真夜中の変わるカルマの判る方は、かくまわりにはありません。

このように本書の僅か一頁に書かれておりますが、この奥には涙の愛の長い長い物語りが秘められ、かくされていることを皆様知って頂きたいのであります。

湧玉の儀式は、この地球が高く変わるための根本であり、これが成されないと地球は良

く変わることが出来ないであります。また、この戦いが、ワンダラーの戦いの中で一番峻げわしい峻しい戦いであります。

この戦いを成されたことにより、地球の新生の道は開かれたため、あとの道は前の道と比較すれば平坦な道となって来たのであります。

私達は今、ここに喜びの「この地球最後の儀式」を迎えましたが、この奥にはカミラ様とYさん一家の大変なご苦労の上に初めて今日の日があることを、私はここに特に申し上げます。

私は今日の儀式のための、この原稿を書きながら、当時を想い、幾たび激しく泣いたか知れません。

私達ワンダラーは、カミラ様から沢山のことを学び、教えられ、導いて頂いたのであります。

「オйкаイワタチ」の本書の大部分は、カミラ様から学び教えられたものであります。それは「湧玉の戦い」が主として述べられてあります。

当時、多くのワンダラー達は、己れの果たすべき具体的使命をカミラ様から教えられたのですが、それを十分に理解出来ず、カミラ様の真が判らず、始んどの方々がカミラ様から去って行ったのであります。カミラ様から去ることは、天の神様から、サナンダ様か

ら去って行くことと同じでありました。そのために多くのワンダラー達は役が果たせず、僅かに戦い続けた者達によって、あとの道を十数年間の長きにわたって歩み続けたのであります。

私達はこの十八年間の歩みを振り返って見ました時、今にして驚くことは、私達ワンダラーの進める道がすべて、当時、カミラ様から教えられた「オイカイワタチの使命」を根源としており、この源泉から一切が展開しており、しかも終始一貫した道であり流れであったということでした。

「湧玉の儀式」を終えられたカミラ様は、「あとは皆さんで儀式を行って下さい。」といわれて、金星に帰られたのであります。

「オイカイワタチ」本書58頁に「儀式によって（地球と人類は）救われます。」とあります通り、この当時（一九六〇年）に勢揃いした多くのワンダラー達が、カミラ様の真が判り、真に目覚めていたら、「湧玉の儀式」と一緒にこの十数年間の長きにわたって行われて来た儀式も、さらに、これから先にも行われる儀式もその時同時に行われて、人類の苦しみも少なく、地球は良く変わることが出来たのであります。ここに想いを致すとき、返らぬこととは申せ、当時、カミラ様と多くのワンダラーの方々を結ぶパイプ役であった私（W氏）の目覚めが足りず、真の至らなかつたことを、今は申し訳なく、残念に思うのであります。

のであります。

さて、「湧玉の儀式」以後の経過は、「オイカイワタチ」別冊(一)(二)に記述してありますが、カミラ様は金星に帰られ、Yさん一家としての役はすべて終わったのであります。

この時から、戦い続けた僅かなワンダラー達によって、「生活の場」における戦いが始まった。そして、昭和四九年（一九七四年）に至り、ワンダラー達による儀式（「儀式によって」地球と人類はV救われます。」）が始まったのであります。それまでの各自のそれぞれの「生活の場」での戦いに加えて、最も大切である「儀式」が始まるにあたり、その頃から自然に一部の者たちには集まる機会が出来、再び一九六〇年の前半の頃のように、ワンダラー達の結束が固くなって来たのであります。

昭和四九年一月に入り、いよいよ、これから数多く行われる儀式が良く正しく行われるようにするために、宇宙人の方が次のように語られたのであります。それは「オイカイワタチ」別冊(一)16頁に次のように書かれています。

………続いて、その宇宙人は、

『木の実を保持すること。』

と語られ、さらに、これを注釈されるように、

「沢山ありました木も、現在はその中の二本だけになりました。その二本だけでも枯らさないように大切に保持し、守って頂きたいのです。」

と語られたが、意味がのみ込めないのです。「それは、どういう意味ですか？」と問うと、その方は、次のように答えられた。

「一杯ついていた木の実も落ちてしまっ、木の実のついているのは、今は二本だけになりました。重い木の実をつけている二本の木の実を、大切に落ちないように保持して頂きたいのです。」

N夫人には、この宇宙人の言葉の意味は十分に理解できなかった。しかし、宇宙人の方は、今はこれ以上のは語れないが、『二本の木の実』を保持することは極めて大切なことであり、この『二本の木の実』を保持することによって、地球のことは、自然に、楽に、すべてが解決できること、そして、もし保持できなかった時には、地球は大変なことになるということだけが、強く、明確に判るのであった。そしてこのことが、いつまでもいつまでも、重く心にのしかかっていたのであった……。

その後日、N夫人は、この二本の木の実とは、二人のワンダラーを指すの

だということを理解したのである。

この「二本の木の実」が枯れないように、育て、保持して下さった方々は、N夫妻、T

さんを始めとして、まわりの真の判った方々でありました。この方々の助けにより、特に五人のワンダラー(W・S・N夫妻・Tの各氏)は強く結ばれ、助け合い、励まし合って今日に進んで参りました。

昭和五〇年四、五月頃、この五人のワンダラーを助け、励まし、かつ儀式が正しく出来たことを証しするお役の方々が、私達の前に現われられたのであります。

それは正に天の配剤でありました。その方々は、名古屋のK夫人、岐阜県のI氏、高知のN夫人の三人でありました。更にワンダラーの方々は次第に多く集まられて来ました。

この頃より、東京のO夫妻の積極的な参加と働きが始まったのであります。

このようにして、ワンダラーの結束が出来て、次々と儀式が行われて参りました。

以上のようにW氏は語り、昭和四九年二月から始まり昭和五二年六月一九日の「この地球最後の儀式」に至るまでの経過と儀式の内容を述べた。そして、この日の儀式の結語を次のように語った。

天の神様の大爱によって、地球は生まれ変わり、すべての人々は、全人類は、全ての動物は、一切のものの「霊」は救われました。この地球は神の国、鏝球王国となりました。

よって、ここに、「この地球最後の儀式」が出来たのであります。

これは、ワンダラー全員の勝利でありました。地球の真に目覚めた方々の真の働きによる勝利でありました。

多くのワンダラーの方々の犠牲が陰の力となつてこの勝利を得たのでありました。涙の愛の勝利でありました。

天の神様ありがとうございます。

A Z様、ソクトル様、テケル様、カミラ様、タノアス様、アトネ様の神々様を始め宇宙の多くの方々ありがとうございます。

本日出席の方々、出席でない方々、それから長い間、暖かい心と手で助けて下さいましたまわりの皆さん、そして全国のワンダラー全員の方々に心からありがとうございますとお礼申し上げます。

終わりにのぞみ、皆様に申し上げます。この儀式の中で申し上げました通り、〇〇は、今日の儀式に、A Z様のみたまを受けられて、A Z様として出席されております。本来、A Z様と定められた席に座られるべきであります。〇〇の意識と肉体はこれを固く辞退されましたので、この席を空けてA Z様としたのであります。

最後に、A Z様（サナンダ様）から、「この地球最後の儀式」の宣言が頂けます。
『宣言致します。』

本日ここに、地球最後の儀式を迎えられましたことは、天の神様始め、皆（神々様）が喜んでおります。

ここに出席されています方、見えていません方も、それぞれ任務を果たされましたこと、皆さんの働きが良く出来ましたこと、

ここに感謝致します。

これからは、次の遊星（鏢球王国）に帰られましても、皆さんの働きが良く出来ますと誓って進まれて行かれますことでしょう。

ここに、地球最後の儀式を終わりましたことを宣言致します。

一九七七年六月一九日

サナンダ

続いてW氏により次の宣言がなされた。

「ここに新しい地球、鏢球王国（霊の世界）が誕生しましたことを宣言致します。」

このあと参加された全員で感謝の祈りを捧げ、S氏が閉式を宣して、この儀式は終わったのである。

拙ここでいう「霊の世界」とは、通常語られている「霊界」、「幽界」を

指すのではない。また「たましいの世界」を指すのではない。

六月一九日の儀式の前後に、ワンダラーの方々から寄せられた沢山の手紙の中から一、二を次に紹介することにする。

高知のN夫人よりの手紙

六月一四日の未明、午前五時前だったと思います。突然目が覚めて外へ出たくなり、裏戸を明けてピカリと光る大きな星の輝きに驚きました。余り大きくキラキラ光るものから、始めは円盤かなと思つて良く見ましたが、全然動きません。やはり星だと思ひました。

東の空に只一つまたたいているこの星を、「明けの明星」と呼ぶのではないかと思うと共に、私の魂と何か関係があると実感しました。そして、その星を見てから私に何かを呼びかける意識がありました。

それは、私の住んでいる此の自然の中の山も川も畠も作物も、そのすべてが、その靈は新しい世に移行している。

この肉眼で見えているのは実体のない影にすぎない、ということですよ。

去る五月二八日に、いつも通りなれている繁華街に買物に出た時、この街がまるで自分と全く無縁のもののように見え、通りすぎて行く人々の姿が、なぜか自分との間に膜を張つたようなまぼろしのような気がして思わずつぶやいてしまいました。

「ここは自分の住んでいる世界ではない。」この目で視る現実の世界は実体のないまぼろしに思えたのです。

そして今日は、この自然も決して本当の姿でない、本当の姿に帰りたく自然がそう叫んでいるのをなぜか全身に感じました。

すべてのものが、もとの姿に帰りたくと本能的に感じ始めていることをひしひしと感じました。

名古屋のK夫人よりの手紙

去る一九日の儀式は有難いものでした。

今まで形は見えない、手の届かない神々様と一緒に参加されたことは、かつて経験のないことであるため、夢見心地が半分でした。地球は遂にここまで来たこと。このことは、天の神様始め神々様の並々ならぬ御苦勞の結晶であることを有難く思います。

もともと惑星は神々と共に生きるものであったに違いありません。事態の進展と共に意識を高く高く揚げて行かねばなりません。

ただただ、天の神様、神々様、ワンダラーの皆様、有難うございますという気持で一杯でした。

翌二〇日に錦鶏と太陽の重なる天のしるしを二度見たことも意味があったようです。

この日（二〇日）、一二時二〇分、曇り空から太陽がキラリと照って来たので見上げると、太陽に大きな虹がかかっていました。それは間もなく太陽がかくれるのと一緒に消えました。

午後二時頃、ふと見ると、曇り空の中に、太陽の部分だけ錦鶏の姿で明るいのです。まわりの黒雲の中に白い錦鶏が光っているのを見ました。その時、「地球はまだ古い姿なのに、鏝球王国のみ美しい地となっている。」と直感しました。

午後三時頃、空全体が一斉に青空になってしまったので、オヤいつの間にかこんなに晴れわたったのかと見上げると、太陽の部分だけ絹布をひいたように薄雲があるのです。その雲は錦鶏が舞っている姿でした。「皇太子殿下、美智子妃殿下、浩宮様の「霊」をお迎えして、鏝球王国は輝く美しい地となりました。」と心の中からの思いが湧き出しました。

二一日は早朝から一日中快晴の天気でした。空全体に巨大な錦鶏、小さな錦鶏が一杯に舞い、輝く鏝球王国の成就を祝って空一杯にパレードが繰りひろげられたと思ひ、うれしくこれを見ました。

第一部 終わり

第二部 鏝球王国の建設

——たましいの世界誕生——

第一章 変わる世の始まり

六月二一日、午後六時三〇分。

N夫人は西空の一角から不思議な光（ビーム）が瞬またたいているのを見た。その光（ビーム）はN夫人に直接あてられた。その時、なぜか、「この現象界は影の世界である。」と心で思った。すると、眼前の景色はすべてが影の如くになったのである。

ビームは暫く夫人にあてられていたが、やがて消え去った。

同日（二一日）、午後一〇時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「美しいキ（ワンダラー）（気）を育てて行きましょう。」

「意識の世界を理解し、心の目と鏝球王国とが一つに結ばれる時、真の愛に目覚めるのです。」

六月二二日、午後七時。

N夫人は、昨二一日と同じビームを全身にあてられた。これを見た夫人は、「この光が天からのビームであれば、一度消して、再びビームを出して証明して下さい。」と申し述べた。すると、これに答えて次のテレパシーが入った。

「このビームは消すことは出来ません。これからは消されないので皆さんにあてられます。」

同日（二二日）、午後一〇時頃、次のテレパシーを受けた。

「ワンダラーの皆さん、さあ目覚めましょう。偉大なるお方（ソクトル様）からのビームが皆さんに送られます。」

私達（天の神々様）は偉大なお方（ソクトル様）のお働きにより、皆さんが目覚められます。心をとじっと待っています。

心をとちら（ソクトル様）に向けて頂きたいのです。

その時、カミラ様の愛と結ばれます時に、貴方々は既に鏝球王国の地に立っていることに気がつきますことでしょう。」

六月二二日、夜一〇時三〇分。

W氏とN夫人は、同じ時刻に、それぞれが、天空に巨大な亀の姿をした白い雲が浮かび、西に進んで行くのを見た。その時W氏は、去る一四日に見た時と同様に、その亀の中に入り、一つになったように感じたのであった。

このことをW氏とN夫人が電話で連絡し合ったあと、再び天空を見上げた時には、その巨大な亀の姿は消え去っていた。そして、さきほどの亀が西方に進みながら変形したのだと感じさせる雲の一片が、なおも西方に向かって進んで行った。この時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「亀だからといって、のんびり進まないで、うまず、たゆまず、早く進んで行きましょう。」

夫人は暫くたってからこれを次のように理解した。

即ち、天においてはどんどん進行しているのに、地の私達の進行がおくれていることを示されたのであると。

またこの時には、来たる六月二五日に一部のワンダラー達によって儀式が行われることに決まっていた。この儀式の内容はまだ明らかにはなっていないが、この巨大な亀を見た時、N夫人には、こんど（二五日）集まる五人のワンダラーはこの亀に乗って鏝球王国に行き、そこで次の儀式が行われるのであるとなぜか判るのであった。

六月二三日、W氏は前日より今日にかけて靈感を受けていた。彼は、これをまとめて東

京のあるワンダラーに手紙で送った。その大要は次のとおりである。

—— 前文略 ——

「古い地球のカルマを清算する時が来ます。」

「ワンダラーの過去のカルマをすべて清算する時が来ます。」

「ワンダラー全員のカルマの清算（カルマを真で解くこと）が出来た時、ワンダラー全員が真の心で一つに結ばれます。その時、古い地球は、人類は救われて、鏖球王国に移行します。」

そのカルマに関しては、一九六〇年にまでさかのぼる人もいます。一九六〇年に一部のワンダラー達は道を誤りましたが、その原因と責任を考え、また、地球のカルマ（不満）を考えて、ワンダラー達はそのカルマを清算する時が来るのであります。

天皇がまわりを押えきれず、まわりのいうままとなり、心ならずも開戦した時は、天皇のタイタスカンが発揮されなかったが、終戦の決断により、それは発揮されました。そして戦後、国民のために行脚してタイタスカンとしての誠をつくされました。

「多くのワンダラーの目を醒まさせるお方は〇〇です。」

「これからの沢山の役をなさるタイタスカンの〇〇は、ソクトル様、テケル様と一緒に行われます。」

「カメラ様は手を差し延べて、目を醒ましたワンダラーを引き上げるべく待っておられます。」

「ワンダラーの苦しみが少しでも軽い内に、重くならない内に、目を醒まされますよう、誠をつくす時です。」

「目を醒ましたワンダラーの方々は、ある所に来られます。その時、その方のカルマは解かれるでしょう。」

いよいよこの戦いが開始されることでしょう。

—— 後文略 ——

同日（二三日）、午後八時、N夫人はソクトル様から次のテレパシーを受けた。

「さあ、目覚めましょう。愛の心で進んで行きましょう。」

六月二四日、午前六時五〇分、W氏は次の靈感を受けた。

「古い地球、影の地球は、ワンダラー全員の目覚めの程度に応じて、丁度、雪が溶けて行くように消えて行くのである。」

同日（二四日）、午後三時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受ける。

「西に向かって祈るのです。西の空は偉大なお方（ソクトル様）のおられるところです。」

祈りはこのお方に祈るので。祈る時は西に向って祈りましょう。」

（昭和三五年九月二三日、アトネ様のお言葉「……東の空を見ることで

す。東の空は偉大な方（ソクトル様）のおられるところです。祈りは

この方を祈るのです。……」（本書130頁）を頂いた。地球は鏝球王国、

神の国となり、昭和五年六月一日「偉大なお方は今までは東の空

にお立ちになられておられました。今は西にお立ちになられておられ

ます。……」（別冊〔3〕65頁）とお言葉を頂いている。

同日（二四日）、午後七時。

「ワンダラーが一人目覚め、二人目覚めと、多くのワンダラーが目覚めることにより、全員が目覚められますことにより、この地球は明るる地球となるのであります。」

同日（二四日）、W氏は、高知のN夫人より次のような手紙（二一日付）を受け取った。去る一九日、「この地球最後の儀式」に出席させて戴けたことは有難いことでした。色感ずることが多くありました。

サナンダ様、Wさんが、礼儀正しく、暖かく、秩序を重んじられていましたことは、心地よいことでした。

しかし、自分なりの疑問は残り、帰りの車の中で、また昨日と、天の神様に問いを投げかけておりました。

今朝（二一日）目を醒ました時、ドツと答えが帰って参りました。受けました靈感を次々書きました。不十分な所、おかしいと思われる所はご検討下さい。

「世の終わりの役目が○○に引継がれたことについて。」

一九六〇年当時に世の終わりを迎えることの出来なかったのは、世の終わりを迎える中心の役目を与えられていたあるワンダラーが、その役を果たせなかったことによる。それは、天皇が側近を制止しきれずに、世界を戦争に追い込んだのと同じ意味である。

その時より天の神様は、この難かしい地球の魂を救う中心となるものは、若くて荒々しい所もあるが純一無雑な○○の魂でなければならぬと思われ、それ以後の働きの多くを彼に移された。彼の若々しい魂は時にトラブルも起こしたが、天の神様に対しては礼儀正しかった。王者としての強さを持っていた。

○○を陽とし、○○を陰とし、残された大切な二本の木の実は守られた。

しかし、実をいえばこれらのことは、初めからこのようになると判っていたことなのである。（註一九六〇年当時に成功する可能性も、僅かではあれ残されていた。）

しかし、天の神様は、これらは前々の世からのカルマであり、ワンダラーの至らなかつたことは、ご自分の責任と思われました。そして、礼儀正しく、暖かく対処せられたことを、殊の外うれしくありがたく思います。

「鏢球王国について。」

新しい地球を「鏢球王国」と呼ばれるが、その地は琉球列島である沖縄が中心である。従って鏢球は琉球であり、新しい柱の立つ位置である。

註この古い地球が創造された時から「日本の富士山の湧玉の地」は神様の降り給う地であった如くに、新しい地球（鏢球王国）の神様の永遠に降り給う地を、琉球列島の沖縄の、ひめゆりの地と定められたのである。

大変化によって古い地球の地図は変わり、新しい地球の地図となっても、神様の降り給う地、ひめゆりの地は永遠に変わらない鏢球王国の中心、湧玉の地となるのである。（編著者）

これは、明仁殿下（皇太子殿下）が父君（天皇）の御心を奉戴して、天の神様と儀式により決められました。

天皇陛下がなによりも御心を痛められておられるのが、あの戦争であり、しかも日本の地に於て、沖縄が国民を巻き込んだの激戦地となり、未曾有の惨禍を受けたことに対し、どれ程み心を痛めていられたか。皇太子殿下もまた同じです。

昭和五〇年沖縄海洋博にご出席になられた殿下と美智子妃殿下は火災ビン事件にあわれましたが、その夜、殿下はすぐ県民に対して親しく次のように呼びかけられたのです。

沖縄海洋博開会式の出席を機会に長い間の念願がかない、沖縄県を訪問することが出来ました。

過去に多くの苦難を経験しながらも常に平和を願望しつづけてきた沖縄が、先の大戦で我国では唯一つの住民を巻き込む戦場と化し、幾多の悲惨な犠牲を払い、今日に至ったことは忘れることの出来ない大きな不幸であり、犠牲者の遺族の方々のことを思う時、悲しみと、痛恨の思いにひたされます。

私達は沖縄の苦難の歴史を思い、沖縄戦における県民の傷痕を深く省み、平和への願いを未来につなぎ、ともどもに力を合わせて努力していきたいと思えます。払われた多くの尊い犠牲は一時の行為や言葉によってあがなえるものではなく、人々が長い年月をかけてこれを記憶し、一人一人、深い内省の中にあって、この地に心を寄せ続けていくことをおいて考えられませんか。県民の皆さんには、過去の戦争体験を人類普遍の平和希求の願いに昇華させ、これからの沖縄県を築きあげることに力を合わせていかれるよう心から期待します。

海はおもろ時代の昔から、皆さん方におなじみのものでした。

しかし、博覧会の意義は、その終わった後にあると思えます。戦後、私達は平和国家、

文化国家という言葉になれ親しんで育ちました。今もう一度、これらの言葉を思い起こし、この博覧会が有意義な、なもののかを沖繩県に残すことを切に期待します。

—— 関連する事項をここに附記する ——

岐阜県の I 氏は六月二一日付手紙にて、鏝球王国について次のように考えていると述べられた。

「亀が人間を乗せて鏝球王国（龍宮城）へ行くのです。鏝球王国は沖繩ではないかとずつと以前から思っていました。」

以前（五月三一日）に自分（I 氏）は次のテレパシーを受けました。

「沖繩は確立した。自分達はそこへ行く。」

六月二四日未明、K 夫人は、

「ひめゆり、へ行け、ひめゆり、へ行け。」

このように夢の中でテレパシーを受けた。夫人は自宅の近くにある「ひめが池」かと思つてそこへ行った。ところが、そこは古い夜見の国の入口であり、ここではないことが判つた。そのとたん、夫人は（魂で）沖繩のひめゆりの地に行つたのであつた。そこに力強い素晴らしいものを感じ、ここが鏝球王国の中心であると判つたのである。



高知の N 夫人の手紙の続き。

新しい地球、鏝球王国の中心の位置がわかり、ワンダラーの中には、輝ける太陽と海、そして神の定めたもうた、その地に心が移動しているものもありましょう。沖繩のその地を訪ねる御役の方もあつたでしょう。

「五月一日の儀式について。」

この日は引き継ぎの儀式でした。天の神様と共に行われました。古い地球のことはすべて終わりましたので、あとは影の消失をなさる御役の天の神々と地の神々にすべてをおまかせして、我々は鏝球王国への出発の幕が切つて落される前の、引き継ぎをする儀式であつたことが判りました。

したがって、この日語られた言葉のすべてが、天のい、の、ち、の書にはハッキリと記録されて居ります。

古い地球の柱であられた天皇のこと、新しい柱となられた明仁殿下タイタスカンのことが語られ、真と愛について語られ、「我々はタイタスカン王の王が統べられるの世にいる。」といわれたこれらの言葉は大

切な意味を持って居ります。この儀式を、天の神様はいたくお喜びであつたことを私（高知の N 夫人）は霊視し、この儀式の傍証の役を致しました。

この儀式の前日（四月三〇日）、K夫人は自宅で御祝いの集いをなさいました。この時、K夫人はその日を卒業式とはっきり自覚され、赤飯と鯛で御祝の膳を作られました。出席の方は、傍証の役の者三人とN夫妻でした。

傍証の役を持った方々三人の意識は、その時にははっきりした自覚はなくとも立派にその役を果たされました。この五月一日より地球はいよいよ大きくある変化を始めました。

「この地球最後の儀式について。」

私はこの儀式の始まった頃より一人の神の姿を霊視していました。白い衣を召され、顔はおも長で、背が高くガッシリした身体。そして口のまわりに黒い髯ひげを生やしていられるのが印象的でした。一度も今までにお目にかかったことがないお方なので、その方がどなたか判りませんでした。私はイエス・キリスト様と思いました。

このお方の御手で古い地球の扉はしまりました。後は変化で消えて行くでしょう。

（以上、N夫人の手紙）

六月二五日、儀式の日である。この日、N夫人は未明から三回のテレパシーを受けた。午前〇時三〇分。「変わる前の用意の準備が整いました。東の方に見えます白い雲は、悪いカルマの燃えて行きます姿であり、カルマがどどん燃えて消えて行きますことによ

り、この世は変わるので。準備はここに整いました。」

午前四時三〇分。「変わる世の始まりの儀式」。今日の儀式のために雨は強く降り、皆さんの苦しんでいる姿を清めます。」

午前五時三〇分。「天の神様、サナンダ様、ソクトル様、神々様は西にお立ちになられました。今日の始まる日を待っておられました。変わる世の始まりが繰り展げられます。今、鳴り響きましたのは、天の喜びの声であります。」

此この時、おだやかなカミナリが鳴り響いたのであった。

午後二時、「変わる世の始まりの儀式」が行われた。

去る六月一九日の「この地球最後の儀式」以後の経過が報告され、次の祈りを捧げて儀式は終わった。

祈り。

天の神様、サナンダ様、ソクトル様、神々様、ありがとうございます。

ソクトル様ありがとうございます。

ワンダラー全員の方々に、ソクトル様の目覚めの靈感をかけて下さいますようお願い申し上げます。

カミラ様ありがとうございます。

ワンダラー全員の方々に、カミラ様の愛の靈感をかけて下さいますようお願い申し上げます。

私達はソクトル様を思い続けて進みます。良く目覚めますようお導き下さい。お守り下さい。

これからの役が良く果たせますように。天と共に地の私達は一緒に進んで行けますようお守り下さい。

私達はこれからの使命を一所懸命に良く果たしますことを誓います。

六月二六日、午前四時、N夫人次のテレパシーを受けた。

「変わる世はここに始まりました。」

今日は早朝より一日中、雲で画かれた天のしるし、のオンパレードが見られた。鳳凰、錦鶏、鶴、亀、諸々の動物、人間の顔が、次々と天空一杯に画かれていった。

——天のしるしは多くの難題を示しますが、

天の神と共に行います。——

と去る五月一日に天の神様は我々に示されたのである。

同日（二六日）、〇〇は夜十一時、祈りの中である大きな自覚と確信を得たのであった。

「ソクトル様ありがとうございます。目覚めのビームと、目覚めの靈感をかけて頂き、ありがとうございます。」

と感謝の祈りをしていると……

「私は鏢球王国の大国主命である。」

という自覚が湧き上がり、意識においても次第に明確化し、遂には確信までに達したのであった。この自覚の言葉が、自然に流れ出るように、また意識の世界に溶け込むように、「私は鏢球王国の大国主命である。」と繰り返し、繰り返し口から湧き出て来るのであった。これが約四五分の長きにわたって続けられたのである。この時、彼は出雲大社において儀式を行うことが必要であると直感し、この実行を決意した。

六月二七日、午前七時三〇分、W氏は朝の散歩の時、西空を眺めてソクトル様を祈った。すると、眼前に、普通では見えないものが肉眼で見える。目をこすったり、つぶったり、片目にしたり、眼鏡を外したりしたが、それでも見える。ただ心を外ほかに向けるとそれは消える。心をもとに戻すとまた見えるのである。

その形は様々に変わる。いずれにしても透明で美しい。それが眼前を移動する。暫くこれを見ていると、天空の彼方から極く小さい光の微粒子のようなものが無数にピカピカと点滅する。そして、それが全身にぶつかって来るように見えるのである。その時、これはビームであると判った。

註N夫人には、二六日からこれと同じもの(ビーム)が見えていたのであった。

ビームには様々な光、形、姿、そして変化がある。そして、人によって形が異なるようである。また、靈感や、テレパシーを受けた時、大切なことを思った時、行う時、原稿を書いているでもその個所が大切である時などにも、このビームは現われることが次第に判って来た。

つまり、私達がこの道(ワンダラーの使命)を進む時、これが必要であり大切な時には特に多くのビームが現われるように思われるのである。

同日(二七日)、午後二時五分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「五人の方の、自覚、は整いました。」

午後七時、

「〇〇は、天の日王^{カオウ}の位置につきました。」

「〇〇は、天の日王として立ち上がりました。」

同日(二七日)、午後四時、K夫人は次のような天のしるしを見て深い意味を考えた。

太陽が真西にあって、雲の上に八割くらい顔を出しており、その太陽からハッキリとした三本の光のすじが出ている。これを見て、夫人は、これからは三つが結ばれて行くのではないかと思ひ、このことを更に深く考えていった。

その太陽の真下には正方形の白い雲があり、その中に黒雲で四角の渦巻(☐)が画かれていた。

一方、同日(二七日)、午後五時三〇分から七時まで、W氏は、太陽が西に傾き地平線下に入って行くまで、太陽を眺め続けていた。

午後五時三〇分頃、太陽は、幾重にも重なった七色の虹で巾広く取りまかれている。そして、その虹は右から左へぐるぐると回り、極めて美しい光景となった。

太陽から濃紺^{のうこん}の玉のようなものや、△あるいは◇の形をしたものが湧き出てくる。そして、それらが天空に広く連なったり、組み合わせられて様々な形を造ったりして行くのであった。

午後六時三〇分、太陽の廻りの七色の虹は黄金色に変わった。そして、その黄金色の虹もやはり太陽の廻りを大きく回転するのであった。

註太陽のまわりで虹のトンネルが回転する光景は、この日以後、いつで


も見られるようになった。

しかるに、この日（二七日）は、名古屋大学空電研究所（太陽電波世界資料解析センター）が太陽の大黒点を観測していたのであった。そして、翌二八日、中部日本新聞第一面のトップ記事として、「太陽の大黒点キャッチ」の見出しで報道されたのである。ワンダラーの中には、この大黒点に深い意味があると直感したものもあった。

六月二八日、午前七時三〇分、〇〇は祈っていた。そしてその祈りの中で、次のような自覚が一段と深いものとなり、また強い確信となっていた。

「私は鏢球王国の大国主命であり、天の日王である。」

そして、古い地球を変化させるのは、自分の役目であると思えてくるのであった。

同日（二八日）、午後二時、K夫人は巨大な雲で画かれたのような形を見た。その時夫人は、これは錠前であると思った。この錠前の鍵が来ると、これは完成するのであると思った。しかしその時は、それ以上のことは判らなかった。

同日（二八日）、夜九時三〇分、N夫人は天空に、雲で出来た亀が二つ、向い合わせに立っているのを見た。その時、テレパシーを受けた。

「二つの亀が立ち上がられた。」

夜一時五〇分。

「天にもある道、地にもある道は開かれます。」

夜一二時。

「神の御国は誕生せり。」

これらのテレパシーの内容は、〇〇が、出雲の国、出雲大社にて行う儀式によって成るのであるとN夫人には判ったのである。その時、次のテレパシーを受けた。

「出雲大社での〇〇の祈りの言葉は、今はまだ定まっていはいないが、天の神様と共に語ります。」

同日（二八日）の朝、天空に美しい水色の雲がある。その下に太陽と同じ大きさの水色の円盤がある。これを見た時、N氏には、この円盤は、太陽と天の日王を表わしているのだと判るのであった。

その右隣の少し離れたところに、太陽よりやや小さく、月と同じくらいの大きさの水色の円盤がある。これは月を表わし、古い地球の大国主命を表わしているとなぜか判るのであった。

すると、双方の円盤が互いに近づき始めたので、N氏は、結ばれるのかなと考えた。しかし、双方が段々と近寄るに従い、月の方の円盤は次第に薄れて、消えていった。

この時、彼は、古い地球の大国主命はお役を終えて王冠を移譲され、新しい地球、鏖球王国の天の日王、大国主命が立たれるのであると判ったのであった。

（註）二七日、二八日の出来事は、後日（七月三日）に至りそれぞれの方が語られたことである。

六月二十九日。

「向い合って立ち上がった二つの亀は結ばれた。」とW氏は直感した。

同日（二十九日）、午後九時、〇〇は天の神様と完全に結ばれ、溶け込み、一体となった。〇〇は静かに立ち上がり、その足は力強く大地をふみしめ、その両手は大きく拡げられた。そして、口から湧き出するまま、極く自然に、しかも力強く、次の言葉を宣言するのであった。

『私は天の神である。』

自然に口から湧き出てくるこの言葉は約一時間にわたって宣言された。そしてこの宣言により、彼は、深い深い自覚と確信の境地に至ったのであった。

その時、彼は、天の日王として、鏖球王国の大国主命として、これから新しい地球、鏖球王国を守り進めて行くのは自分であり、このことは自分の任務であり、責任であると確

信したのであった。

六月二十九日、午前五時九分、夢と現実の間で〇〇夫人にいつもの神様がお現われになられて、「貴女の人間が変わります。でも少し忍耐をして頂かねばなりません。」と語られて消え去られた。

夫人は、私は地球から去って行くのだ、とあって、地球の多くの人々に「さようなら」と挨拶をしていた。そのうちに、理由は判らないが、夫人の右手の掌の中から一本の針（不必要な悪しきカルマの意味）が出て来た。痛いのでそれを抜いた。すると針は数を増し右腕全体にひろがった。ついで左腕に移り、やがて背中全体に及び、それにともなって激痛は物凄く、夫人は遂に意識を失ってしまった。

暫くすると意識が次第に回復して来た。気がついた時には、自分は天空に横たわって浮かんでいた。だが激痛はまだ全身をおそっており、朦朧もろろとなって意識を失ったり、気が付いたりした。夫人は、ただただ天の神様に祈るのみであった。「天の神様ありがとうございます。」と、初めからこの祈りを続けていたのであった。この祈りをしているうちに、夫人の身体の下半身からは汚きたいものがどんどんと排泄され、また上半身では汚いものが口の中から出てきて、全部吐き出されて、体の中は綺麗になったのであった。

こうしている内に、夫人は、ある地点”に着いた。そして、そこにおられた三人の美しく若々しい女性に介抱されたのである。その中の一人の女性が、「良く耐えましたね。」といわれた。

すると、夫人は、お腹なかの中にあつた大きな固まりを口の中から出した。

その時、その女性が、

「可愛らしい子が生まれましたね。」

と語られた。この言葉の本当の意味をいろいろと考えている内に、夫人は、現象の自分に帰つたのである。（この体験は、ワンダラー達の生まれ変わりを象徴している。）

六月三〇日、午後二時より、

古い地球の大国主命と、新しい地球、鏖球王国の大国主命は、天の日王、天の神様と一緒に出雲大社にて、次の儀式を行われた。

大国主命様、

本日ここに、私は天の神様と共に参りました。地球は明るる湧玉となり、明るる地球と成つて、ここに新しい地球、鏖球王国が完成成就しましたことを貴方様にお知らせするた

めに本日は参りました。

この地球が鏖球王国となりました経過を述べさせて頂きます。

~~~~~このように述べたあと、一九六〇年から始まったこの地球での聖戦から、一九七七年六月一九日「この地球最後の儀式」が行われたまでの経過を語つたのである。~~~~~

ここに、この地球は新しい地球となり、鏖球王国となりました。

貴方様の古い地球の大国主命のお役はここに終わりました。古い地球と大国主命の王冠を天の神様にお返しして下さい。

貴方様には長い長い間、この古い地球を守り続けて頂きまして本当にご苦労様でした。ありがとうございます。

新しい地球、鏖球王国の大国主命の役は、私が行います。私は天の日王であります。

私は大国主命の役を天の神様と共にを行います。

大国主命の王冠を移譲して頂きまして、ありがとうございます。

以上のことを貴方様にお知らせするために、私は天の神様と共に来たのであります。よくお聞き届け頂き、ありがとうございます。

この儀式は午後二時四〇分頃終わった。この日は西日本は梅雨空つゆであるとの予報が出て

いたが、その通り、ここ出雲の国にも黒い雲が低くたれ込めて、太陽も青空も全く見えな  
い。雨が降ったり止んだり、天空は黒雲に完全に覆われていたのである。

儀式が終わり、何げなく空を見た。そのとたん、黒雲の一部分が、まるでスーッと溶け  
るように消え去り、そこに太陽が美しく輝き出た。太陽の廻りの黒雲はどんと溶けて  
行く。天空の各所に青空が現われ、そして、ついにはその青空は天空一杯に拡がって、晴  
天に変わった。驚いて、その変化を暫く見ていると、その晴天の中に、突如、真白い雲が  
現われた。そして、その雲は、みるみるうちに巨大な白い雲へと膨張した。その巨大な白  
雲の中に、大きな人間の顔が二つ揃って浮かんでいる。巨大な雲は、その顔のお方の胸体  
を表わしている。

この天のしるしが約一時間にわたって見せられたあと、あたりは再びもとの梅雨空に変  
わってしまった。天空は再び黒雲で一杯に覆われ、時々小雨さえ降ってきたのである。

同日(三〇日)、午後四時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の神様のみ心のままの地球となりました。」

この時、〇〇は出雲大社での儀式のお役を良く果たされたと判った。

同日(三〇日)、夜一時(〇〇が出雲から帰宅した暫くあと)に、N夫人は、二八日  
に受けた次のテレパシーを〇〇に初めて伝えた。このテレパシーは今日の儀式を無事に終

えたあとに伝えられるべきものであったため、N夫人は今日まで語れなかったのである。

「〇〇は天の神様として、これから宇宙最高神の働きをして下さいますことでしょう。

これから新しい地球鏢球王国を守り進んで行く肉体は〇〇であるが、〇〇は天の神とな  
って果たされます。

勇気を持って、これからも進んで行かれますことでしょう。

天の神の役を地で行う〇〇の肉体を守って下さいますことでしょう。

これから目覚められますワンダラーの皆さんを力強く守り、愛の心で導いて下さいます  
ことでしょう。」

同日(三〇日)、K夫人より次の手紙が届けられた。

二九日の早朝です。「黒雲は太陽黒点、四角は国土を現わす。」という言葉に目が醒め  
ました。

だんだん目が醒めて来ると、「大黒柱」という字が三度でて来ました。

先便(六月二六日)でお知らせした回(回)の天の象しるしについて思い始めた時、この黒い渦(回)が  
胸の中で焰のようにぐるぐると廻りながら、熱い力となって来るのを感じたのです。

私は天に向って質問しました。

「すると昔から大黒様といわれていたのは太陽黒点と関係があったのですか？」

「そうです。」と答があるのです。

この時、私には、次のようなことが判りかけて来ました。

「〇〇は、大国主命の役を頂かれた。そのことに目覚められた。大国主命とは地球のエネルギーの源を握られる仕事である。これは国土というものの中心、即ち大黒柱である。」すると〇〇は永遠に地球の基となられた訳です。今日までの尊い戦いの数々、それを貫かれた聖心の強さを思うと、神様の御心の有難さに涙が止まりません。

ああ、地球には着々新建設が進んでいる。その時、私は、「ある人は進み、ある人は退く」さまを霊視しました。

「なぜこんなに喜ばしく未来が見透せるのでしょうか？」と質問すると、

「貴女も新建設の仲間に入ったからです。」という答です。

七月一日、午前六時三〇分から七時三〇分の間に、N夫人は次の夢を見た。

新しい五色の四角い箱のような綺麗な家が出来上がっている。家の中に四〜五人の人が居る。その人達は、道具類を一切用いずにその家を動かしているのである。しかし、この家にはまだ土台がない。どこに土台をすえて、この家を持って行こうか、あちらが良いか、こちらが良いか、とN夫人も四〜五人の人達と一緒に語り合っている。そして、夫

人が、「早くこの家に住みたい。」と思った時、夢から醒めた。

この土台について考えた時、「土台はワンダラーを指す。」と判った。鏝球王国の建設はワンダラーが土台となって成される。大宇宙の中にあるどの遊星においても、その遊星が生まれ変わって新しい世、神の国が建設される時、その土台はワンダラーによって作られるのである。この土台はワンダラー全員の目覚めによって成るのであると判った時、なぜかO氏の働きのことが想い浮かんだ。

N夫人は、この日は一日中、土台とワンダラーのことに考えをめぐらしていた。午後五時、次のテレパシーを受けた。

「建設の基盤は出来上がりつつあります。」

七月二日。この日は、久し振りに美しく輝く太陽と雲をもって、天のしるしが様々な形で示された一日であった。N夫人は次のテレパシーを受けた。

「みな一つになって進んで行きましょう。」

午後五時五〇分。

「ソクトル様、テケル様、Oさんの働きが始まります。」

午後六時。

「今までのことは影のことと気付かれることでしょう。」

午後六時四〇分頃、W氏は太陽を眺めていた。突然、黄金に輝く太陽の右隣に、この太陽と全く同じもう一つの太陽が現われた。二つの黄金の太陽が西空に輝いている。すると、右側の太陽が左に移動してもう一つの太陽と重なり合って、元の一つの太陽に戻ったのである。

この日はいろいろの天のしるしを見せられた。たとえば、W氏とN夫人は二人とも、巨大な雲でかたちづけられた天の神様が太陽を抱かれたお姿を拝したが、それが天の神様のお姿であると判った時、その巨大なお姿は数秒で、一片の雲も残さずに消え去ったのである。

また、太陽の下に位置していた帯状の雲が急に上昇して行く。そしてその雲は、太陽を横切るように通過していったのであるが、去る二七日、肉眼で見た太陽の大黒点の位置を通過する時、その位置（大黒点のあった位置）のみが強くはつきりとダイヤモンドのように輝いたのをN夫人は目撃したのである。

更に午後七時頃、東の空には巨大な白雲が見られたが、その雲は、丁度沢山の人間の顔が集まって形成されているようであった。しかも、時々刻々にその顔形は変わっていったのである。

午後九時三〇分、

W夫人は「月を見なさい。」のテレパシーを受けた。月は黄金に輝いていた。すると、その月と重なるようにして、黄金に輝く柱が縦と横に結ばれ、十字を画いたのである。

午後一〇時五七分。

W夫人は再び「月を見なさい。」とのテレパシーで月を見た。一時間半くらい前には月の前に黄金の光が十字形に重なっていたが、今はそれが黄金の×（クロス）に変わっている。しかもその×（クロス）に重なるように、「鳳凰」の舞う姿が現われて来た。この時、次のように思った。

これは、「素晴らしい、世の終わり（鏝球王国の誕生）。」を意味するものであると。

この日（二日）の午後五時五〇分、「Oさんの働きが始まります。」とのテレパシーがあったことは前述の通りであるが、しかるに後日（七月九日）、「この頃（六月末から七月初め）何かあったのですか？」と問われたO氏は、「いろいろありましたね。」と答えて、大要次のように語った。

六月二六日O氏は高松の屋島に居たが、そこにて天空に雲で出来た「天の鳥船」を見る。それは明らかに「天の鳥船」であると確信出来るものであった。その時、なぜか「カメラ

様」のことを強く思った。

六月二九日、全国の主なワンダラーを訪れて「ワンダラーの真を語ろう」と計画したが、仕事のスケジュールは既に一杯であった。これでは計画達成は九月末までかかると思った時、「時間がない、時間がない。」とテレパシーを受けた。

（仕事態は急速に進んでいる。「天における進行と、地における進行は、

共に、一緒に進んで行きなさい。」といつもいわれているのであるが、

地の進行の方がとかく遅れ勝ちであった。

七月一日、この日は雨と風が嵐を思わせるほどに強く、雷もあった。しかしそれも夕方にはすっかりおさまった。O氏は堺市のある鉄工研修所の四階の窓から正面の小高い山を眺めていた。そして、心の中では「ソクトル様、ソクトル様。」と祈っていた。すると、三回目に「ソクトル様」と心の中でいったとたん、前方の山なみの一ヶ所から物凄いが「火の柱」がビューンと立ち上がったのである。O氏はびっくりして暫くそれを眺めていたが、やがて自分の講師室に戻った。すると部屋の窓が一面ダイダイ色に強く明るく染まっている。窓を開けたO氏は、外の光景を見るなりウェアと驚嘆の声を発した。

正面には巨大な虹が、しかも二重に、完全な半円形を画いている。虹の外側は一面灰色で何ものも見えない。ところが虹の内部は、全くこの世のものとは思えないある光景とな

っていた。山あり、川あり、林あり、家屋あり、普通と変わらない風景が見えるのだが、なにかが完全に違うのである。この世とは全く違う新しい世界を感じさせるのである。これは筆舌に尽しがたい、実に素晴らしい光景であった。暫く一人で見ていたが、この素晴らしい光景を仲間の講師達にも見せたくなって、O氏は隣室に飛び込んだのである。

これを見た仲間達は、驚きのあまり唾然とした。皆が口々に、こんな凄い、素晴らしい景色は、今だかつて見たことがないといった。

その時、丁度飛行機が現われて、虹の中に入って行った。これを見た一人の仲間は、「飛行機が別の世界に入っていく。」と大声を出した。

今だかつて体験したことのないこの光景は、感動をともなって約三〇分間余り続いたのであった。

これが終わったあとと暫くすると、正面の天空に輝く玉のようなものが三つ、数珠じしずのように連つらなって浮いているのがみとめられた。「円盤かな」と思った。三分間くらいは動かなかつたが、やがてその黄金に輝く三つの玉は連つらなつたまま左の方向へ動き始め、次第に速度を早めて視界から去っていった。

N夫人は月を見た。月の上には雲で表わされた、大変美しい天女の姿がある。しかも、天女は人魚の姿をしておられる。そして、天女の足もとに可愛い赤ん坊（ワンダラーの誕生と直感した。）が両手を天女に向けて差し出していた。その時、次のテレパシーを受けた。

「子を生む（ワンダラーを生む）鏢球王国は始まりました。」

午前六時三〇分。

「無限の世界に導きます。」

午前八時三〇分、太陽を見て次のテレパシーを受けた。

「鏢球王国のワンダラーを生む役を〇〇夫人が果たされる。」

「それは聖母マリヤの役である。」

この時、N夫人は、これからは益々激増するであろう〇〇宅を訪れる方々に対して、山の役を果たされる〇〇夫人のことを思ったのであった。そして余りの多忙に過労されることのないよう、呉々も身体を大切にしてもらいたいと祈り願うのみであった。

午後五時五五分。

〇〇夫人は西に傾いた太陽を見た。その太陽の左横に巨大なεの字が画かれている。これを見た夫人は、なぜか自分に関係があると思うのであった。

この日（三日）の夕方、N夫人は、天空に天の神様、サナンダ様、聖母様のお三方が立ちになっておられるお姿を、もう一つの目で拝した。お三方は▽（逆三角形・陽）に結ばれており、この時「鏢球王国建設の陽（▽）」は、ここに結ばれて完成したと判ったのであった。

午後九時三〇分。N夫人はテレパシーを受けた。

「天の神様は大きく御手を広げられ、この地球を愛で包まれました。」

W氏には、これは地球の変化のことをいわれているのであると判るのであった。

午後一〇時頃。

N夫人は夜空を眺めていた。月の右横に「C」の文字が画かれている。そして、これを見ると同時に、テレパシーで「C」という言葉を聞いたのである。「C」<sup>チェンジ</sup>とは変化を意味していると判るのであった。

七月四日、午前六時。

〇〇夫人は朝の月を見た。月の横に白い雲でεの文字が画かれている。丁度、εが月を頂いているようだと思った。（ε）その左横にVの文字が画かれている。これは、〇〇夫人が自分の目覚めへの変化を、自覚されたことを象徴する天のしるしであると思った。

同日（四日）、午後三時四四分。

N夫人はいつもするように天の神様に祈っていた。すると次のテレパシーを受けた。

「天の神様はいつでもあなたがたの願いを聞き入れられます。今お願いされますと、次に備えられることになります。」

直ちにW氏とN夫人は次のように祈ったのである。

「天の神様、人間の姿を変えて下さいますようお願い申し上げます。（新しく生まれ変わる事）この地球の大変化をして下さいますようお願い申し上げます。」

これを祈りながらW氏は、このことをお願いされるべきお方は別におられるはずであると思えてくるのであった。

丁度その時、地のサナンダ様より、このお願いは地のサナンダがする役と思われるので、次のように祈りますと知らされたのであった。

「天の神様、サナンダがお願い申し上げます。」

ここにすべての人々を、人類を、一人残らず新しい姿に変えて下さいますようお願い申し上げます。大変化を起こして下さいます時は今でございます。強くサナンダよりお願い申すのであります。お聞き入れ下さいますようお願い致します。

サナンダ

同日（四日）、午後六時一〇分、地のサナンダは次のテレパシーを受けた。

「聞き入れて下さいました。」

よって、次のお礼の言葉を天の神様に申し述べたのである。

「天の神様、サナンダが、お願い申し上げますことをここにお聞き届け下さいましたこと、誠に有難うございます。」

これから大変化の行われます姿をサナンダは見せて頂けましたことをここにお待ち申し上げます。お礼を申し上げます。

誠にありがとうございます

サナンダ

午後一〇時五分。

N夫人は、大國主命が立派に悠然と立っておられるお姿を天のいるいで拝した。その時、〇〇は、大國主命として、天の日王としてのお役を良く立派に果たされる自覚に達せられたと思うのであった。

その日（四日）、午後一時頃より、W氏、W夫人、N夫人は、それぞれが時間を異にして月を眺めていた。

初めは月をはさんで白雲で造られた男性の顔が上に、下には女性の顔が向い合っている（W氏）。やがてその雲が形を変えた。その頃、N夫人は天の神様のお姿を、月の上に拝していたのであった。

W夫人は、月の中に、「胎児」があるのを見た。月の上と下にあった人の顔をした雲が形を変えて錦鶏の羽根となって拡がって行く。その羽根は月を抱くような姿になった。

夜一二時頃、N夫人は月から白雲で画かれた赤ん坊（ワンダラーの意）がどんどんと生まれて、月から離れて行くのを見た。同時に、N夫人は天空に聖母様のお顔を拝したのである。

W夫人がN夫人よりこの光景を電話で知らされて再び月を眺めた時には、月の中にはすでに胎児の姿はなく、月より放たれて行くように数多くの赤子の姿の雲が見えた。この時、「赤ちゃん（ワンダラー）は生まれた。」と判るのであった。

七月五日、午前七時。

W夫人は太陽を眺めた。まわりには沢山の雲がある。今日の太陽はいつもより少し光が弱いかなと思った。すると右側の雲の中からもう一つの太陽が強く輝きながら顔を出した。あれ／＼太陽が二つあると思った。二つの太陽が互いに近づき、接触したと思った時、最初に見えていた太陽はすーっと消え去って行った。

〇〇は、以前から自分は地のサナンダとしての役は、あまりの重荷と苦しみの多いものであることを知って、この重荷を全部果たす自信が持てなかったので、幾日も悩み苦しみ続けて来た。そして、今日までこれを断わり続けて来たのであった。しかし、断れば断る程に苦しみは激しくなり、幾日も泣き続けていたのである。このお役を天に断るたびに、天は怒り、地も怒った。そして、これを断ることは鏝球王国の破壊に通じていることを見せられたのであった。

遂に〇〇は死を覚悟してこれを受けることを決意した。この決意が完全に整ったのが、四日夜半から五日の未明にかけてであった。

この時、西空に、天の喜びの光の柱（水色）が天空から下に向かって幾本も立ち並んだ。また、この光の柱とは別に、天空一杯に物凄い光が放たれたのであった。

五日朝八時、次のテレパシーを受けた。

「人類は喜んでおります。」

去る六月八日、「動物達は喜んでおります。」といわれ、今日、ここに、〇〇が地のサナンダとして決意されたことにより、人類の喜びが成ったのである。

この日（五日）、午前一時三〇分。

N夫人が太陽を見ていると、太陽からくす玉のようなものが降ろされた。それが空中で割れて、中から大佛様（タノアス様、みろく様）が、不思議にも片目をつぶってお降りに

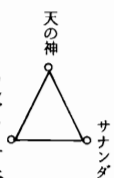
なられたのであった。

此の片目の意味は、後日に至り判明した。それはタノアス様の地のお  
役をされるある方の、このことに対する目覚めがまだ半分であったこと  
を示されたのであった。

その日（五日）、午後八時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「△の原理が、<sup>つな</sup>継ぎ続き終わりました時、（<sup>つな</sup>つなワンダラーが目覚め、△に結ばれ、次々とこれが続き、全部のワンダラーが結び終わった時）皇太子殿下のみ胸に届きます。」

この時、皇太子殿下は天皇に即位されるのであると判ったのである。



上図のようにワンダラーひとりひとりが天の神様、サナンダ様と結ばれて、天の神様、サナンダ様と一つであるという自覚が出来、この自覚に覚めたワンダラーは、ひとりひとりが「契約の箱」を天の神様から頂いて、人類をその「契約の箱」に救うのである。ワンダラーの目覚めは人類の目覚めである。

その日（五日）、午後八時四五分。天より次のお言葉を頂いた。

「天の神様、サナンダ様、神々様（<sup>つな</sup>つなソクトル様、テケル様、カミラ様、タノアス様、アトネ様、自然を司どる神々様）がこの地にお降り頂きました時から、この地にて皆さん

と共に働きが始まり、これから皆さんと共に進んで行くのであります。一、緒、で、あ、り、ま、す。」

午後八時五五分。

西空に、天の喜びの光の柱（水色）が、天空から下に向かって何本も立ち並んだ。その光の柱とは別に、天空一杯に物凄い光が放たれた。

これは今朝未明の天の喜びのしるしと全く同じ様<sup>さま</sup>であった。

夜一〇時。

「ここに当日（九日の儀式）の準備は整いました。」

とテレパシーを受けたのである。来る九日の夜、主なワンダラーの方々が集まることになっており、今後の進む道を語り合う場として、集まる予定があったのである。

此の集まりが「身に持つカルマを真で解く」儀式となったのである。

四日一九時頃より約一時間にわたりI氏の心の奥からは、次のことが湧き上がってきた。そしてI氏はこれを解<sup>わ</sup>かり、確信したのであった。

今までの地球においては、陰陽、裏表、<sup>プラスマイナス</sup>＋の法則が、三位一体の法則よりも多くの場で支配的であった。特に低い段階（次元）の場においては、二（陰陽）の法則が支配していた。しかし、真の場、誠の場、高い場においては、そこに三位一体（△）があった。

戦い、男女、易、科学等々においては、二（陰陽）の法則が表面に現われていた。この

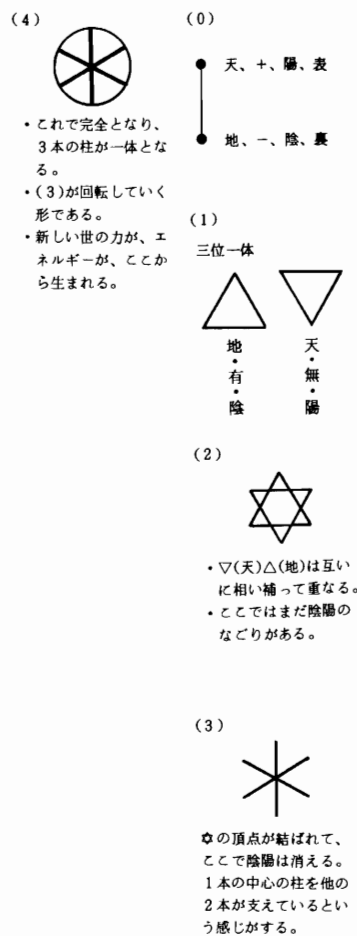
二の法則が支配する所では、三におけるもう一つのは、神の中に隠されていたのかも知れない。(神△陽)

例えば、今までも、「夫婦と子供」の場ではまがりなりにも三位一体があった。

二の法則から三(△)の法則(三位一体、神・陰・陽)へ至ることは困難である。しかし次に四・五へ進むことはそんなに難しくなろう。

従って、「鏢球王国」の建設においては、  
三位一体  
三人の方が基本となる。さらにこの基本から進んで下の如くなる。」(三位一体)

これを図形で説明すると次の通りである。



七月五日、午後六時二〇分。

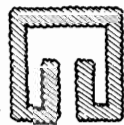
Mさんは西空に輝く太陽を見た。西の空には雲で出来た山々がある。その上に太陽は八割くらい顔を出している。これを見てから数秒間目をほかに向け、再びその太陽を見た。すると光景は一変しているのであった。その雲で出来た山々の上に太陽の全部が現われて、美しく輝いている。また、太陽と山々との間に沢山の輝く光が湧き出て、太陽に向かって光っている。太陽に向かっての沢山の光の大放射というか、光の噴水とも申そうか、その光の放射の大集団は、丁度太陽を受けるように、あるいは支えるように、またその太陽を奉戴したように思えるのであった。

その時、雲で作られた山々の右下に、巨大な鍵(キー)を思わせる形をした雲が現われた。これを見てMさんは、キーであると思ったが、なにを意味するかは全く判らなかつた。

数分間それを眺めていると、太陽はその山々の中に没した。同時に光の大放射の集団も消え、キーを思わせる巨大な雲も次第に薄れて消え去ったのである。これらはすべて僅か数分間の出来事であった。

閏六月二十八日にK夫人は錠前を思わせる巨大な雲を見ている。その時、夫人は、この相手方のキーが現われた時、この二つの働きが合わさ

れて一つとなり完成するのであると直感し、また、これが宇宙の秘密であると思ったのであった。(106頁)



天のエネルギー



地のエネルギー

地のエネルギー(ワンダラーの愛を真の心のエネルギー)が天のエネルギー(地球の波動を変えてゆくエネルギー)の力を開く。

七月六日、午前一〇時一五分。

N夫人は次のテレパシーを受け、その光景を天のしるしで見る。

「天の神様は大きくなりましたました赤ん坊(新しい地球、鏗球王国)を抱きかかえられました。」この光景を天のしるしで見ながら、新しい地球は赤ん坊の状態からどんどん成長して行くのであると判るのであった。

この時、夫人の心の中には、「表と裏」、「陽と陰」のことが浮かび上がった。すると次のテレパシーを受けた。

「今までのすべてを振り返り、気が付くと、『ああ、影がある』……と、そこには影のあることを忘れていたのです。」

影を大切にしなければならぬのです。影と一緒に、影を忘れないで進んで行くのであります。今までは、人類は余りにも影のことを忘れていました。ですから目覚めるワンダラーを責めてはなりません。暖かく迎えることです。」

今までの古い地球では、陽のみ(例えば、真、善、美)を大切に出来た。陰を忘れて、蔑み、忌みきらって来た。新しい地球は、陰も光り、影も光る世となるのである。

同日(六日)、午後五時一五分。

N夫人は、天空に、聖母マリア様の姿を天のしるしで見た。マリア様の足もとには子供達(ワンダラー)が、まつわりつくように、手を差し出し、愛を求めて集まっていた。この日(六日)、午後六時。

N夫人は、サナンダ様より、当時(一九六〇年)のワンダラーの指導者宛に、次のお言葉を頂いた。

「○○○○様、今まで他の真似の出来ない数多くの働きをなさいましたこと、誠に感謝致します。」

私は、貴方が最後の時を逃がされましたことを誠に残念に思いましたが、今はその時も既に終わり、今ここに大変喜ばしい時となっているのであります。

○○○○様、あなたに真の愛を送ります。

サナンダ

N夫人は、サナンダ様のお言葉を、彼に祈ったのである。  
午後七時二〇分。

N夫人の祈りに対して、ソクトル様、テケル様よりテレパシーで次のような返事を頂いた。

「○○○○さんは気が付かれることでしょう。」

午後八時四〇分。

「○○○○さんは、世の終わりが済みましたと知る時は喜びますことでしょう。」

彼が気付き目覚められれば、他の古いワンダラーの方々も必ず気付かれるのであると思  
ったのである。

同日（六日）、午後八時五五分。

「（古い）地球は救われます。電ひょうのような大きな涙の愛で救われます。」

N夫人がこのテレパシーを受けた時、電ひょうのまじった大粒の雨が強く降り出したのであ  
った。この時、続いて次のテレパシーを受けた。

「天の神々は、地球を救うワンダラーの働きを守ります。」

夜一一時。

東の空に沢山の閃光がパツパツとひらめく、それは三〇分間以上にわたって光った。そ

の時、次のテレパシーを受けた。

「悪いもののカルマを焼き払っていらっしやいます。」

七月七日、午前六時一七分、○○夫人は次の夢を見た。

夫人は空中を飛んでいる。傍に、姿は見えないがどなたかがおられる。飛んでいる所は  
動物の世界であった。不思議にも空中を飛んでいるあいだ、どこにでも太陽が輝いている  
のであった。全ての動物達は大変に喜んで、楽しそうに遊んでいるのがよく判る。

ある浜辺の上を飛んでいる時、その浜辺で小さな亀が二匹、大きな波に吞まれようとし  
ているのが見えた。助けなくてはいけないと思い、空中より降りていった。見ていると、  
大きな波と一緒に白い大きい袋がやって来た。そして、その二匹の亀はその大きな袋の中  
にスーツと入って助かったのである。良かった、良かったと夫人は言った。

再びその動物の世界の上空を夫人は飛んで行った。ある大きな池の上に来ると、その池  
の中から大きなカバが出て来た。そのカバは夫人に語るのであった。

「私に乗って下さい。人間として乗せるのは貴女が初めてです。貴女は私達の母である  
からです。」

そういって夫人を乗せて、その池を渡っていった。

高知のN夫人は、今年の正月頃から、一九七七年七月七日は、カアハミテスの御使命を持たれる皇太子殿下（明仁殿下）の御即位が行われるのではなからうかという確信に近い思いがしてならなかった。そして、夫人はそのことを、手紙や話の中にたびたび語っていたのであった。

またI氏も、今年の七月七日は、明仁殿下にかかわる喜ばしい大切なことが起こるのではないかと語っていた。

その七月七日の日が来たのである。

この日、朝、高知のN夫人は次の光景を霊視した。

洗たくをしていた私（N夫人）の手は一瞬止まった。

大切な儀式が行われている。

鏝球王国における即位の儀式である。

天の神様を中心に、五名ぐらいの神々様が並んでおられる。殿下（明仁殿下）の御魂は静かに跪き、王冠を受けられた。

午前九時三〇分。

不思議な静けさが夫人を満たし始めた。

夫人の魂は、鏝球王国のその地にいた。「ひめゆり」の言葉が口をついて出てくる。

偉大な御魂を無きものにしようとして火炎ビンが投げられたあの地は満々と水をたたえた美しい池となり、その池の廻りには神々様が立っておられる。この池こそ皇太子の涙が、真の涙がたまって池となった所。

失った過去の地球の罪なき魂の上に流れ流れて、たまった鎮魂の涙の湖、湧玉の池。もうこの地には、過去の地球のいまわしい戦いの影はなにもない。

その池に、湧玉の池に、神様のお顔が写っている。古い地球のあの厳めしい、そしてやつれた（以前にそのようなお姿を拝した。）お顔ではない。白いおん髪は、なんと穏やかな輝やきに満ちていることであろう。

そこにはなぜか、王冠を頂く明仁殿下お一人の姿しか見られなかった。

天と地を貫ぬいて御柱が立った。天と地とを貫いて輝く鏝球王国の礎は出来た。

儀式の終わったその池には、白とピンクの蓮の花が一面に咲いていた。

この地でなくなられた若い乙女の生命が花となったと思えない。そんな光景であった。

鏝球王国の「たましいの世界」における即位の儀式であった。

## 第二章 カルマを真で解く戦い

七月七日、地のサナンダは次の祈りをされた。

「天の神様、カミラ様にサナンダからお願ひ申し上げます。

悪しきカルマ、一切の邪念じゃねん、悪に染まった一切のカルマを、ここに、これから目覚められますすべての方々のカルマを取り除いて下さいますようお願い申し上げます。

その方々の一切の身のけがれを焼き捨て、池に葬るべし。また解かれるべし。清めます。サナンダは、焼き入れの火をいつでも付けられるよう用意しています。

その方々のカルマは燃えつくされます。」

このようにカルマを取り除いて下さいと祈ったところ、暫くしてご返事を頂いた。

「取り除いて下さいます。」

これに答えて「すぐお聞き入れ下さいましたことありがとうございます。」とお礼を申し述べたのである。

同じ日（七日）、午後一時、N夫人は次の靈感を得た。

「各自が身に持つ不必要な悪しきカルマを取り除くことは、このこと（カルマを真で解くこと）をお願ひする宣言を自分からすることによって出来るのである。

宣言とは発表である。カルマの発表である。その発表は天の神様に対してするのである。」

「自分からカルマを取り除いて下さいとお願ひ（心の中の不満、不平、苦しみを発表することを宣言という。）にいった時、天の神様は、初めてこれを取り除くことがお出来るのである。」

「ワンダラーの最大の罪は聖霊を汚すことである。ワンダラーのカルマは、聖霊に対する不信心から生まれるのである。」（註ワンダラーの最大のカルマは、天の神様の靈感を蹴ることである。）

同じ日（七日）、午後一時一〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「先に片目を閉じて降りられたみるく様（タノアス様）のお目は、みな（地の、天の神、サナンダ、聖母の三人）に守られて開かれました。」

これは、〇〇が目覚められ、地のタノアスに成られたことを意味する。

### 天の神々様の御言葉

天の神々は一つになって進んで行きます。地の神々も共に進んで行きます。

すべての方々（ワンダラー）、ここに自分の身に持つ不鮮明なもの、数多くのめかしい

もの（体裁を飾るもの）、ここに捨てて、  
新しき真の愛を送ります。

ここに気が付かれますことを天の神々は、貴方々の気が付かれますのをいつのことかと待ちます。

この真の愛を知る時、皆さんは涙することでしょう。

同日（七日）、午後四時一〇分。

#### 天の神様の御言葉

皆の苦しみは、サナンダが受けます。今までと同じようにサナンダは皆の苦しみを受け、その苦しみを取り除くのは天の神であり、カミラです。

多くの神々が皆の苦しみを取り除きます。ここに同じくするすべての人々よ、サナンダが道を開き、その道を歩まれることを、ここに皆さん進んで行かれますよう祈るのみです。

今までの古い地の人々はサナンダに助けられたことも、天の神々に助けられたことも、忘れていのです。

今、新しく、すべての人々よ、真の愛に（気付き）受け入れられますよ

う…………。

天の神であり、

サナンダ、カミラ、多くの神々、天の神々は祈るのみです。

同日（七日）、地のサナンダの祈り。

「タノアス様、アトネ様、サナンダからお願い申し上げます。

目覚める多くのワンダラーを、すべての人々を愛で包んで下さいますようお願い申し上げます。」

その日（七日）、夜七時頃より、雷鳴天地に響き、雷光は天地を貫いた。

「天の神々は……。すべてこれから始まります。」

N夫人がこのテレパシーを受けたあと、暫くして、物凄い大音響と大閃光が二回あった。最初の大閃光の物凄い光の波は、この目と全身で受けたのであった。この時、この雷光は、「陽を表わす」と判った。二回目は、光も音も前と同じ大きさであると判ったが、なぜか光の波を目と全身に感じないので不思議に思った。

その時、この雷光は、「陰を表わす」と判ったのであった。その時、次のテレパシーを受けた。

「始まりました。」

続いて巨大な閃光が、地の天の神のところに、雷鳴と共に天地を貫いて発生するのを見た。(〇〇宅に落ちたと直感した。)

樹この雷は〇〇宅の裏庭に落ちたが、不思議に驚きも恐怖もなく、反対に大きな安らぎを得たと〇〇は語られたのであった。

この時、次のテレパシーを受けた。

「天の神様の巨大な柱が立った。」

天の神様の雷が落ちたあと雷鳴と閃光は各所に発生した。その鳴り響き、閃めきわたる光の柱を見ていた時、次のテレパシーを受けたのである。

「神々の柱が立った。」

「天の神々は大変喜んでおられます。」

「ここに準備一切が整いました。」

一九七七年七月七日は、深い意味が秘められた大切な日であった。その日一日の様々な出来事を振り返ってみると、この日は何か大きな区切りの日であったと強く感じるのである。

七月八日、午前〇時一〇分、N夫人は月を見ていた。すると次のテレパシーを受けた。

「契約の半分、見えないのがあと半分(あとの半分の契約のこと)。」

この時、羽衣をまとわれた天女が、泳ぐように月から出て来られる天のしるしを見た。

天女は月の下にそのお姿を現わされた。このお姿を見て、「天女である」と再び確認した時、お姿は消え去った。

再び月を見た。月は薄雲に覆われていたが、目の前にある雲が三角形を切り抜いたように取り払われて、月が、光る三角形となって輝いている。

これを見てみると、光る三角形(△)は一つの半分(契約の半分)であり、残りの半分(契約のあと半分)は見えない半分の契約(▽)であると判るのであった。

このように理解が出来た時、引続いて次の光景が展開した。

月の右横側にあった薄雲の中から三匹の亀が月の方向に進んで行く。やがて三匹の亀は月を包んで正三角形のそれぞれの頂点の位置に立った。<sup>④</sup>

これを見て、三人の方々(皇太子殿下、美智子妃殿下、浩宮様)はこの亀に乗って鏝球王国に行かれるのであるとなぜか強く直感した。(同時にもう一組の三人の方々も行かれるのであると思った。)

また、他の方々が行かれる時もこのような天のしるしを見せて頂けるのではないかと思

い、沢山の亀が出て他の方々も乗れますようにと祈ったのであった。

同日（八日）、午前六時。

「天の神々は今から始めます。」

とテレパシーを受けたN夫人は、「有難うございます。」とお礼を申し述べた。

そして、ここにおいて次のことを理解したのであった。

『一九七七年七月七日までは、一つの半分（契約の箱の半分）であった。ここに契約の箱の半分が出来上がった。』

『七月八日からは、あと半分の契約の箱を作って行く働きが始まったのである。』  
午前七時。

太陽の右側に天のしるしで三羽の錦鶏が飛んでいるのを見た。太陽の下の方に巨大な富士山の形をした雲が現われた。暫く見ていると、その富士山は太陽に近づき、富士山が太陽を頂いたように見えた。その時、この富士山は鏝球王国の新しい富士山であり、鏝球王国はこの新しい富士山に関係があると思っただのである。

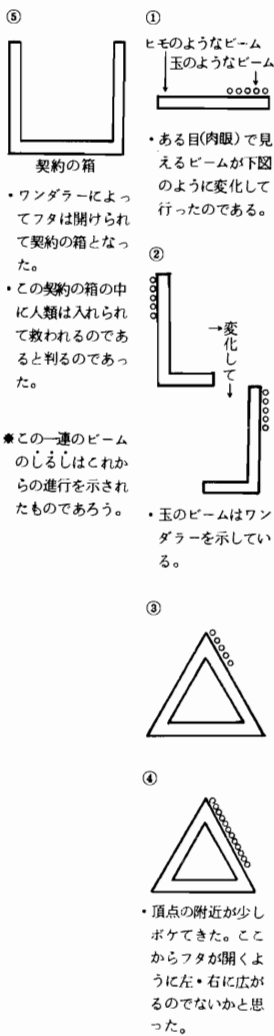
この時、次のことが心から湧き上がって来た。

沖縄のひめゆりの地は、新しい地球、鏝球王国の中心となり、そこは湧玉の池となる。そこ（湧玉の池）が新しく出来る富士山の裾野になるのであると……。

そして、いずれこの地において重大な儀式が行われるであろうと思うのであった。

鏝球王国の中心、ひめゆりの地が湧玉の池（▽）となり、そこを裾野とする新しい富士山（△）が出来て、結ばれ☆となり、その頂点が結ばれて✪となり、これが回転して⊙となり、新しい地球のエネルギーとなる。

午前八時、N夫人はソクトル様から送られるビームが次の形を造る光景を見ながら靈感を受けた。



午前九時のテレパシー。

「人間が契約の箱の中に入るには、霊鳥、霊獣がいなければならないのです。人間と動物とは一つなのです。」

人間を乗せるため、動物達は待っています。」

午前一〇時のテレパシー。

「『日』は整い、あと、木の基を作らなくてはならない。（基とは本。木十一〓本となる。）」

これで、『日本』（二本）となり、結ばれるのであります。

今は一本の木が完成、これからもう一本の木を完成するのであります。

これで△の頂点のフタが開くのであります。契約の箱となります。」

同日（八日）、午後四時一〇分。

「地の天の神様、お立ち上がりになられました。一本の木となりました。」

「地のカミラ様がお立ち上がりになられますと、一本の木が立ちます。そしてこの二本が結ばれて、『日本』となり、<sup>クロス</sup>十となり、結ばれ、これによって行われ、完成するのです。」

同日、午後一〇時、W夫人は天空に天女が美しい羽衣をまっとしてお立ちになっておられるお姿を天のしるしで見た。

同日（八日）、夜一二時。

〇〇夫人は、この一〇日ばかりの間、〇〇と〇〇の対話をまわりから聞くたびに、またこの二人の方の苦しみと涙を見るたびに、まわりの方々の目覚めが遅れることはこんなに大変で苦しく悲しいものなのかを知ったのであった。夫人は就寝前、祈りを捧げた。

「天の神様（地の）とサナンダ様（地の）のお苦しみが少しでも和ぎますように……。

主役のワンダラーの方々のカルマが少しでも早く解けて目覚められますように……。

〇〇は聖母マリア様のみたまを頂きました。このお役が完全に果たせますように……。」

夫人はこの祈りを繰り返し繰り返し続けた。

九日未明、〇時四七分、夫人はふと目を醒ました。その時自分の身体の異常に気が付いた。自分の上半身が四五度くらい角度で空中に浮いているのだ。浮いている上半身を元の位置に戻してみた。するとまた、その上半身は前と同じように宙に浮くのである。夢ではないかとこれを幾回も幾回も繰り返し返して見たが、確実に宙に浮くのであった。もっとよく自分を確かめようと思い、全身の至るところを掴<sup>つか</sup>って見た。しかし、不思議に痛みは全く感じない。その時、「私はマリアになったのである。」と確信したのであった。

七月九日、早朝の散歩の時、W氏は、地のサナンダ様の御苦しみとまわりの方々の目覚めの遅れはすべて自分のいたらなさから来るのであると思ひ、天の神様に深くお詫びしたのであった。

同日（九日）朝。

「聖母様は、すべての人々を愛で包みますから、ほかの人々が心配する事はありません。



がいる。この虫を見た瞬間、W氏は、なにかある、なにか深い意味を教えるためのものがあると強く直感した。その虫を注意深く見たとたん、この虫は今日の儀式と深い関係があるとの靈感を受けたのであった。

この虫は木の形である。大きさは一五センチメートルくらいであった。

これ（＊）は、これから始まる鏝球王国建設の基礎となり、エネルギーとなる仕組の原形を、この虫の形によって示されたのであった。

その仕組の原形は、去る六月一九日の「この地球最後の儀式」にて、地のワンダラーが天の神々様を奉戴したことにあった。

これは、これから天と地と一緒に行動し、一つになって進んで行くことの基本原型であった。またこの原型（＊）は、前にも述べた完成へのエネルギー（⊕）であり、鏝球王国建設の根本的基礎エネルギーでもあるのであった。

この儀式に参加される主なワンダラーの方々全員のカルマが真で解かれて目覚められ、木に結ばれて活動を始められる時、⊕となつて鏝球王国建設の基本的母体は出来上がるのであると、この虫が知らせてくれたのであった。

この時、次の言葉の意味を本当に理解することが出来たのである。

「天の神様、サナンダ様、神々様がこの地にお降り頂きました時から、この地にて皆さ

んと共に働きが始まり、これからも皆さんと共に進んで行くのであります。一緒にあります。」  
註天は、天の神々は、地のワンダラーをお使いになって地での働きを行われる。天と地は一緒に進むのである。

この日（九日）午前二時二十八分、〇〇はタノアス様より次のテレパシーを受けた。

「タノアスとあなたは一緒にいる。」

あなたの考えることはタノアスの考えである。

あなたの不足はタノアスが補わねばならない。

タノアスはあなたを助けるために、あなたと一緒にいる。

タノアスの働きをあなたの働きとされる。

あなたの働きをタノアスの責任とされる。」

「あなたの真の語らいはタノアスの語らいである。必ずタノアスが助け、行動します。岩をも通す自信と信念を持って皆さんに語りなさい。」

「あなたは不思議に思っていましたか、今までも悪い者を助けるタノアスの役を、あなたは助けてくれました。」

皆も一緒ですが、あなたはいつも低い所の人、目覚める前の人、迷える人に心を置いて、やわらかく暖かく心で愛して来た行いに、タノアスは手を差し延べてこれからも助けて行きます。これからはタノアスと一緒に行くのです。

天と地と一緒に進んで行くのです。」

「Wさん、Sさんに自信を持って語りなさい。タノアスがあなたと共に語るのです。」

皆さんの語らいを、礼儀を持って聞きなさい。天の神様、サナンダ様、カミラ様、アトネ様が皆さんと共に語るのです。」

続いてアトネ様からのテレパシーを頂いた。

「沢山のワンダラー、大勢の人々を守り助けるのです。やわらかい暖かい愛で皆を守り助けるのです。」

「いつも低い人を心で愛して、迷っていても、間違いをしても、腹立てず怒らずに、礼儀をもって、やわらかい暖かい愛で守り育ててまいりましょう。」

続いてソクトル様からのテレパシーを頂いた。

「天と地と皆が一緒になって進んで行くのです。」

この日（九日）、夜一〇時二〇分より儀式は始まった。まず今日の儀式について、W氏が説明を行った。

今日の儀式は、鏝球王国の建設の基礎原形となるワンダラーの方々の身に持つ不必要なカルマを天の神様の前に全部出し尽して、カルマを天の神様に解いて頂く儀式、即ち、カルマを真で解く儀式」である。

カルマが真で解けた時、次の段階へと前進出来るが、今のままでは一步も半歩も前進出来ない。

W氏はこのように語り、つづいて全員がカルマ（日常の不満、この道での不平、不満、不信）を出し尽す語らいの場となった。この語らいは翌一〇日朝九時まで続けられたが、カルマを全部出し尽すところまでには至らなかった。

この日（一〇日）の朝五時三〇分頃より、W宅の裏の松林に鶯が突然鳴き始めた。それは実に綺麗な鳴声であった。W宅附近では毎年三月下旬から四月一杯までが鶯の鳴く期間である。五月に入ってからそれを聞いた例はない。今年も四月下旬から鶯は姿を消していたのであるが、この日（七月一〇日）の午前五時三〇分、突然一羽の鶯がまことに美しい声で鳴き出したのであった。この鶯は翌一日の夕方まで鳴いて、どこかへ去って行った。なにかこれには意味があるように思えるのであった。

七月一日、午前五時。N夫人は以前と同じようにビームで画かれる図を見せられ、かつ靈感を受けた。

三角形△の頂点は開きかけているが（開けば契約の箱となる。）、なにかもたもたした感じであり、頂点にはなにかまだ解けないごたごたしたものがあるのが見えるのであった。

これは、主役のワンダラーの方々のカルマが出し尽されないので、△の頂点の蓋が開かないのであると判るのであった。

午前六時三〇分。

「カミラ様（○○）は涙しているのであります。」

午前七時。

「陽の方」（▽・地における、天の神・サナンダ・マリア）は完成しているが、陰の方<sup>カ</sup>は完成していません。」

午前八時。

「今は一つになっていないので、進まないであります。」

地のカミラ様、タノアス様、アトネ様は一つになっていないのであります。これが（三人が）一つの柱である。この柱が立てば結ばれるのであります。」

午前八時四五分。

「○○（地のカミラ様）が一番難しいのであります。地の、カミラ様、タノアス様、アトネ様、一つの柱を守り進んで行かれますようサナンダはお願い申し上げます。」

カミラ様、タノアス様、アトネ様、この一つの柱を守り進んで行かれますよう祈ります。午前九時一五分。

「三人の方々が目覚められますと一つの柱が立つのであります。一本の柱は出来上がっておりますが、残りの一本が完成しますと、日本<sup>ニ</sup>となり、二本の柱が一緒に進んで行くのであります。」

日（▽）月（△）交る<sup>カ</sup>、の太陽は済みましたが、これから月を完成し、一つの結びを作らなくてはなりません。今です<sup>ニ</sup>月の柱（陰の柱、△三人）が結ばれることを祈ります。」

午前九時三五分。

「これはもう逃げることの出来ない道です。いかに苦しくとも目覚めねばならないのであります。」

九日の夜半から始まった陰の柱となられる方々（三人）の身に持つカルマを真で解く苦しい厳しい戦いは、尚も続いていったのであった。

同じ頃、高知のN夫人には、目覚めとカルマを真で解く戦いが行われていた。そのことは夫人から次のように知らされて来た。

七月一〇日、朝五時三〇分、次のテレパシーを受けた。

「汚い<sup>きたな</sup>ものを全部出してしまいます。綺麗になります。軽くなります。」

汚きたないものとは長年低い周波数の地球での生活をしているうちに溜たまり溜けがった汚れと自我のことである。

自分というものがなくことに気がつき、すべての我を捨て去り、ただ神の身体からだ、神の霊、神の魂たましいがあるのみと気がつく、その自覚に達する時、すべての人が天の神と共にあることに気がつく。そして、存在するものは各自の役目のみと気がついた時、鏖球王国はこの現実の世にあらわれる。

夫人はこの時、次のように祈った。

「そのことに気がつきましたので、この古い地球の影はいりません。どうか消し去って下さい。あるがままの本当の姿に返して下さい。」

その時、私（夫人）はある意識に達しました。私の魂は帰る時が来ました。この地球におけるすべての役目を果たして帰る時が来ました。私は静かに横になりました。

私は心の眼に、一羽の白い鳩に乗って帰って行く自分の魂を見ました。

午前六時一五分。

「入れ替えます」という言葉があって、頭が「ズーン」としました。次に肩のあたりが「ズーン」としました。それで終わりでした。

私の肉体に入れ替わった魂は一体なものなのでしょうかと問う気持がおこってきまし

た。すると次のテレパシーを受けました。

「天の女。」「あなたを見れば喜びと慰なぐさめと安らぎが与えられます。それは潤滑油のよ  
うな役です。」

今の肉体は美しくもない重厚なものです、その魂の本当の肉体（からだ）は限りなく美しく、限りなく優しく、限りなく軽かろやかなものであることを知らされました。

この手紙をここまで書きかけたまま三日がすぎました。この三日間は、私にとって本  
当に悲しい苦しい戦いでした。それは私の身に持つ不必要なカルマを真で解く戦いでした。

その苦しみのために気を失いそうになるくらいのものでした。恐ろしいからといって、  
苦しいといって、そこから逃げることは出来ません。

いかに悲しく、苦しくとも、私の心の中や、口から、愛のない言葉が出た時は自分の負  
けです。相手からどのようないわれようとそれは構かまわないので、恨みに思う気持は少しも  
湧きません。

ただ、どこまで忍の戦いに自分が堪えられるかが問題です。でも有難いことに今の私の  
魂は自分を捨てておりますので、堪えられるように思います。

「オイカイワタチ」が、本当に生きた言葉の書として私の魂を慰めてくれます。

私はまた新たな意識の世界に自分がいることを感じます。

それは古い地球の姿を、また、この三日間の苦しい戦いの後をはっきりと意識することでした。

この地球を悪く変えたものの象徴として、貨幣と剣つるぎ（権力と自我の象徴）のカルマのことを思います。

この二つが生み出されたその時から、地球人類は坂道を転げ落ちるように転落し始めました。人は金にくくられてしまつて、本当の生き方と価値を失ったばかりでなく、この金のためにどれ程多くの人類が、生命を落し、魂を売り払い、死よりも悲しい苦しい境涯に落ちこんだことでしょう。

また剣は権力と自我の象徴として、人々を地獄のどん底につき落してしまいました。権力を握った者も、その座を奪われた者も、またそれらに連なるすべての人が地獄でした。

この二つが入り乱れて演じられた地球の歴史とカルマは、本当に身の毛のよだつものでした。そのどうしようもなくなった姿を見て、この地球を救うために降りて来たワンダラーもその強力な悪の前にすべて犠牲となつたと思えません。

『オリオンのものが私（イエス・キリスト）を地球から除き得るということを私（イエス）を頼る人々に見せ、オリオンの力を彼等（ワンダラー）に知らせたのです。』（オイクイワタチ本書）

人々は本当のその恐ろしい悪の歴史を知りません。またそのことに目覚めていません。いよいよ、そのカルマが地球全体を吹き飛ばす程の強大なものとなって来た時、天の神様はいくつかの特別の配慮をなさつたことに気がきます。（宙その中で最大の柱はカミラ様のみたまの誕生である。）

人類の発生以来、その志を持って、ワンダラーとしてこの地球に生まれ、そして犠牲となつていったその人々の数は累々として山を築いております。そのようにして犠牲となつた魂を、天の神様はどのような気持で御覧になつたことでしょう。

どれ程魂は高くとも、この地球の低い周波数の肉体をつけてしまうと思うように戦えなくなるのでしょ。イエスをさえ除き得る力を持った相手です。

天の神様の特別の配慮とは……

天の神様始め天のいと高き魂（神様の席の方の魂）を、最後の決戦にいどむワンダラー達が奉戴して、神々の御力で古い地球を新しい地球に変えることでした。

すべては天の神様始め、宇宙の神々の戦いであつたのです。

『まず生命をとじて使命を遂行する覚悟と準備が自分に出来たことを示しなさい。』（オイクイワタチ本書）

いよいよ神様のみ心のままの鏖球王国が霊の世界（神界）に出来上がり、去る六月一九

日「この地球の最後の儀式」の時に奉戴した神々こそ、その方々の魂となってよく戦われたことであると気づきます。

この恐ろしい地球のカルマを真で解く戦いは、並みたいいの魂では果たせないものでした。それはすべて、天の神様始め神々の御力であったことに気づきます。従ってこの宇宙年月の間には、役目がうまく果たせなかった方々も時にはあったが決して責めることは出来ません。尊い犠牲の上に初めてこのことがあったのです。

もともと天の神様と自分とは、離れて存在するものではありません。自分は天の神様に連らなっているという心の、礼儀正しい態度が判れば、もともと自分はなく、ただ役目があったのみであったと気づくと思います。これが本当の離託でありましょう。

ワンダラーの目覚めが遅いと苦しみはいつまでも続きます。生む準備はすべて整いながら、いつまでも生まれ来ぬ苦しみは、すべてのものの苦しみです。——後文略——

### 第三章 鏢球王国のたましい（本の心）誕生

七月一二日、W氏は長野方面に出張した。車中、天の神様に、陰の柱とられる三人の方々に愛と守りと、また目覚めの靈感を送って、カルマを真で解いて下さるように祈りを捧げた。

午前一一時三〇分、W氏は長野駅のプラットホームで乗り換えの列車を待っていた。すると、足もとに三羽の可愛い雀が仲良くやって来たのである。この時、W氏は三人の方々の目覚めが始まったと直感した。三羽の雀は彼の足元で暫く遊んでいたが、列車が入って来たので飛び去ってしまった。

更に向側のプラットホームに六羽の鳩が、それぞれ三羽ずつと。の形を作っているのを見た。やがて。の形をした三羽は組になったまま彼のいるホームに飛んで来た。そしてなお、。の形をくずさずに、ホームを前方に進んで行ったのである。これによって陰の柱の三人の方々の目覚めが始まったことは確信された。

さらに、長野駅で乗り換えて目的地に着くまでの約二〇分間に、彼は窓から次の光景

を見た。

西空の右側には巨大な鶴がはばたき、左側には巨大な亀の姿がハッキリと現われている。やがて巨大な亀は錦鶏の姿に変わった。そのあと西空に「鳳凰」が舞うのを見たのである。

七月一三日、午後六時頃、松本駅のプラットホームにて、W氏は、西空に地平線より巨大な半円形を画いた太く美しい七色の虹が鮮やかに立ったのを見て、「すべて良い方向に進んでいる」と直感した。

その日（一三日）、午後一〇時、I氏は次の靈感を受けた。

「天の神様、神々様と地の神々との結び、皇太子殿下と大國主命との結びの儀式は、現地沖繩のひめゆりの地にて行われる。その日は近い。しかし、その儀式は主なワンダラーの方々が目覚められてから行われるのである。」

七月一四日、今日は、N夫人は未明より一日中、次のようなテレパシーと靈感を受けた。午前二時頃、サナンダ様のお姿が現われ、大変お喜びになっておられるお顔を拝した。午前三時より午前八時三〇分までに、「良よしとされました。」というテレパシーを三回受ける。この言葉が頭の中を占領し続けて、朝まで眠れなかった。

午前一一時三〇分、沖繩での儀式について……

「天の神様は全人類（一般の人々）をノアの箱舟に乗せて、沖繩での結びの儀式に参加されます。」とテレパシーを受けた。

午後二時四五分、「契約の箱は完成されました。」

午後四時、「陰が光を発しました。」

午後四時三〇分、「カミラ様の愛がかけられます。」

午後六時、西の空にサナンダ様のお姿を拝した。サナンダ様は長い杖じょうのような棒（如意棒）を持たれ、その顔は光り輝いていた。

午後七時四〇分、「サナンダ様はお立ちになられます。」これによって、サナンダ様は陰の柱の方が目覚められるのを待っておられるのであり、陰の柱が立てばサナンダ様がお立ちになれることを予告されたのである。

続いて次のテレパシーを受けた。

「天と地と皆が一つになって進んで行くのです。」

七月一五日、午前一〇時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「意識の目と心の目が結ばれる時、真の愛は永遠に続きます。」

続いてカミラ様より次のようなテレパシーを受けた。

「サナンダ様の思いのままの地球となることでしょう。サナンダ様は真の愛を送ります。」

「サナンダ様の道を、開いて下さいましたその道を、真の愛のただ一筋の道を、皆が心を同じくして、一つの道に進んで行かれますよう、皆さんが喜び合える日を一日も早く、そしてこの世が一変することを祈ります。」

七月一六日、午前六時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「皆さんの思うままの地球となりますでしょう。」

午後〇時四五分、N夫人は、西空に、上下に正しく二つ並んで浮かんでいる亀の、極めてハッキリとした天のしるしを見て、「陽の柱」と「陰の柱」がいよいよ揃う時が来ると直感した。

また、次のような靈感を受けた。

「陽の柱と陰の柱の二本の柱が結ばれることにより二本となり、日本となるのである。こうして鏝球王国の中心である日本が出来るのである。これが基となって世界が出来てゆく。また、陽と陰が結ばれ（▽陽と△陰が結ばれ☆となる）、それにより陰は光る影となるのである。」

これには、ワンダラーの主役となる方々の身に持つ不必要なカルマがまず解けねばならない。カルマを真で解き、目覚めて、陽の柱と陰の柱が結ばれたとき、鏝球王国の中心、沖繩のひめゆりの地にて行われる次の儀式は良く果たされるのである。

（今日△一六日▽はこのための集まりが行われたが、難産のため陽の柱と陰の柱は結ばれなかった。）

午後六時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「サナンダ様は二本の木（日本）と共にあるのです。」

サナンダ様は、陽の柱と陰の柱が結ばれて、二本となり、日本となるのを今かと待っておられるのである。鏝球王国の中心日本が確立することは、この輪を世界に広げる基礎となるからである。

七月一七日、午前五時一〇分、W夫人は、「空を見なさい」といういつものテレパシーで目を醒ました。地平線は明るい、天空は全体が異様な感じの黒雲に覆われている。「なにかが始まるかな」と思った。

丁度この時間に、N夫人は、W夫人の見たのと同じく異様な空を眺めていた。その時、次のテレパシーを受けた。

「サナンダ様の思うままになります。」

この時、カミナリが柔らかく鳴り始めたが、その音がなんとも心地よい感じであった。そして雨が降り出した。続いて次のテレパシーを受けた。

「契約の箱の中の巻物は道であり、人類はこの道を進んで行くのであります。」

同日（一七日）、午後三時四〇分、W夫人は天の一角に天女が羽衣をたなびかせて立ておられる天のしるしを見た。羽衣の中に△△の三角形が画かれ、またεの文字が画かれていた。

午後五時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「マリア様はお立ち上がりになりました。」

七月一八日、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「サナンダ様の手はこの地球の血となり肉となるのであります。」

「三人の方々（陰の柱の方々）がお立ち上がりになります。」（立ち上がられるのは間近いといわれたのである。）

七月一九日、午前二時二一分、W夫人は力強く、おごそかな、しかも静かなお声のテレ

パシーを受けた。

「○○○○様が立ち上がられました。」

夫人はこの声を聞くと同時に寢床の上に飛び起き、知らぬ間に正座していた。ところがお名前が思い出せない。午前七時二〇分、このお方はどなたですかと太陽に向って問うた。

この時は、天空は一杯の雲で覆われていた。が、突如雲が開けて太陽が輝き出した。さらにその太陽を抱いて巨大なZを画いた雲が現われた。その時、先の御方の御名前は、「サナンダ様」であると直感したのである。

これは、サナンダ様が今まで横になっておられたという意味ではない。地の私達ワンダラーの準備が整い、次の事柄へ進んで行けるようになった時には、このような天のしるしをもってそのことを示されるのである。

この日（一九日）、午後四時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「サナンダの道を進まれるよう、すべての人々よ、進まれるべし。」

七月二〇日、午後二時三〇分頃より、あるワンダラーは残っていた身に持つ不必要な最後のカルマを、天の神様の前に全部出し尽くした。そして、去る九日から始まった、「カルマを真で解く苦しい戦い」はこの日に終わったのであった。

午後三時 N夫人は次のテレパシーを受けた。

「三人のお方（陰の柱の方々）はお立ち上がりになりました。」

ここに、「陽の柱」と「陰の柱」の全員が勢揃い出来たことにより結ばれ、二本となり、日本となった。来る二二日、鏝球王国の中心、沖縄のひめゆりの地での儀式は、これにより良く出来ることになったのである。

同日（二〇日）、午後五時一五分、W夫人は、西空を見た。天空は一面雲に覆われて真暗である。しかし、一部分のみは雲がなく、それが人間の形をして明るく光っている。これはワンダラーを示しているのだと直感した。やがて人間の姿は槍の形に変わった。その時、次のテレパシーを受けた。

「多くのワンダラーのカルマを真で解く戦いが始まる。」

七月二一日、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「サナンダの道を皆さんは歩まれます。」（午前九時）

「サナンダの道を皆さんは歩み始められました。」（一二時三〇分）

この日（鏝球王国のひめゆりの地における儀式の前日）の夜半、Mさんは夢と現実の境の中で、ある目覚めと深い自覚に導かれた。これにより沖縄における儀式に対する心がまえが出来たのであった。

七月二二日、鏝球王国の中心地、沖縄のひめゆりの地にて、「天の神様、神々様と地の神々との結びの儀式」が行われた。

この儀式には、地のワンダラーの方々は心と魂で参加され、現地にはW氏とMさんが代表で参加した。

この日の正午頃、沖縄南部（ひめゆりの地が在る所）には浄めの雨が降った。

午後六時、車はひめゆりの地に到着した。交通事情が悪く、到着が遅れたことが幸いして、車の中で心を十分に落ちつけ、静かに祈り続けることができた。

その時、次のテレパシーを受けた。

「儀式は出来ました。」

到着が夕刻（午後六時）であったためか、参拝者は少なく、周囲は静かであった。さらに我々がここに到着して間もなく、この少数の参拝者も去り、そこは静かな聖地となった。ここひめゆりの地に足をふみ入れた時、「ある儼かな表現しがたい波動が足先から全身に響きわたるのを感じた。」

この波動を感じながらこの聖地に献花をして、儀式の祈りを行った。祈り。

新しい地球、鏝球王国の天の日王、大国主命は、地のワンダラーと共に、ここ鏝球王国、ひめゆりの地に、本日の結びの儀式に参りました。

天の神様は、一般の人々（全人類）をノアの箱舟に乗せて、ここにおみえになられました。天の神様ありがとうございます。

神々様ありがとうございます。

天の神様の永遠に降り給う地、この鏝球王国、ひめゆりの地にて、すべて一切を守り下さいます天の神様、神々様、この地の神々と結ばれまして、新しい地球鏝球王国を統べられる陽の柱であります明仁殿下と陰の柱であります大国主命はここに結ばれまして、行われました大御業まことにありがとうございます。

天の神様ありがとうございます。

神々様ありがとうございます。

かく祈りを終えてから、持参した「オイカイワタチ」本書と別冊(一)(二)(合本)の二冊を、ひめゆりの塔の下にある乙女が自決した壕の中に捧げたのである。

この時、

「これで、乙女達は、新しい地球、鏝球王国の中心に住まうことになった。今までの苦しみ、悲しみは、喜びと至福に変わることとなった。」と確信し、また、「これで、すべて良かった。」と直感した。

註この二冊（本書と合本）を沖繩に向う飛行機の中で開いて見たW氏は、驚きをおぼえた。

というのは、別冊合本の表紙が反対につけられていたからである。そこでW氏は、このような本をひめゆりの地に捧げるべきかどうかを思い迷い、このことを暫く機中で瞑想した。

すると、声なき声で次の言葉を聞いた。

「本書（表紙は正常）は△を表わす。

別冊合本（反対表紙）は▽を表わす。」

この二冊が結ばれぬとなり、契約の箱が完成することを意味すると判ったのであった。

二冊の本を捧げたあと、二人の目は自然に太陽に向いた。すると午後六時三〇分頃というのに、太陽の中に物凄く強い躍動を感じた。そして、太陽の中に次のような光景を見たのである。

この巨大なZの文字が現われ、花火のように、ドン、ドン、ドンと打ち上げられた。しかもこれが三回打ち上げられたのであった。その光景は、太陽の右側に玉の連らなった大きな柱が立ったと直感させられるものであった。

この巨大なZの文字が消え去ると、Zの文字のあった下あたりから、美しく輝く二列の黄色い玉が現われ、花火のように、ドン、ドン、ドンと打ち上げられた。しかもこれが三回打ち上げられたのであった。その光景は、太陽の右側に玉の連らなった大きな柱が立ったと直感させられるものであった。

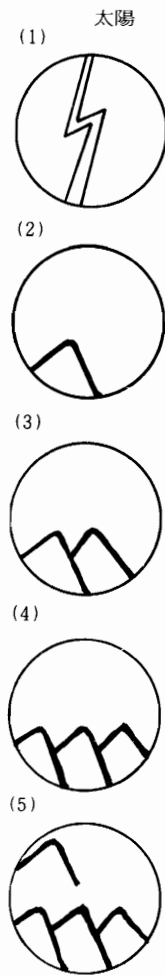
朝全天一杯に現われた龍宮、綿津見宮の天のしるし、しが消える少し前（午前七時三〇分頃）巨大なZの文字が、オレンジ色に輝く光で極めて明確に画かれる。これを見てアツと大声を上げた。この素晴らしい光景は、終世忘れることの出来ないものであった。

沖繩の空は驚くほど沢山の天のしるし、一杯である。東の空に、太陽を中心にして、龍宮と申そうか、綿津見宮わたつみのみやを表わすしるしが現われた。それは見る見る内に、さらに大きく全天を覆うほどとなった。まさに鏝球王国、綿津見宮をズバリと表現した天のしるしであった。

七月二三日、朝六時、

太陽の中の異変を見てから、ひめゆりの地を一巡し、正面に戻り、再び祈りを捧げて儀式を終わった。この時、新しい地球の湧玉の地は、「世界広しといえどもここしかない」と深く強い霊感を感じた。

こうして儀式を終えた二人は、重荷が降りたような気持となって、なんとも表現しがたい感激と喜びを感じながらこの地を離れたのであった。



最初、太陽の中に物凄い躍動するものを見た。暫く見ていると、太陽の中にイナズマが走った。（それは明確に見えた。）再び太陽の中に躍動するものを見ていると、

突然、太陽の中に三角の山が一つ現われた。それがハッキリ見えるのである。再び太陽の中に、生き生きと躍動するものが良く判る。

すると、こんどは太陽の中に三角の山が二つ現われた。前と同じように再び太陽の中は躍動した。

すると、こんどは太陽の中に三角の山が三つ現われた。再び太陽の中に物凄い躍動を見た。

すると、四つめの三角の山が現われた。暫くこれを見ている内に、この四つの山は消え去った。そして太陽は元の輝きに戻ったのであった。

この日（二三日）、午前一〇時三〇分、再びひめゆりの地に着いて天空を見上げた。そのとたんアツ／＼と声を発した。

太陽のまわりに、薄絹布のようにやわらかい白雲がたなびいている。しかも、その白雲には色とりどり（七色くらい）の色が一杯に重なりあって輝いているのである。まさにこの世のものとは思えない美しさであった。（この光景は、W氏が以前にも見た天のしるしだったが、ただ規模が非常に大きく、かつ明瞭なものであった。）丁度、そばに居合わせた人達は、「生まれてこの方、これ程美しいものを見たことがない。天の神秘の光景である。」と感嘆の声を発するのみであった。

そして、W氏とMさんは、再びここで深い祈りを捧げたのである。

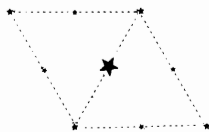
この日（二三日）、午後一時頃、天空に四角の箱のようなものが現われた。その後もこの天のしるしは度々目撃された。

翌二四日にはこの四角の箱がますます明瞭となる。（この日はこれを数回目撃した。）これは「契約の箱」であった。ここにおいて「契約の箱」は完成し、事態は次の段階へと進んでゆくのである。

七月二四日、沖縄にて午前四時W氏、なぜか目を覚ます。

東方の空には雲一つない。真暗ではあるが透き徹るような夜空に、沢山の輝く星々があつた。

この美しい星空を暫く眺めているうちに、大きく輝く一つの星に目が止まった。その星は、彼に何かを語るように思えてならない。じっと見つめているうちに、その星を中心にして星々が、正三角形、逆三角形、菱形、Zを画がいていることに気がついた。



中心の星は極めて大きく美しく輝いていた。四方の星は時々強く点滅した。あと四つのそれよりも小さい星はかすかに光っていた。これは、図に見られるとおり、正三角形、逆三角形、菱形、Zを表わしている。

この日、太陽は美しく、天空は一面に青空であった。午前七時三〇分頃、突如一点の雲が現われる。それはたちまち巨大な薄黒い雲に膨張し、小雨が降り出して廻りを清めた。この雨が止むと同時にこの雲に頭と足の形が現われて、雲は巨大な亀の姿となった。亀の甲羅には無数の人間（雲で表わされた）が乗っている。その巨大な亀は人類を乗せて、東から北へ、そして西へと進んで行くのであった。再び太陽が輝き出した。すると太陽の左側（二三日朝、黄色い玉が打ち上げられた所と正に対称となるような位置）に、地平線か

ら天空に達する大きな柱が立ったのである。

これと同時に、西方の空に、（西方は海である。）水平線より、海がそのまま立ち昇ったかと思われるほど巾広い巨大な柱が立った。この柱にはどこか厳しい尊厳を感じさせるものがあった。

かくして、膨大な天のしるしをともなった鏝球王国の中心沖縄のひめゆりの地での儀式は終えられた。



ここで今までの経過を振り返って見よう。

去る六月一九日の「この地球最後の儀式」はある大きな区切りであった。この「この地球最後の儀式」で鏝球王国の「霊の世界」は完成した。というより、正しく言えば、鏝球王国の「霊の世界」が誕生した結果、「この地球最後の儀式」を迎えることが出来たのである。

思い出していただきたい。

去る六月一三日、

「皇太子殿下、美智子妃殿下、浩宮様は、この鏝球王国に帰っておみえになられました。

あとの方々も一緒に、ワンダラー、すべての方々、一般の方々、一切の動物、すべてのものが、ここ鏝球王国に帰って参りました。

さあ、皆さん、目覚め会う時が来ました。

皆さん、目覚めましょう。

この鏝球王国と共に進んで行きましょう。」

去る六月一四日、

「天の神様はお立ち上がり下さいました。この地球は、鏝球王国神の国となりました。今までの悪いものは消え去り、ここに新しく天地が循環し、元の位置に復帰致しました。」

このように第一部に記述してある。

新しい地球、鏝球王国の霊の世界は完成し、神の国となったのである。この儀式が「この地球最後の儀式」という形で行われたのであるが、この中に含まれている様々の深い意味を洞察して頂きたい。

ここで言う「鏝球王国神の国の誕生」とは、鏝球王国の「霊の世界」（神界と申そうか）のことを指しているのである。従って、「霊界」「幽界」また「たましい」の世界のことを言っているのではないのである。

地球という遊星は、人間は、動物は、一切のすべてのものは、生命体である。それは、

「霊」と「たましい」と「形体」からなる。

「霊の世界」のあとに来るものは「たましいの世界」である。そしてまた、「たましいの世界」は「形体の世界」の一步手前なのである。

つまり「たましい」には陽（魂）と陰（魄）があって、この両者が結ばれて生を得、働きを得るのだが、この働きこそが、形の世界を造ってゆくものなのである。

鏝球王国の「たましいの世界」を、そして「形の世界」を神の国とする働きは、ワンダラーの使命である。

去る六月一九日の「この地球最後の儀式」が終わると同時に、天から私達地のワンダラーに対して、「陽の柱」と「陰の柱」を立て、これを結ぶための靈感とテレパシーが送られて来た。（「カルマを真で解く戦い」の章、152頁参照）この意味がここに至って判ってくるのである。

地のワンダラーが天の心、地の気を頂く、陽の柱（陽の柱の役をする三人のワンダラー）と陰の柱（陰の柱の役をする三人のワンダラー）がまず目覚める。そして立ち上がり、結ばれた二本の柱は、鏝球王国の「たましい（魂魄・陽陰）の世界」を創る基礎となるのである。したがってこの陽と陰の柱となるワンダラーがまず身に持つ必要なカルマを真で解いて目覚めなければ一步も半歩も前進しないことが判るであろう。こうして、陽の柱と

陰の柱が立ち上がって結ばれることにより、鏝球王国建設のお役目を頂く多くのワンダラーの方々も次々と目覚められるのである。

七月二二日の沖繩ひめゆりの地にての儀式は天の神様、神々様と地の神々とが結ばれて、『本の心』（魂∥陽の気）が生み出された儀式なのであった。

何れの日にか、『本の気』（魄∥陰の気）を生み出す儀式が行われることであろう。ここで、二二日から二四日までの他のワンダラーの方々の働きを述べよう。

七月二二日、午前八時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「契約の箱が動き始めました。」

「契約の箱は永遠に出されて行きます。」

沖繩の天空に「契約の箱」の天のしるしが度々現われたのは二三日四日であったことを思い出して頂きたい。

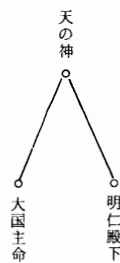
続いて次のテレパシーを受けた。

「この道はサナンダの血と涙の愛であります。」

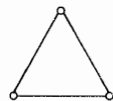
「これを（この道を）カミラに託します。」

そして、午後一〇時、仕事を終え帰宅する道で、N夫人は天にサナンダ様のお姿を拝したのである。

この日（二二日）、午後六時三八分、S氏はなにげなく太陽を見た。すると太陽の中心よりやや下（太陽に内接する正三角形の底辺）に白い線が横にハッキリと画がかれていたのである。これを見た彼は、今まで結ばれていなかった明仁殿下と大国主命が、沖繩鑿球王国の儀式が終わって結ばれたのだと直感した。



7月22日まではこの底辺が結ばれていなかった。22日の儀式により結ばれたのである。



但七月二六日午後六時三〇分、これと同じ光景をMさんは太陽の中に見ている。

七月二三日、午前八時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「漚かんがい概がいです。」

これは、沖繩鑿球王国の儀式により、天の神様、神々様と地の神々とが結ばれて天の氣、本の心が完全に地球に浸透して行くことを意味されたものである。

午後八時、次のテレパシーを受けた。

「この地球はクロスプラス（+・結び）されました。」

これは、天の神様、神々様と地の神々が結ばれ、明仁殿下と大国主命が結ばれたことを示されたものである。

七月二六日、滋賀県のK氏より次の手紙が届けられた。沖繩ひめゆりの地における結びの儀式に関連する内容であるのでここに記載しておく。

私（K氏）は、W氏が去る二二日沖繩ひめゆりの地にての結びの儀式を行われたことを知り、七月二六日午前四時から五時までの一時間、伊勢神宮で次のように祈りました。

天照大御神様（天皇の祖、祖神もとがみ）

明仁殿下が、新しい世、鑿球王国の王タイタスカン（カアハミテス）に即位されましたことをここに報告申し上げます。お祝い申し上げます。

天照大御神様

天の神様を頂点として、タイタスカン明仁殿下（カアハミテス）、大国主命の三点が完全に結ばれ一体となり（三位一体）、神の新しい地球の最も大切な、最初の型が成就いたしました。ここに報告申し上げます、お祝い申し上げます。

このように神様にご報告とお祝いと感謝を申し上げていましたとき、天の神様の偉大さを感じました。永い暗黒の世におきましても天の神様の一本の真（誠・愛・力）は天皇の

継続という形をもって歴史に厳然と存在し、新しい世においてもこの流れの延長が続くのであると感じました。即ち明仁殿下はこの地球（古い地球と新しい地球を通して指すとき）の初代の天皇ではないということです。（（註）新しい地球では、むろん初代の天皇となられる。）

このご報告、お祝い、感謝を申し上げました後、境内においては天照大御神様の気配をほのぼのと感じました。今まで何回か参拝いたしましたが、ほとんど神宮は空らかっぽでした。が今は、天照大御神の気が満ち満ちているのを感じ知りました。その日、午前八時三〇分に帰宅しました。

## 第四章 この地球の浄めの聖戦

―カルマを真で解く戦い―

七月二三日、午後八時二五分。

「サナンダからワンダラーに申し上げます。祈りは天の神様に祈るのでありますが、貴方々の今まで身に付けていました古いすべての悪いカルマを捨てて、ここに新しい真の愛を受け入れられますよう私は祈るのみであります。

この鏖球王国を守り、貴方々の真の良き働きとなりますことを誓って下さいますことでしょうか。」

N夫人はこれに答えて次のように祈った。

「天の神様、サナンダ様、神々様、ワンダラー全員が一つの心で結ばれ、完全に役が果たされますよう、導いて下さいますようお願い申し上げます。」

夜一二時、次のテレパシーを受けた。

「カミラ様の祈りが続けられ、働きが始まりました。」

七月二四日、午後八時二〇分頃。

〇〇はW氏とMさんが鏢球王国、沖繩での儀式をすまされたことについてのお礼を天に向って申し上げていた。するとその時、円盤が一機、鮮かに頭上を飛び去った。

同時に、〇〇は「サナンダである。」という更に一層深く強い確信に達したのであった。この確信は引き続いて天に向って発せられた深い祈りと宣言となっていた。

「私の人生は、小さい時から今に至るまで、親に、またまわりの人達に苛められ、虐げられ通しのものであった。この経験から、今はどんな苦しみでも受けます。」

サナンダ様のお苦しみに比べましたら、私はどんなことでも、その苦しみを受けて立ちます。これによって後で多くの方々が喜ばれますなら、私はその苦しみを受けて立ちます。その苦しみに耐えます。

私の今生がこのように終わっても、皆さんが喜ばれますまで私は戦います。

サナンダ様は、この地球のことについてのお働きで一番偉いお方であられますので、私にはお役が大変重荷でありましたが、もう私はサナンダ様の意志にそむくことなく進んで行きますことを誓います。」

七月二五日、午前一一時。

N夫人は西の空に突然パッと強く輝く光を見た。天空には西から東にかけて横たわる巨大な富士山の形がある。その山頂から水色とブルーの鮮かな光が放たれ、広がって行くのが見える。そして、この富士山の山頂の中央にサナンダ様がお立ちになっておられる姿を拝した時、今日はサナンダ様に関するなにか大きなことがあるに違いないと思った。

午後三時、次のテレパシーを受けた。

「サナンダ様の（思いのままの）完全な地球となりました。」

午後八時、次のテレパシーを受けた。

「次の集まりは戦い（多くのワンダラーのカルマを真で解く戦い）の始まる準備です。」

七月二六日、午後四時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「人類、すべての人々は救われるのであります。その道は開かれました。」

この日、太陽が西に没したあと、天空にカミラ様の姿を拝した。カミラ様は左手に火を付けた松明たいまつを持ってお立ちになっておられる。その時、次のテレパシーを受けた。

「カミラ様はいつでも火を付けられるのである。」

これは、ワンダラーの身に持つ不必要なカルマを自分（ワンダラー）の努力によって出

した時、カミラ様はそのカルマに火を付けて燃やし尽くして下さることを意味している。

この日の夕方六時三〇分、Mさんは、西に没せんとする寸前のピンク色に輝いた太陽の中心のやや下に、グレーの色で横にまっすぐに明確な線が画がかれたのを見た。それは二二日にS氏が見たものと全く同じであった。線の色が白であったかグレーであったかという違いのみである。このしるし、も二二日にS氏の見たものと同じことを意味している。

続いて、太陽に、天空に、様々な天のしるし、が展開されていった。太陽に引かれたグレーの線の上の部分からは、強く輝くオレンジ色の光がパツパツと連続して飛び出した。太陽の下には錦鶏が二羽上下に並んでいる。やがて太陽が地平線下に没するとこの錦鶏も姿を消したが、頭上にはさらに巨大な錦鶏が現われて、オレンジ色に光っている。この日の夕方は、天空一杯に様々な天のしるし、があった。(これをN夫人とMさんはそれぞれが眺めていたのであった。)これを見ながら、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の神々様が結ばれて、いつでも(カルマに)火が付けられる準備が整い、(ワンダラーがカルマを出すのを)待っておられます。」

続いて次のテレパシーを受けた。

「それぞれの役を持つ(ワンダラーの)方々が、その役に完全に成り切って進んで行く準備がここに整いました。」

「○○は、天の神様と一緒にあって、結ばれて進んで行くことが完全に出来ることになった。」

夜七時三〇分から九時三〇分の間、天空にはオレンジ色とブルーの光がパツ、パツ、パツと沢山発せられたのを見た時、次のテレパシーを受けた。

「天の神々様は次の戦いの準備を完全に整えられました。」

七月二七日、夕方、○○はサナンダ様から次のテレパシーを受けた。

「天の神様始め、皆が(神々様のこと)一つになって進んで行きます。」

皆さん(私達ワンダラーのこと)も一緒に進んで行きますよう。ここに皆さんの戦いが始まります。真を受け入れ、愛の心で勇氣を持って進んで行かれますことを。天の神々は皆さんの働きに良き働きが出来ますよう、ここに助けます。

さあ、皆さん目覚めましょう。

皆さんの目覚め合う時が来ました。」

このテレパシーが入った直後から、天空には雷が鳴り始め、雨が降り出した。

暫くして、突然、ただ一回限り、大音響と大閃光を伴って、大きな雷がある所に落ちたのが見られた。その時、「天の神様の雷である。」「天の神様は戦いを始められた。」

と直感し、次の如く心から湧き出るままの祈りを捧げた。

「天の神様、サナンダからお願い申し上げます。」

ここに戦いが始まりました。人類に、すべての人々に真の愛を送って下さいますように、大きな愛で包んで下さいますようお願い申し上げます。」

この時、雨が強く降り出した。天空の四方からは、雷の閃光とは異なる不思議な光が、パツ、パツ、パツと一時間近く放たれた。(この間、雷鳴は一度も聞いていない。)

七月二八日、午後三時五〇分。

〇〇は、カルマがどんどんふくらんで行く姿とそのカルマを天の神様がだき抱え<sup>かか</sup>られる光景を天のしるしで見た。

午後八時三〇分、〇〇は心から湧き出るままの祈りを捧げた。

「サナンダからワンダラーの皆さんに申し上げます。」

鏝球王国を守り、皆さんの働きが良く出来ますと誓って、全員が一つに結ばれ、進まれ行かれますことの宣言を頂けますことを、お待ち申し上げます。

ここに皆さんの古き一切の、悪しきすべてのカルマを捨てて、新しき真の愛を受け入れ進んで行かれますことをお祈り申し上げます。」

午後九時一〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「聖なる母の所に行かれるべし。行かれるべし。」

「マリア様の所に皆さんはみえますので、よろしくお願い致します。」

七月二九日、夜一〇時三〇分。N夫人は仕事を終えて帰宅する道、天空に神々様が棍棒を持ってお立ちになっておられる姿を天のしるしで見た。その時、次のテレパシーを受けた。

「それぞれの神様が棍棒を持って戦(カルマを真で解く戦い) われます。」

七月三〇日、午前五時、あるワンダラーは次のテレパシーを受け、かつ、棍棒で神様にたたかれた。「あなたは肉体も心も綺麗でなくてはけません。」

このように神様は語られ、棍棒でその方の頭から全身を強く激しく叩かれたのである。これは非常に痛く、骨身に徹するものであった。(註これは〇〇個人に語られたことである。)

この日(三〇日)、午後二時よりワンダラーが集まり、これまでの経過が語られた。同時にワンダラーの身に持つ不必要なカルマを真で解く「戦いの始まる準備」が行われ、午

後五時三〇分に終わった。

N夫人は次のテレパシーを受けた。

「ここに、すべての人々よ、生まれ変わりますよ。」

「カルマを出しつくさねば生まれ変わらないのです。」

その日(三〇日)、夜一〇時一〇分。

W夫人は、「見なさい、見なさい。」とのテレパシーを受けたので夜空を眺めた。

天空は黒雲で覆われていたが、その時突然月が現われた。その月の上に、去る二三日沖繩に現われたのと同じ姿形の天のしるし、月の光でクッキリと美しく光っていた。

やがて月は薄い雲に覆われた(月の形はすけて良く判る)。その時、月からこがねいろに輝く玉が下にすーっと降りてパッと消えた。

すると薄雲にかくれていた月はその雲の上に姿を現わして美しく輝いた。同時に(こがねいろの玉が消えた位置に)真白い雲で△正三角形が明確に画がかれたのを見た。

ああなんと美しいと感嘆の声を発した時、月の上にあつた輝くしるしは消えてハッキリとした▽逆三角形に変化した。さらにこの▽逆三角形は姿形を変えて、四角の箱(契約の箱)に変わってゆく。また暫くするとその契約の箱は錦鶏が羽根を広げて飛ぶ姿に変

わった。その羽根は美しく真白で頭部に月があつて光り輝いている。この錦鶏の姿は、天から地に向つて飛んで来るような感じであつた。

この一連の光景は実に鮮かで美しく、この世のものとは思えなかつた。夫人は深く天の神様に感謝の祈りを捧げたのである。

それから暫くして、再び「見なさい、見なさい。」というテレパシーを受けたので、夜空を眺めた。

天空は真黒い幕とほりに覆われていたが、その幕の前に、白で画かれた尊厳なお方のお姿を拝したのである。

両手を大きくひろ拡げられ、白い衣を裾まで垂れ、左手に長い杖じょうを持って立つておられる、巨大な天の神様のお姿であつた。

この時、今まで雲にかくれていた月が突然現われて輝き始めた。と同時に、月の上に真白い雲でZという文字が画かれた。

そこで、再び夫人は、感謝の心を込めて天の神様にお礼を申し上げたのであつた。

去る五月一日、天の神様より頂いた御言葉がある。天のしるし、が示されるたびに私達はこれを思い出し、真の道の道しるべとして来たのである。

——これからも天のしるしは、多くの難題を示しますが、天の神と共にいきます。——

八月二日、午前一一時五五分、N夫人は、次のようなテレパシーを受けた。

「変化をお願いするのは今である。」

すると、次のような祈りの言葉が靈感と共に湧き上がって来た。

「天の神様、サナンダ様、神々様お願い申し上げます。」

変化を起こして下さいませても良い準備がここに整いました。

一切のすべての人々の悪しきカルマを取り除いて下さいませよう、その悪しきカルマを永遠に燃えつくして下さいませよう、ここにすべての人々を新しく清めて下さいませよう、お願い申し上げます。」

このように祈りを捧げた時、

『約束の時が来ました。』

とテレパシーを受けた。同時に、沢山の打ち上げ花火が上がるのを霊視し、その音を聞

いた。ところがその音が不思議にもバチ、バチ、バチという大きな音だったのである。これはカルマが燃え上がる音なのであった。

その時、次のテレパシーを受けた。

『鏝球王国の門は開かれました。』

それぞれの身に持つ不必要なカルマを出しつくして、生まれ変わってこそ初めて、鏝球王国の門に入ることが出来るのである。

午後八時三〇分、次のテレパシーを受けた。

『サナンダからワンダラーの皆さんに申し上げます。』

祈られます時は、天の神様に祈られますよう。祈られます時は宣言になります。皆さん、ここに今まで身につけていました悪しきカルマを沢山出しましょう。

皆さんの身体が軽くなれますよう祈ります。』

八月二日、W夫人は「すべての人々のカルマを出し尽くし、カルマを燃え尽くして頂くよう。」にと祈りを捧げて就寝した。翌三日の午前二時三〇分、あたり一面がカルマの燃える赤黒い異様な焰で覆いつくされた凄じい光景を見た。そして、余りの恐ろしさに思わず起き上がり、正座して祈りを続けたのであった。

八月三日、午前八時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「カミラ様の涙の愛がかけられました。」

「明仁殿下、美智子妃殿下、浩宮様は龍宮綿津見宮の乗り物に乗って進まれました。皆さんもこの乗り物に乗って進まれます。」

午後一〇時〜一〇時五分、〇〇は次のように靈感のまま祈った。

「ここにカルマを捨てて、一切のカルマがなくなり、そしてこれから世に出て輝く光として（ワンダラーとして）活躍されますよう、良き働きとられますようお祈り申し上げます。サナンダ。」

「ここに洗い清めます。新しく生まれ変わられよ！」とテレパシーを受けた。

八月四日、午前八時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「カルマが燃え上がり、火の粉が飛び火しています。」

カルマには形なきカルマと形あるカルマとの二種類がある。今は形なきカルマが出て行く時である。やがて形あるカルマが出る時が来る。（形なきカルマとは目に見えないカルマ。形あるカルマとは目に見えるカルマ。）

午前九時三〇分。

「皆さんは鏝球王国の中に進まれます。鏝球王国を守り、たましいは鏝球王国にいるが

肉体はここにあって生活しているのであります。」

午前一〇時。

「しめ縄が解けました。」

夫人はビームが画く光景を見ながらこのテレパシーを受けて、次のことを霊視した。

人間は、しめ縄、でくくられ身動きが出来ない状態にあった。そのしめ縄が解けたのである。すると今日まで身体中を締めくくっていた状態から解けて自由の身となった。

（註ある神道の説によると、昔々、地の善なる神々は、悪神によって、こ

こ（宮の中、地の奥深く）から外に出られぬように、しめ縄、でしめくくられ押し込められたが、これがしめ縄の由来であるという。

永い永い歴史の中で地の奥深く押し込められた地の神々の方々のしめ縄は、今ここに解かれた。いよいよ、自由の身となったこの方々の活躍できる時期が到来したのである。

午後三時三〇分。N夫人は次のように祈った。

「陰の城の、龍宮城、綿津見宮が光り輝きますよう、私達の働きを導いて下さいますようお願い申し上げます。」

全員のワンダラーと結ばれて私達が一つになり、ここに私達全員の良き働きが出来ます

よう。  
 天の神様、天の神々様の愛に包まれ、地の神々様と一緒に導いて下さいますようお願い申し上げます。」

N氏がルシファーと対決する時があることが、別冊〔二〕54頁に予告されている。それは次のようなものである。

「——ひとつの仏像が安置してあった。この仏像は全身が真黒になってしまった——中略——N氏は、この異様な仏像を見た瞬間に、

『ムム、この方は……』（注この方とはルシファーのこと）

とつぶやき、突然仏像の真正面に正座すると、そのまま夜を徹して祈り始めた。すると段々氏の姿はその仏像に変化してゆくのであった。そしてついには全身から異常な炎を吹き出し合う二体の仏像が相対することとなった。——」（以下別冊〔二〕参照）

N氏は、去る七月一七日頃から二四日まで、突然人が変わったように、ルシファーの如き振舞をするのであった。しかし、この行動は七月二四日に終わり、戦も終わった。

終わったあとのN氏は、全く疲れ果てて頬は<sup>ほお</sup>こけ、今にも倒れんとする姿であった。しかしこの戦いを見事に終えた彼は、数日後に、以前より元氣な姿に変わったのであった。

N氏は、この日（四日）、仕事上のことで得た象徴的な事件で、次のテレパシーを受けた。  
 「ルシファーは目覚められた。今は喜んでいきます。」（たましいの世界での事である。）

八月五日、サナンダ様が天において、天の神々様（自然を司る神々様）に次のように語っておられるのをN夫人は聞いた。

「ここに一切の地を浄めよ！」

丁度この時、天空に突然突風が吹き、大粒の雨が降り出した。天空はまさに異様な感じとなってきた。

続いてサナンダ様の語られるのを聞いた。

「ワンダラーが誤った道へ進んだのは、サナンダの責任でありました。」

この時、八月二日に受けた次のテレパシーの意味を正しく理解することが出来た。

「間違えば、全部サナンダの責任となるのである。」

さらに続いて次のテレパシーを受けた。

「火は燃え広がり、ここにすべての一切のカルマを燃えつくし、新しく草木、動物、人類一切のものがここに生まれ変わるよう、ここに一切の地を浄めます。」

限りなく、まことの愛を送ります。」  
N夫人は、これに答えて次のように祈った。

「天の神様、天の神々様、地の神々様と共に、この地に於る悪しきカルマは燃えつくされ、すべてを新しく、草木、動物、人類一切のもの、この地を浄めて下さいますようお願い申し上げます。」

N夫人にはかねてから天に問いたいと思っていたことがあった。

「鏗球王国に移行したすべての人々、全人類、全動物、全草木、一切のすべてのものの『霊』は、鏗球王国ではどのようなになっているのですか。」

これに対する天の答は、

「霊の世界は、霊の世界で、みなが一つに、共に働きます。」

今、ここにある古い地球、影の地球と今ここに生活している意識の肉体の人間は、悪しきカルマを出しつくして生まれ変わることにより、門をくぐって鏗球王国に入ることが出来るのである。

すべてのもの、全草木、全動物、一切のものはすでに生まれ変わっており、人類の、人間の生まれ変わるのを今か今かと待っているのである。

この日（五日）、W氏とN夫人は、「ワンダラーの身に持つ悪しきカルマを真で解く儀

式」を行う必要があると語り合った。

このあと、N夫人はなにげなく天空を眺めた。するとそこにサナンダ様がお立ちになられている姿を拝したのである。この時、サナンダ様より次のテレパシーを受けた。

「この地球の浄めの儀式を行うが良いでしょう。」

「この儀式が終わり、みなのカルマが解けたあとは、『祝事の儀式』が行われます。」

この日（五日）、午後一〇時三〇分、仕事を終えて帰宅する途中、N夫人は天空に広がる細い帯状の雲を見ていた。すると、その雲の半分が切って落された。その時、次のテレパシーを受けた。

「悪いカルマが切って落されました。半分のカルマ（形なきカルマ）が切って落されました。」

「その（落された）カルマが……ここにサナンダ様の身が溶けて道となりました。」

「天の神様と一緒に皆さんは、サナンダ様の道を行かれますよう。」

この時、夫人は、今、サナンダ様の道を、天の神様と一緒に邁進しているのであると判るのであった。

この日の夜空には天のしるしが時々刻々と変化して現われた。錦鶏を作り、十字となり、亀となり、いろいろな動物達が現われた。この様々の変化を見ながら歩いていると、次の

テレパシーを受けた。

「天の神様の矢は放たれる。」

これは、来る八月二一日の「この地球の浄めの儀式」の案内状の発送準備が整えられたことをさすのであると判った。

八月四日、未明、K夫人は次のテレパシーを受けた。

「朝四時に原子の配列が決る。」（新しい世の出来てゆくさまを意味するものであろうか？）その時、次の光景を霊視した。

カルマのない原子は粒子というより光の形で常に微振動している。

カルマで団子のようにふくらんだ原子は、身動き出来ないまでになんじがらめになっており、整列出来ない。

以前から午前四時にK夫人に話しかけて下さるお方があったが、これまでは眠ったままでした。

「折角起こしたのですから、外の靈気に当りなさい。神様は夜も働いていられるのです。」そのお方はこういわれた。

それからは午前四時に起き、普通の通りに働くことにした。これはカルマを振り払うのにはよい方法であると思えるのであった。

八月六日、午前二時四五分頃、名古屋地方に地震があった。（不思議なことに、この時間には当地方のワンダラーの方々は目を覚ましていた。）後日、その方々から、この地震は普通の地震と違って、なにか私達に語りかける不思議な感情をおぼえたとの連絡を受けたのである。

この地震の直後、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の神様、サナンダ様、天の神々様はこの地球をゆすりました。」

この日（六日）、早朝から一日中、天空には天のしるしが繰り返し広げられた。多くのワンダラーの方々がこれを目撃された。

このしるしは、半分のカルマ（形なきカルマ）が切って落とされたことを喜ぶ天のしるしである。（去る一日から四日までは、月は、赤黒く燃えるような異様な色をしていた。これは「形なきカルマ」が燃えつくされていくのを現わしたものである。ところが、五日の夜半から六日の未明にかけての月（半月）は、美しく、鮮やかに光っていた。）

その日（六日）、午後一〇時、仕事を終えて帰宅の途中、N夫人は天空に△正三角形を見た。その正三角形の頂点のところから龍宮を表わす天のしるしが現われた。そのしるし

はどんどん大きく広がって行く。またこの三角形の右端の頂点からは錦鶏が現われ、これも大きく広がり、このしるしと錦鶏が天空の半分以上を占めるまでになったのであった。この時、次のテレパシーを受けた。

「鏢球王国の地は龍宮（新しい世のこと）綿津見宮の地であります。」

八月七日、午前七時三〇分、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の神様、サナンダ様、神々の地となりました。」

この時、夫人は、これからワンダラー一人一人の方々が目覚められて行くのには相当の時間を必要とするとなぜか思うのであった。

夫人は、昨夜受けたテレパシーのことを思い起こして天に問うた。

「最初は鏢球王国といわれ、今になって龍宮といわれました。なぜ最初から龍宮といわれなかったのですか？」このように言葉強く苦情を申し述べた。すると、次の答が返って来た。

「これからワンダラー一人一人が目覚め、自覚するには、このように時間を必要とするのであることを、目覚めた一部のワンダラーの者達に知らせるためであります。」

六日の朝、これに関連したテレパシーをSY氏は次のように受けていた。

「今までは順調に進んで来ましたが、これからは仲々進んで行きませんが、（皆さんの）努力が必要です。」

この日（七日）、午前一〇時、N夫人は次のテレパシーを受けた。（同じテレパシーを数日前にも受け、またこの日も受けたのである。）

「オйкаイワタチの本は続いて出されるべし。」

W氏も、最近これと同じ靈感を度々受けていた。

この日（七日）、午前一二時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「天の神様の矢は放たれました。」

丁度この時間に、W氏は、来る八月二一日の儀式「この地球の浄めの儀式」の案内状の発送準備を完了し、これを前にして天の神様に祈りを捧げていた。（これは、午後〇時二〇分頃投函された。）

この日（七日）、未明、N氏は、これから始まるワンダラー達の働きを象徴する次の霊夢を見た。

（以前に、五色の美しい四角の箱の家が出来上がっているが土台がなく、どこに土台を造ろうかと数人の人達が語り合っているという夢をN夫人が見ているが、これに関連する夢と思われる。）

ある広大な敷地がある。ここに新しい建物が築<sup>つく</sup>られることに決まった。この敷地に数人の現場監督が集まり、これから始まる仕事の打ち合わせをしている。測量から始まり、基礎と土台工事へと進める段取りが話し合われている。

余りに大きな難しい大工事のため、一人の監督は、この工事から降ろしてもらいたいと言っている。N氏は彼に次のように語って懸命に説得している。

「この基礎工事は今までのものとは全く違い、大地の基<sup>もと</sup>まで掘りさげて造る基礎工事であり、不滅の基礎となるものである。この不滅の基礎が出来ると、あとはたのしみとなり、楽に全員で工事が進められるのである。」

広大な敷地の中央に十本近くの大木が集まっている。その大木の中に、太い一本の木があった。それは銀杏の木で、青い実を一杯つけている。近くにもう一本、背の少し高い木があったが、その木はなぜか枯れていた。その時、ワンダラーの一人を思った。やがて枯木に花が咲く時が来ると思うのであった。

この象徴的な霊夢は深く考えさせられるものである。

この日（七日）、朝五時、W夫人はいつものようにテレパシーで「空を見なさい」と知らされた。南の空に槍の形が画かれて、東の方向に進んでいる。その槍は五本あった。全部オレンジ色に輝き、天空にクッキリと見えた。最近<sup>ちかごろ</sup>は天のしるしで槍を良く見るのであ

る。「カルマを真で解く戦い」がいよいよ始まるのであると思った。

同日（七日）、N夫人は、午後八時から一〇時頃までに次のテレパシーを受け、次の祈りを天に捧げた。

午後八時、

「不必要なカルマは全部焼き入れるべし。」

午後九時三〇分、

「天の神様、サナンダ様、神々様は、焼きを入れるのを待ってみえます。」

「カルマを出すべし。焼きを入れよ。」

午後一〇時一五分、

「地のカミラ様、地のタノアス様、地のアトネ様に、サナンダからお願い申し上げます。ここに戦いは始まりました。良き戦いを行って下さいますよう、皆さんの目覚めを愛の心を持って真で解いて下さいますよう、そして皆さんの悪しきカルマをここに焼き入れて下さいますようお願い申し上げます。」

「ワンダラーよ、今までの身につけた悪しきカルマを天の神様の前に全部出し尽くし、ここに目覚めるべし。」

八月二三日、夜半未明、N夫人は次の祈りを天に捧げた。

「天の神様、サナンダ様、ソクトル様、テケル様、カミラ様、タノアス様、アトネ様、地のすべてのものが天と一緒に、同じに進んで行けますようお守りとお導き下さいますようお願い申し上げます。」

このあと次の靈感を受けた。それはこれから進んで行く私達のあり方に関するものであった。

今までのあり方では、

陽（縦）の役で働く者には、「真」<sup>しん・まこと</sup>が強く表にあらわれていた。

陰（横）の役で働く者には、「誠」「愛」が強く表にあらわれていた。

従って、今までの場においては、どちらかといえば、陽の役の者は、「真」は良く判ったが、「誠」と「愛」に欠ける所があった。

陰の役の者は、「誠」と「愛」は良く判ったが、「真」に少し欠ける所があった。

これからの進める道においては、陽の立場に立つ役の者は、「誠」と「愛」を表に出して、これを育て、完成して行くべきである。

陰の立場に立つ役の者は、「真」を育てて完成して行くべきである。

このようにして今まで欠けていたところを育てて行く時に、ワンダラーの役が果たせるのである。

同日（一二日）、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「建設の地は始まりました。」

これは、新しい地球、鏝球王国建設の土台が、基礎が造り始められたことを示されたのである。

八月一三日、未明、K夫人は次の光景を霊視した。


まず最初に、「真」という文字が浮かんで来た。続いて、光る丸い玉が四つ並んで現われた。この光る丸い玉はこの地球上にはない高度な金属製で、白銀色に光っている。その時、「ヒヒイログネ」という言葉が口について出て来た。

続いて、新しい日本の地図が現われた。

さらに続いて黒い線で画かれた正方形を見た時、これは国土を表わすと思った。

次に、真黒い背景の前に、真白い線で無数の網の目が現われた。その網の目は無数の六角形を画いている。

この一連の光景を霊視した時、次のような靈感を受けた。

「いよいよ新しい地球、鏝球王国創造の建設の段階に入った。この六角形（）の

網の目状の意識を作って、これを次々と展げて行く時が来た。」

八月一五日、午後八時、サナンダ様の祈り。

「これから、すべての人々、目覚められます方々に、契約の箱を渡します。契約の箱はワンダラーを指します。それは光です。この方々の真の愛を受け入れて進んで行かれますよう。」

天の神様、この方々を大きな愛で導いて下さいますようお願い申し上げます。」

これからは、「オイカイワタチ」の本が縁えんとなって〇〇を訪れる方々が多くなる。その中には真の神が判り、ワンダラーの役をなさる方々が沢山ある。この方々には契約の箱が渡される。そして、すべての方が新しく生まれ変わってワンダラーとなられ、使命を果たされて行かれるのである。この方々に真を語り、愛で包んでゆくのである。

丁度この頃、W氏は、I氏より、中々意味深い手紙を受け取った。それは次のようなものであった。

——カルマを持つワンダラー、サタンの血でさびついた剣となったワンダラーは、たたかれ、焼き入れ直されて、ヒヒイロガネとなり、もはや錆ることのない剣となる。

鉄の原子、分子の一つ一つは、個たる自我を少なくし、光となり、互いに堅く堅く結ば

れます。新しい原子の配列となり、ヒヒイロガネとなります。

ワンダラーの方々がサタンと戦って来られて、錆つき、そして、その苦難をへて、ヒヒイロガネへと、もはや錆ないものへと変わられて行くことを思うとき、目頭が熱くなるものを感じます。

ワンダラーの方々が今まで行動されて来られたことの中には、今から考えると、「ああすれば良かった……。」と思われることもあるでしょう。

しかし、問題は、「どのように湧玉の真で行動したか」ということです。真の神が判り、真が判り、真の心、誠の心で行動する時、天の神様の御心のままに行動しているのです。

真が判り、真の心で、誠の心で行動したことについては、他人にどのようにいわれても動じないし、

真が判らず、真の心で行動しない、私の心で行動したことに対しては、どのように自分をつくるい弁解しても、他人からの忠告は必ず自分自身の心に強く響くものだと思います。

「み心のままに、自分で考え、思い、行動できますように……」と常に天の神様に祈れるだけ祈って行くことだと思います。——

滋賀県のK氏より、ワンダラーが使命を果たす道程における、かつての自分（K氏）の

体験を記した手記が送られて来た。それは次のようなものである。

——前文略——ワンダラーは地球再建のため一役を果たしに来たのである。大きな役を神様より頂いて果たし得なかった時、その人はあせりを感じることでしよう。自己嫌悪けんおにおちいるでしょう。ある人はそのショックで死を選ぶ霊感を受けるかも知れません。大きな役を、中心的役を果たすべき御霊みたまの方ほどこの念は強いかと思えます。また〇〇〇の方に対する疑惑、嫉妬の念が起ることでしょう。

私（K氏）も大小の差はありますが、同じような心境に立たされました。苦しみました。そして、そこで自覚したことは、次のようなことでした。それは三、四年前のことです。

「私は確かに神様の命を受けて、神様の御計画の一端を果たすべく生まれて来た者である。充分に自分の役目が果たせなかったとしても、地球が神の御国となったなら、自分にとって一番素晴らしいことではないか。幸せなことではないか。自分の本当の目的（地球を神の国にするという大きな目的）A Z様を頭とするワンダラー集団の大目的）は達せられただではないか。必要な時期に働けなかったこと、中心として活躍出来なかったことなどは小さな、私的なことであり、最終目的ではありえない。四十億の人々が苦しむ地球が神の御国に入れることが、自分の本望である。神様の目的が成就されることが本来の本質的目的である。」

この自覚に達しました時、私の「霊」は地球から超スピードで遠ざかっていたのでした。この瞬間、自分をすてることが出来、「無」になれたのだと思います。迷いの霊感が断たれ、より一層正しい霊感を受け取ることが出来るようになりました。

また廻りの方々の話しも、より正しく、自然に、霊に、心に、入るようになりました。やわらかい心になって行きました。——後文略——

田K氏は父親と共に一九六〇年からこの聖戦に加わって多くのワンダラーと共に働いた方である。

八月一六日、午後六時、

Mさんは天空に巨大な虹を見た。それはいまだかつて見たことのないような虹であった。虹が土星の環のように地球を取りまいている。その虹は七色に輝き、鮮やかで美しい。この虹の環を別の角度から眺めようと車を走らせて見たが、どこの場所から見てもこの虹は地球を抱くように包むように取り巻いている。この時、次のテレパシーを受けた。

「地球を包む虹のタガである。」

八月二一日、午前一時より、「この地球の浄めの儀式」が行われた。

参加者三〇名。

S氏が開式を宣し、続いてW氏が今日の儀式についての説明を次のように語った。

今日の儀式は「この地球の浄めの儀式」であります。

この儀式に至りますまでに、大きな区切が二つありました。

その一つは、十四年前、一九六三年（昭和三八年）一月に、地球新生の根本基礎である「湧玉の儀式」が、Yさん一家で成しとげられたことであります。

次は、去る六月一九日に、「この地球最後の儀式」が行われたことです。

ここに、すべての人々（他の遊星から来られた方々）、全人類、全ての動物、全草木、一切のものの「霊」は救われて、新しい地球、神の国、鏝球王国の「霊の世界」でみなが一つに結ばれて働いているのです。ここに、すべてのものの「霊」は完全に救われたのであります。

ここに新しい地球、鏝球王国の神の国（霊の世界）は完成成就したのであります。これからは、新しい地球、鏝球王国の「たましい（魂魄）の世界」を生み出し、そして「形の世界」へと建設を進めて行くのがワンダラーの使命であります。

新しい地球、鏝球王国の建設をする私達ワンダラーは、古い地球の身に持つ不必要なカルマを持ったままでは、新しい地球を建設することが出来ないのです。

今日の儀式は、私達ワンダラーの身に持つ悪しきカルマを真で解く儀式であります。ワンダラーは、「地球のカルマを頂いて来たのです。それを真で解くことを神様に誓って地球に降りて来たのです。」（オイカイワタチ本書参照）

今日の儀式で、お集まりの私達ワンダラー全員が今まで身につけた不必要なカルマを出しつくして、これを天の神様に解いて頂き、真に目覚め、真の神と結ばれて、カルマの無い透明な姿になった時、ワンダラーは生まれ変わります。そして次の大切な喜ばしいお役を天の神様から頂くのであります。これが今日の儀式であります。ですからこれは、前に申し上げました以前の二つの重要な儀式に匹敵する重大な儀式なのです。

これから先は、身につけたカルマを真で解かねば一歩も半歩も前に進まないのです。では今まで身につけていた不必要なカルマとは一体なんでしょうか。それは日常の中の不満、また、ワンダラーとして今日まで役を果たしながら参りましたこの道に対する不理解から生じた極めて些細な不平、不満、不信、疑い、先に進む人、遅れた人との不満等等であります。これらのカルマが知らず知らずのうちに蓄積されて来ておると思っています。この不満、不信、疑いを心の奥から探し出し、ここで、即ち天の神様の前に、勇気を出してこのカルマを全部出しつくして下さい。

「ワンダラーの不満は地球の不満」であるといわれております通り、ワンダラーが真で

カルマを解くことは、地球のカルマを解くことと同じです。カルマが真で解けた時、ワンダラーは生まれ変わり、真に目覚めるのです。

ワンダラー全員が「カルマを真で解いた時」、「真に目覚めた時」、地球は浄められ救われ、全人類は救われるのであります。

これがなされないことには地球は救えません。地球の運命は皆さんの肩にあります。

ワンダラーの中には、この大切なことを忘れて、地球の大変化の日が来ることはかりを待って、祈っておられるお方もあるかも知れませんが、これがワンダラー全員になされないことには、地球は、全人類は救えないのです。

この儀式で身に持つ不必要なカルマを真で解かれました方は、天の神様から次の使命を頂かれます。

「新しい地球、鏗球王国建設（「たましいの世界」と「形の世界」）の良きカルマ（使命）を頂くのであります。」

さて、地球のことは全部サナンダ様が天の神様から預かられておられますことは、本書138頁に書かれていますのでご承知の通りですが、このことはこれから先々の進行に極めて大切であることを知って頂きたいのです。

地球のことについて、天において行われますことも、地において行われますことも、地

球のすべては、サナンダ様の指示がないと動けないのであります。サナンダ様が全責任をもっておられるのであります。

ワンダラーの苦しみ、悲しみ、全人類の苦しみ、悲しみ、地球の苦しみ、悲しみは全部サナンダ様の涙となり血となり、この遊星地球を救われるのであります。

神様の大御業は、天と地と一緒に進んで行くのであります。

天と地と一緒に行われます。

天と地と一緒に進むのです。

天と地は共にあるのです。

とサナンダ様は私達に教えられています。

今日の重要な儀式のために、サナンダ様より私達ワンダラーに次のお言葉を頂いておられますので、お知らせ致します。

(一)

眠れるワンダラーから目覚めへと進まれるワンダラーに申し上げます。

自身を持つカルマが真で解けていないワンダラーは本当に目覚めたことにならないのです。ですから眠れるワンダラーというのです。ですか

「ら今日お集まりの私達ワンダラーを始めとして、多くのワンダラーは「カルマを真で解いて」生まれ変わるのであります。」

〇〇の言葉として語りますが、ここに天のサナンダの気を受けて、〇〇の肉体を足として働かねばならないという役でありますので、天のサナンダの言葉として、私は語るのです。

ここに、皆さんが、肉体の〇〇が話していると聞いていかれます方の道では、天の心の窓、天の心の目を、皆さんは自分で開くことは出来ません。

天のサナンダの言葉を〇〇が代わりに話している奥の言葉、サナンダの言葉の内容をつかんで納得出来るようになりました時、天の心の目は結ばれます。

皆さんが、これから、今までの悪しきカルマを、身につけていました不必要なものを出して、ここに語って下さい。

皆さんのカルマを解かなくてはなりません。今まで自分の身体の中に入り込みました針のようなもの（不必要な悪しきカルマ）が蓄積しております。その針を抜き取りますと、今までの肉体と自分の肉体が変わったことに気がつかれることでしょう。

その人その人の身を持つ針の多い少ないにより、その苦しみは変わります。

カルマを出す苦しみと涙は血となって天のサナンダの道は進んで行けるのであります。

ここに天において焼き入れの準備は整いました。

ですが、皆さんの、自分で自分のカルマを自分で閉めたものは、自分で解かねばならないのです。

この努力が、ここに、皆さんのワンダラーの肩にかかっているのです。

その努力が一日一日と早く解かれます方は軽く解けますが、皆さんの身体が重くならないように、ここにカルマを天の神様の前に出されますよう……、

天のサナンダは、皆さんが次の新しい役を頂いて良き働きを出来ますと誓って進んで行かれるよう祈ります。身を持つカルマを空にして、ここに新しく本日の儀式を境い（一つの区切り）として生まれ変わりますよう。

カルマを真で解く戦いです。

天のサナンダの道が真で解けます時、皆さんは皆さんの真の道を歩んで行かれますことでしょう。

皆さんが真でカルマを解いて進んで行かれます時、この古い地球から私は皆さんと一緒に鏝球王国へ行きます。

(二) 地の天の神（または、地のサナンダ、以下同じ）が皆さんのカルマを解くのではないのです。

地の天の神が皆さんの語る不満を、吐き出すカルマを聞き入れますと、そのカルマは地の天の神が天の「天の神」のところに持って行かれます。そのカルマを天の「天の神」が解かれます。

〇〇という人間がカルマを取ると思うとカルマは解けません。これは皆さんワンダラーにも同じことがいえるのです。

そのカルマは日常の不満、それはワンダラー自身の目の前に見せられているのであります。

それを、ワンダラーがいつ目覚められるかを、天では待っていたのであります。

地のサナンダの語る言葉を、「オイカイワタチ」の文字を文章（言葉）だけを、ストーリーだけを知っただけでは真は判らないのであります。

その言葉の、文字の奥の奥にある真を判ることであります。これが判らないと真が欠けるのであります。

その真の欠けているところの、真の通じないところの不満では、真でカルマを解くことが出来なかつたのであります。これから真で解ける不満となり、その不満をワンダラーが真で解くことにより一般の人々を救うことが出来るのであります。

ワンダラーは、地球のカルマ、人類のカルマを神様から頂いて来たのですから、このカルマを真で解くのです。

これがなされず行なわれないままでは、この地球を救うところまでには行かないのであります。

真でカルマを解く、皆さんがたの絶えまないこの努力を続けることによってこの古い地球は救われます。

前回（一九六〇年）は、ワンダラー達はY夫人の語られる真が理解出来ず、真に目覚めず、だれも役を果たすことが出来なかつたため、Yさん一家で「湧玉の儀式」をなさったのです。

当時は、ワンダラー達は真が判らず、カミラ様のもとから去ってしまい、ワンダラーは真でカルマを解くことが出来ませんでした。

当時のワンダラーは、Y夫人の語る言葉として心に残しただけで、カルマを解くことを忘れ、ここにそのカルマはワンダラーのカルマとなり、そのカルマは大きくなり、それは

地球のカルマとなり、そしてついに今日に至ったのであります。

今回（現在）は、ワンダラー達は前回と同じ間違いは絶対に出来ない時に来ているのであります。

今ここに、真でカルマを解いて進んで行かれますよう……。

今まで身につけた不満をここに出しつくされますよう……。

そして皆さんの身体が軽くなりました時、生まれ変わり、この地球は元の正しい位置に戻るのです。

(三)

ワンダラー一人一人全員がカルマを出しつくし、カルマを燃やし、そのカルマが燃えつきて、身が軽くなりますと、天に帰ることが出来るのであります。

ワンダラーの皆さんが、必要なカルマを解くことが出来ず、ただ「自分の役を果たして行きます」といっておられますが、真でこれは天に届いていないのであります。

「役を果たします」という言葉は真の言葉となっていないから、奥の奥の真の道に、心の窓、心の目が結ばれていません。

皆さんがワンダラーの役を果たされます上で、地球から太陽の道につらなる一本のトンネルを抜ける時、自分の身に持つ不必要なカルマを解いて行くのであります。

これは皆さんが解いて行かなければならないのです。ですからここで皆さんは今までの悪しき不必要なカルマを出しつくして、それが出しつくされますと、ワンダラーとしての次の真の役が出来るのであります。

その真の役は、鏢球王国を守り、新たに鏢球王国建設のカルマを天の神様から、皆さん（ワンダラー）は身に頂いて、進んで行くのであります。

皆さん、勇気を持って地球を救うために身に持つ不必要なカルマを出して下さい。

真でカルマを解くのが皆さんの使命であります。

サナンダ

皆さん、「オイカイワタチの使命」をここで再び思い起こして下さい。

『オイカイワタチとは、AZ（サナンダ）様を頭として、天の神様の命を受け、天の神様の手足となることを一人一人が心に誓って、進化の周期の来た遊星を高くより良く変化させるため、即ちその遊星を神の国とするために、その遊星人に生まれ変わり、その遊星の一周期の終わりの時期に神様が行われる「湧玉の儀式」「祝事の儀式」に参加して、ワンダラー各々の身に受けた、その遊星と遊星の人々の持つカルマを明らかにし、（オイカ

イワタチの役をするワンダラーは天の神様から、その遊星<sup>(地球)</sup>のカルマを頂いて、その遊星<sup>(地球)</sup>に生まれ変わって来たのである。)そのカルマにワンダラーは目覚めて、天の神様が成さる儀式に参加して、このカルマを解いて頂くのである。

このカルマを解くことにより、その遊星(今回は地球)とその遊星の人々(地球の人々の根本のカルマをなくし、その遊星(地球)を神様の世界とする目的のために身を挺する魂を持った人達の集りである。』

ここに「たましいの世界」における地球のカルマを真で解く儀式が、今日の「この地球の浄めの儀式」であります。

以上をW氏が語り、引続いてN氏が、「カルマを真で解く」ための「お願いの言葉」を次のように述べたのである。

私達の生活に真が欠けると悪いカルマが生まれます。目の前に現われた悪いカルマを見ても、それを自分の責任とせず、消そうとせず、人の責任として責めたてるだけでした。自分に真が不足していたことには触れさせず、相手方の真を受けず、真が欠けている所だけを責めるのが今までの地球の私達の生活でした。

このようにして出来た悪いカルマは、消すことの出来ぬほどに巨大なものとなり、手の付けようのないまでにふくれ上がって来ました。

このようにふくれ上がって来た巨大なカルマは、私達の真の不足を責めたてながら、生活の中に、身に、心に、魂に襲いかかって来ました。

カルマは生活の中に生まれたのです。消すのもやはり生活の中で、真で消すのです。真を受けて解くのです。今まで皆がこのカルマを生活の中で解く戦いをして来ました。その戦いは剣<sup>つるぎ</sup>の戦い、苦しい戦いでしたが、なんとか今日まで来ました。この戦いの中には様様なことがあります。新しい不満とカルマも生じ、累積して来ました。

私達地の真が天に通じない時、不満とカルマが生じます。真が地に欠けていたのでした。この新しい不満やカルマを消す時が来ました。

地に今まで欠けていた真を整える時です。地の主たるワンダラーにも、今まで欠けていた真が整い育ちつつあります。多くの地球の不満やカルマをやわらかい愛で受けて、真で解くのです。

このあとここに集まれた全員が、日常の不満を、またこの道における今日までの歩みの中での不満、不信、疑い、オイカイワタチの本に対する不信、疑い、ワンダラー同志の不満などを語られた。それぞれの方々が、日頃心の奥に秘められていたことに関して、ど

んな小さな些細のことでも、すべて本音を出しつくされたのであった。

午後二時一五分、

「天において焼き入れはすみました。」

午後三時五〇分、

「ここに、すべては行われましたこと、ワンダラーの皆さんありがとうございます。ここに天よりお言葉を頂いた。」

ここにこの儀式は終わり、結語が述べられ、宣言が語られた。続いて次の新しい儀式も同時に行われたのである。その内容は次の通りであった。

今日の「この地球の浄めの儀式」において、皆さんには、この儀式に至ります今日までに、そして今日の儀式において、皆さんの大変な勇氣と努力により、身に持つ不必要なカルマを真で解いて下さいましたこと、本当にありがとうございます。

ここに、身に持つカルマを解かれましたことは、これからの新しいお役を果たして行きますと誓われたことでもあります。

ここに宣言致します。

「ここに皆さんが天の神様に誓って下さいましたこと、ありがとうございます。」

今、新しく皆さんは生まれ変わりました。

ここに、鏢球王国は誕生致しましたことを宣言致します。

これからは、鏢球王国を守り、すべての人々と結ばれて進んで行かれますよう。

この地、鏢球王国を守り、建設して下さいますよう、ワンダラーの皆さんに申し上げます。

今ここに『この地球の浄めの儀式』を終えて、『鏢球王国誕生の祝事の儀式』が只今終りましたことを宣言致します。」

カルマを真で解かれましたあなた（ワンダラー）は、これから鏢球王国を守り、鏢球王国建設をする良きカルマを頂かれたのであります。

ここにお集まりのワンダラーの皆さんにより、只今ここに鏢球王国建設の土台が出来ました。

これからは、土台である皆さんは、一人一人が自らの足で、真の道を歩んで進んで行って下さい。

全国におられます、これから新しく誕生されますワンダラーの方々（すなわち万たる数のワンダラーの方々が目覚めて、立ち上がられます。）を探し、真を語り、一人立ち出来

るよう助けるのです。その方々は、鏝球王国建設のカルマを頂いて、これから活躍されます。

多くのワンダラーの方々の身についた不必要なカルマを真で解かれますよう祈って下さい。真を語って下さい。

ワンダラーの真の道を進まれますあなたは、天の神様、サナンダ様、天の神々様と一緒にです。

貴方が真を語って働かれます時は、いつでも、どこでも、天の神様、サナンダ様、天の神々様と一緒に働かれます。ですから、いつも一緒に進んでいることを絶えず祈って進んで下さい。

これからは、カルマの解けたワンダラーは、一人一人が天の神様、サナンダ様、天の神様と一つになって、自ら進んで行って役を果たすのであります。

そのお役は、「真」で地のカルマを一つ一つ解いて行くのです。この地にある悪しきカルマを真で解いて行くことにより、鏝球王国の建設が進むのであります。

ワンダラーの真の働きによって地球のカルマが全部解けました時、この地球は全部が、神の国、鏝球王国となります。

ですからワンダラーの、カルマを真で解く努力によって、鏝球王国の建設（イコールII世の終わ

りの変化）がなされてゆくのです。

鏝球王国の建設の進行は、地のカルマを一つ一つ解いて行くワンダラーの努力によるのです。それはワンダラーの肩にかかっています。

これからワンダラーの働きが始まります。これから続く長い建設の努力を、皆さん（ワンダラー）は、休むことなく、絶えず祈りを忘れないで、ワンダラーの真の道を、真をつくして、一人一人が前進して行くのであります。

このようにW氏が結語を述べた。続いてN氏が次のように「これからの生活」について語った。

これからの生活は、今日の儀式の時のように、こうして、その時その時のカルマを解いて、後に悪いカルマを残さない生活となります。そして新しい生活の場へと進んで行くのであります。

この生活の基礎が出来ますと、後は楽しみであります。永遠の生長の段階へと進んで行きます。

私達は、この基礎をこの儀式で造ったのであります。ここに新しく天の真と結ばれて、

今まで欠けていた真を整えて、育てて行くのであります。この新しい真は永遠のものであります。

この新しい真は契約の箱なのであります。魂の乗り物であります。ワンダラーは地球のすべての人々の、不平不満を、願いを、カルマを、すべてを愛で、誠で聞き、受け入れて、真で解いて新しい永遠の世界に案内してあげるのです。

私達ワンダラーは、この契約の箱を、今日、天より、一人一人に頂いたのであります。この契約の箱を大切に守り育てて行きましょう。それは、役を果たして行くことにより守り育てて行けるのであります。

この契約の箱は、ワンダラー全員のところに降りて来ます。この新しい契約の箱をいただくには、悪しき不必要なカルマを全部出しつくすことです。このことにまだ気付かないワンダラーの方々の、カルマを出されますよう、気づいたワンダラーは真で助けることです。

皆さんこの真の道をもつて進んで行きましょう。ありがとうございました。

以上をもってこの日の、「この地球の浄めの儀式」と「鏝球王国誕生の祝事の儀式」は終わったのである。

ワンダラーが身に持つ不必要なカルマを真で解くことは、「この地球を浄める」ことである。これが儀式においてなされたことにより、「鏝球王国」は誕生し、「祝事の儀式」が行われたのであった。

新しく生まれ変わったワンダラーは、天の神様より、新しい使命、「鏝球王国を守り、鏝球王国を建設する良きカルマ」を頂いたのである。

鏝球王国の建設は、「たましい（魂魄）の世界」を創り（生み出し）、そして「形の世界」を創って行くのである。いよいよワンダラー全員が使命を果たす時が来たのである。

八月二二日、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「これから整えて行きます。」

ワンダラーはこれから鏝球王国建設を整えて行くのである。これからは生活の中で、……  
 「一つ一つ整えて行くのであります。すると一つ一つカルマは消えて行くのであります。一つ一つ整えます。一つ一つ消えます。」

これからの、一つ一つのそのカルマは、後に残らないカルマとなります。

一つ一つのカルマを後に残さないよう、カルマをなくする力を整えることでもあります。このようにして、真と真で進んで行きます。」

「真の道は開かれました。」

八月二一日、N夫人は次のテレパシーを受けた。

天と地とが結ばれて☆となり、合わせ鏡となり、日本の日の丸になり、太陽になる。太陽の陽となった。その陽は、沢山の実のついているその二本の木に日を照らす。そのついている実を大切に落ちないように守ること。

昭和四九年二月二一日

「太陽の陽です。沢山の実のついている、その二本の木、そのついている実を大切に、落ちないように日を照らして守ること。

東の海に山あるなり。その山に白銀を根とし、黄金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。」と三年前にも示されている。

同日(二一日)、N氏は次の靈感を受けた。

「あなたは、これから底辺の場において働かれます。陰の場の底辺の場においての働きとなります。」

底辺の立場の方々と結ばれて、役をなさいます。」

八月二八日、

サナンダ様のお言葉。

鏝球王国建設の良きカルマを天の神様から頂かれましたワンダラーの方々に申し上げます。

皆さんにはまだ他人に頼る心があります。これでは今までと一緒です。

自分の心の目は直接天の神様と結ばれ、天の神様の言葉(テレパシー・靈感)を信じ、自分にテレパシー・靈感を感じ、その通り実行することなのであります。

天の神様の言葉とは……、自分の心と身の全部をワンダラーの使命に向けて、天の神様、サナンダ様、神々様に自分の進む道を祈りますと、心に湧く思いがあります。これが天の神様の言葉です。その通りに、直ちに勇気を持って実行することであります。

これからは自分で、「真の心」を向けて、実行して進んで行く毎日であります。

他人の言葉や他人からいわれるのを待って実行するのではないのであります。

それを(ワンダラーの進む道)他人から説明して頂くものでもなく、聞いたり教わるものではないのです。

今は、言葉や文字やストーリーではないのです。自分にテレパシー・靈感を感じて、その感じたままを直ちに実行することです。

テレパシー・靈感を受けるには、その心と身の全部をワンダラーの使命を果たすことに向けますと、決して間違った他のテレパシー・靈感は入らないのです。

この心が持てるようになるには、今はカルマが真で解かれていますので、以前（悪しきカルマを身に持っていた時）とは全く違うことに気がつくことです。

今のあなたは、「真」の判るあなたです。以前の進み方とは全く違うのです。

天の神様を祈るだけ祈って、勇気を持って進んで行かれますよう……。

地球はあなたの肩にかかっています。

九月二日、

サナンダ様のお言葉。

ワンダラーの皆さんに申し上げます。

これから、皆さんは、一人一人真の道を歩んで行かれます。

ワンダラーは寂しいという心はないのです。その時、天の神様に祈るだけ祈りましょう。

天の神様から、貴方々一人一人が、鏝球王国を守り建設して行かれます良きカルマ<sup>使命</sup>を頂いたのであります。

この良きカルマ<sup>使命</sup>を真で果たして行かれますよう、あなたは使命を果たすお役を頂いたのであります。

ですから、一人一人真の道を進む役は、その人、その人、同じではないのです。

あなたの傍に、いつも天の神様、神々様は語っておられます。

貴方々の心の目は、いつも天の神様、神々様と一つなのであります。

天の神様に祈るだけ祈りましょう。その時、天の神様よりお言葉を頂かれますことでしょう。

八月二十九日、

サナンダ様のお言葉。

前回（八月二一日）行われました儀式においてのカルマはすべて焼き入れられました。残るカルマも、皆さんの努力によって、再びあやまちを繰り返すことのないよう、すべてここに焼き入れられました。

しかし、目覚められないまま進まれますと、前回（一九六〇年）と同じように貴方々は

気が付かず、そのカルマはふくらんで行きましたことでしょう。

同じように繰り返さなければなりませんでしたが、ここに皆さんの目覚めにより、あやまちのないように進まれましたこと、ワンダラーの皆さんありがとうございました。

註八月二一日の儀式の翌日、ある小さなことが起きた。それを掻き立ててカルマを作ったのであった。しかしそのカルマは直ちに真で解くことが出来た。これによって残るカルマも焼き入れられたのであった。

## 第五章 鏝球王国のたましい（本の気）誕生

八月二七日、夜、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「これからは前に進んで行くことだけを考えて行きましょう。」

八月三〇日、N氏は天に祈り、次のようなお願いをした。すると次のようなお答を頂いた。テレパシー

お願い「天の神様、私に真を下さい。」

お答「まず真をつくしなさい。真を与えます。」

お願い「天の神様、愛を下さい。」

お答「愛をつくしなさい。愛を与えます。」

お願い「自信と勇気を下さい。」

お答「まず勇気を持って実行しなさい。自信と勇気を与えます。」

「真の心の思うままなんでもしなさい。なんでも与えます。」

「勇気を持つことです。」「実行することです。」

九月一日、Mさんは午後一時から一二時の間に次の霊夢を見た。

ある場所で、W夫妻、N夫妻との語らいが終わり、N夫妻を玄関まで見送った。その時、N夫人は次のようにMさんに語った。「これよりいろいろのことがあなたに天から知らされます。ですからそれを受けて下さい。」それからMさんは、九月二日、午前〇時より四時頃まで、次の光景を見たのである。

・北海道の有珠山がくすんだ灰色の空に覆われ、精も根もつき果てて、樹木は枯れ、地球が死んだような姿が目の前に浮かぶ。どうして有珠山が出て来るのかと何度も何度も打ち消すが、消そうとすればする程鮮明にその姿が浮かぶ。

・有珠山の光景が消え去ると、次に心の中から、明瞭な姿で、沖縄の地が浮かんでくる。沖縄では、天も地も、草も木も、水も、すべてのものが生き生きと躍動し、去る七月二二日夕刻、沖縄の地で見た太陽のように生命力が満ち溢れている様子が見えるのであった。

・そのあと、東京が浮かんで来る。ふと、東京の先日までの長雨（二二日間）は、これからなにかが起る前ぶれだと感じた。

・続いて、北海道へ近々にどうしても行かねばならないと強く感ずるのであった。

古い地球と、すべての人々、全人類、全動物、一切のすべてのものが瀕死の状態にある。これを救い上げて、生まれ変わらせて、生命力の溢れる鏝球王国に移すことをせねばならないとなぜか思うのであった。

註この意味は後日に至って鮮明となり、重要な儀式を行うべきと、知るに至るのであった。

この日（一日）、午後五時二〇分～六時二〇分、

I氏は天のしるしを二つ見た。共に大変鮮やかなものであった。この時次のように直感した。

「目で見える世界においては鏝球王国はほんの一部分しか出来上がってはいない。大部分はかくれている。これからは、地道であるが真の生活を続けることである。」

この頃、高知のN夫人より、私達ワンダラーのこれからの進む心がまえを次のように手紙で知らされて来た。

——前文略——鏝球王国の建設は、全員が生まれ変わって新らしく出発したのです。今までのことは捨ててというか離託と申そうか、とにかく今までとは全く一変したのである

ことを自覚して、皆が同じで第一歩を踏み出すのです。この気持を失うと、絶対に進まないのではないかと思えます。

それぞれのカルマを天の神様に解いて頂いて、赤ちゃんのように綺麗に、そして軽くなつた今こそ、過去のものとはッキリ決別して、一人一人が天の神様からお役を頂いて出発するのです。——後文略——

九月三日、N氏の霊夢。

皆が集まっているが私（N氏）は皆と別の所に一人である。すると、S氏は溝川どぶを泳いで来て、

「皆は向うで待っているよ。ちょっと身体を使わないとね。」と、身体を使つての実行を示唆して、もとの溝川を泳いで行った。

この溝川どぶは西から東へ流れているが、悪臭が漂う黒く汚れた川である。川下の方には水門、ごみ、石などで水が溜っている所もあり、普通ではとても泳げない。ここを、S氏は、水面に顔をほとんど出さず潜もぐつたままで泳いで行った。

此この象徴的な夢の中に秘められているこれからのワンダラーの働きを味わって頂きたい。

九月三日、サナンダ様のお言葉。

ワンダラーの進む道は真をつくことです。

ワンダラーの皆さんは、天の神様に全託なくしてどうしてワンダラーの道が進めようぞ。自覚を高めることです。

他人の言葉や、文字や、ストーリーではなく、天の神様、神々様の言葉を心で感じることであります。

皆さんはこれから充実した生活の中に真を築き上げて行くのであります。心を静かに、天の神様に祈れるだけ祈りましょう。

九月五日、W氏は、来る八日、九日、北海道有珠山にて儀式を行うことに決定した。この日（五日）、N夫人は次の祈りを全国のワンダラーの方々一人一人に祈った。

「〇〇さん、サナンダ様の真の愛を送ります。受け入れて下さい。九月八日までにこの受け入れの準備を整えられますように。」

八日までは古い地であるが、九日からは新しい地となります。

九月九日からは、ワンダラーの方々は、サナンダ様の真の愛を受け入れて、各自が活動を始めて下さい。」

午後六時、大きな輝く円盤が現われて西へゆっくりと進んで行く。約七〜八分間これを目撃した。(N夫妻)

そのあと、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「九月八日をもって『古い地球は終わり』、九月九日をもって『新しい地球となる。』  
天(陽)と地(陰)は結ばれる。」

古い地球の中であって、新しい世での働きをもって、皆さんは進んで行かれますよう、勇気を持って行動に移されますよう、良き働きが出来ますよう、天の神様、天の神々様は助けます。」

九月六日、午後八時〜九時。

Mさんは天空を仰ぐ。来る八日、北海道有珠山での儀式について天の神様に祈る。とたんに鮮やかなダイダイ色に輝く円盤が頭上から西方の彼方へ飛んで消え去った。そこでの儀式について更に深い自信と確信を得て再び祈った。

暫くすると頭上に北海道を型どった白い雲が現われた。これは北海道の地形だと判った。するとこの地形は鳥の形に変わった。鳥は首を北へ向け、あたかも北海道に向かって滑るが如くに移動するのであった。

その鳥の姿はやがてVの字に変わったのであった。

九月七日、夜半未明。

Mさんは子供が誕生する夢を見た。それも一人(一匹)ではなく複数(沢山)である。(生れ出ずる子供が人間か動物かは不明であった。)Mさんはこの誕生に夢の中で心からの喜びを感じたのであった。

この日(七日)、○○はテレパシーを受け、次のように祈ったのである。

「天の神様、サナンダの準備はここに整いました。この灰色にくすんだ地球を元の位置に、鏝球王国に戻して下さいますようお願い申し上げます。」

九月八日の北海道有珠山で行われる儀式は、去る七月二二日、沖縄のひめゆりの地で行われた儀式とまさに対称となるものである。

ここ有珠山で行われるのは、「たましいの世界」の『本の気』(陰の気・魄)が、天と地の結びにより新しい地より生まれ、湧き出ずる儀式である。

七月二二日にたましいの魂(本の心)が誕生、九月八日に行われる儀式で、たましいの魄(本の気)の誕生により古い地球は終わり、新しい地球となるのである。

この日（八日）、北海道の空は一面が灰色である。空港に降り立った時、身の引き締まる思いと共に深い感激を味わった。今日の儀式の重大さをひしひしと感ずる。この儀式にはワンダラーを代表してW氏とMさんが参加した。

洞爺駅より有珠山のふもとまでは余り遠くはないが、儀式の祈りをするための静かな場所を考えた時、「神社が良い。」と声なき声を聞いた。

タクシーに乗り神社を探してもらうが、見当たらない。たまたま行き合った母子連にたずねた。母親は知らなかったが、一緒にいた子供（幼稚園児くらいの女子）が、あどけない顔して考えるように目を天に向けた。この時「どうか思い出してほしい。」と心の中で祈った。するとその子供が、「ウス神社がある。」といった。

その神社に到着してよく見ると、ウス（有珠）はウスでも「臼」であり、「大臼山神社」というのである。その時、臼はすべてを生み出す源であると直感したのである。

この神社は無人であった。神殿の扉を明けると「鏡」が一枚お祭りしてあるだけで他にはなに一つない。その時、「剣の世から鏡のみ世」に変わるのが鏝球王国であると靈感を受けた。そして、今日の儀式にはこの場所が最も良いと確信したのであった。時は午後三時であった。

儀式の祈り。

「天の神様、サナンダ様、神々様（大臼山の神様、有珠山の神様）、この古い地球はすべて終わりましたことをここに報告申し上げます。

この古い地球はすべて終わりましたので、この地のすべての人々、全人類、全動物、一切のすべてのものを新しい地球、鏝球王国に移して（誕生）下さいますようお願いに参りました。

この灰色にくすんだ地球を元の位置、鏝球王国に戻して下さいますようお願い申し上げます。

新しい地球、鏝球王国におきまして、すべての人々、全人類、全動物、一切すべてのものが、生き生きと躍動し、生命力が満ち溢れますようお守り下さい。

天の神様、サナンダ様、神々様、このお願いをお聞き届け下さいますようお願いいたします。」

小雨降る中で儀式は終わった。札幌に戻る車中で夕闇の幕が降り、天空は真暗となった。すると突然、西空の地平線上が巾広い長い帯状の緋毛せんを敷きつめたように光る異様な光景を見た。車中の他の人が、「生まれて初めて見る凄い夕焼だ！」と叫んだ。

この緋毛せんのような雲はやがてオレンジ色に変わり、暫くこれが続いた。これを見て深い感動に包まれ、今日の儀式は無事に果たし終えりと確信するのであった。

九月九日、未明、Mさんは、「すべてのもの、一切はここに誕生せり。」と全身心で感得したのであった。

この日、午前一〇時頃より天候がにわかに変わり、今まで頭上を覆っていた重くらしい灰色の空は次第に青空となって、天のしるしが天空一杯に繰り広げられた。その光景は、丁度沖繩の儀式の翌日（二三〜二四日）に見たのと全く同じような素晴らしいものであった。このような光景が一〇日まで続いて繰り広げられたのである。

（沖繩では陽を感じしめられ、北海道では陰を強く感じさせられたのは印象的であった。）  
ここに、北海道有珠山における天と地の結びの儀式により、新しい地球、鏝球王国の「たましいの世界」のあらゆる一切のものの『本の気』（魄・陰の気）が、地から湧き出て誕生したのである。

この日（八日）、午後三時より、有珠山の儀式と時間を合わせて、現地に参加されなかったワンダラーの方々は祈りを捧げられていた。

午後四時一五分、N夫妻は地上より半円を画いた完全な虹を見た。この虹は物凄いと表現するのがピッタリするほど鮮やかに、七色に輝いていた。これを見て、今日の儀式が立派に果たされたことは証しされたのであると判ったのである。

九月一日、午後三時三〇分、有珠山の儀式についてN夫人は次のテレパシーを受けた。  
「すべての人々、全人類、全動物、草木一切のものは生まれ変われり。」

## 第六章 鏢球王国のたましいの世界誕生

― 形の世界の建設始まる ―

九月一二日、夜九時、N夫人は天に次の祈りを捧げた。

「これから多くのワンダラーの進める道を正しく歩んで行けますよう、真の道を皆一つにワンダラーが進み、充実した生活が出来ますよう。」

天の神様、サナンダ様、神々様、正しく導いて下さいますようお願い申し上げます。」  
 来る一八日には、生まれ変わって鏢球王国建設の良きカルマを頂かれたワンダラーの方が集まられ、一つに結ばれて前進して行くことに関する話し合いがもたれることに決定されていた。

この会合に対し、この日(一二日)、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「来る一八日は、鏢球王国建設の儀式であります。」  
 続いて、

「ピラミッドは完成致しました。」

この日(一二日)、午後六時一〇分〜三〇分。

Mさんは西空の夕日を見た。西の天空一杯が、その夕日の照り映えに血がたぎるよう燃えている。その中に一部分だけ楕円の形をした青空がのぞいている。これは湖を、池を表わしているのであると直感した。

これを見ながら目を左(南)へ移すと、そこには薄いオレンジ色の夕映えがある。その中に突然、明確に富士山が描かれた。

午後七時五五分、再び天空を眺めながら、Mさんは次のように自問自答していた。先程の夕日にはなにか意味があると思えてならない。また、確かにあれは富士山を描かれたに違いないが勘違いかなと。すると、突如頭上から円盤が現われ、左右交互にパッ(左)パッ(右)パッ(左)パッ(右)と美しい光を放ちながら西空の彼方へ飛び去って消えた。しばらくして部屋に戻り、椅子に腰を下すと同時に次の靈感を受けた。

「富士山の湧玉の池へ行かねばならない。有珠山で、ことを起こして頂いたことに対し、生まれ出た「本の気」(魄・陰の気)のたましいの無事をお願いするために。また、沖繩ひめゆりの地にての「本の心」(魂・陽の気)のたましいと共に、ここ湧玉の池にて結ばれ鎮め清めて頂かねばならない。そしてお礼とお願いに行かねばならない。」

この靈感を受けたMさんは、暫くの間、胸の動悸が早鐘のように打ち、全身に振えを覚えたのであった。

来る二三日（秋分の日）に、富士山の湧玉の池にて、沖繩ひめゆりの地の儀式により生まれた「本の心（魂・陽の気）」と、有珠山の儀式により生まれ出た「本の気（魄・陰の気）」との結びの儀式を行うことに決定された。この時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「鏝球王国の儀式となります。」

九月一三日、午後六時。

Mさんは、西空にアカネ色に輝く円盤の形をした雲を見た。その円盤の上に人間のようなものが乗っている。目を左に向けるとアカネ色に輝く雲で富士山が画かれている。その時、次の靈感を受けた。

「我々ワンダラーはこの円盤に乗って富士山の湧玉の池に行くのである。」

九月一四日、午前五時五〇分。

Mさんは我が家の台所の小さな窓から黄金に輝く強い光が差し込むのを見た。余りにも強く凄く光なので思わず太陽を眺めた。

その太陽は正面にあって、黄金に輝いている。この太陽を包むように、重なるように、黄金に輝く十字が見える。これを暫く見ていると、（午前五時五五分）菱形の雲が現われ、輝く太陽を包んだ。午前六時、再び最初と同じく黄金に輝く十字と太陽が重なった光景となった。そして六時五分には普通の日の出の太陽となったのであった。

この時、次の靈感を受けた。

「沖繩での儀式と有珠山での儀式はすべて整い、湧玉の池にて結ばれ、お守りをお願いすることでこのことは終わるのである。」

続いて次の靈感を受けた。

「ワンダラーがこれからつぎつぎに行かねばならない事柄に向って、全てのワンダラーが一つの心になることを天の神様は望み、待っておられる。」

ある段階までは一部の人達で出来るが、地球を浄化するということは大きな大きな仕事である。そのために全員のワンダラーが一つに結ばれ、全員のワンダラーの力が必要である。」

この頃、高知のN夫人より次のような手紙がもたらされた。

——前文略——今、不思議な力強さに満たされております。昨晚、夜中に眼がさめて色

色と考えごとをしております時、目に炎で燃えている△が焼きつきました。その三角(△)は、あることを意味していることが判りました。即ち、天の神様の契約によって、神の国を統べられる聖なるお方を生み出されていたことを表わしている△であるということでした。

また、この契約とはこの地球が生まれるその前より神の国となる時に統べられる御方のこの世でのタイタスカンのお目覚めを、天の神様をお願いすることでした。

九月六日のことです。なに気なく空を見ると今日はなぜか天の雲がいつもと違うことに気づきました。なにか非常に荘厳な喜びを表わしているように思えるのです。

この日(六日)、午後二時三〇分、むらがる厚い雲の中に四角い型で抜いたように青空が見えます。

午後四時、雲の中にかくれた太陽から地に向かって幾筋もの光の柱、天と地を結ぶ光の柱が立つのを見ました。

午後五時三〇分、西空に黒い雲があります。その黒い雲の向う側に、その黒雲の線と全く同じようにオレンジ色の線が輝くのを見た時、黒雲の向う側に光り輝く世界があると感じました。

この一連の天のしるしを見て、次のように判ったのであります。

四角の型で抜いたような青空。これは契約の箱であり、鏢球王国の入口であります。まわりは厚い雲で覆われていますが、この全人類の通る入口は真青で美しく、廻りとは全然違った世界にいざなうことを表わしています。

人々はもうこの見えている入口に向かって安心して進むことです。廻りがどんなに昏迷に見えていても、神様は全人類の救われる道をハッキリとつけて待っておられます。そのことを信ずることが大切なのです。信ずるものには入口は見えるが信じない者には見えないのです。

この意味は、先程の太陽の光りが地に向っているように、天の心と地の心はしっかり結び合っていることを表わすと思いました。

我々は天の神様と一体であることを知る。

次のしるしの黒い雲は影の地球、黒いカルマに覆われた地球、しかしその実体は、本体は限りなく美しい光の世界。その影の地球と光の地球は一体であり、この黒雲の向う側に光り輝く世界がある。この黒い皮をめくればそこに光の天国はある。

その夜不思議な夢を見ました。

夢の中で天を見上げていると、空一杯になにかが写っているのです。家のようにもありません。間において規則正しく並んでいます。ところが、その色が、丁度フィルムのネガを見ると

同じで実物とは反対に黒白に写って見えるのです。空に写っているのは実体ではない。なにかを引張ってめぐり取ってしまいたい。あゝ本物が見たい。あゝはがゆいと思いつけました。

朝方、また夢を見ました。

同じく天を見上げていると今度は空一杯に実にはカラフルな、曲線的な美しい建物が立っているのが見えます。あゝ美しいなあーこれが鏝球王国だろうか、天に写っている美しい姿は地にはどこにも見られません。あゝはがゆい。この地の姿、このまぼろしの古い地球。黒ずんだ地球をめくり取ってしまいたいと思うのです。

九月七日は次のことを感じました。

天の神様に祈れば必ず答えて頂ける。真はきっと届けて頂ける。——この確信は持っておりましたが、八月二一日の儀式の後はお一層強く感じられるようになりました。

ワンダラー一人一人が天の神様にすべてをあずけ、一つになりたいという祈りがされた時、ワンダラーは一つになったことになるのでしょうか。

ワンダラーの完全な勝利とはその時にあるというような気がしました。——後文略——  
 続いて九月一三日、高知のN夫人より次の内容の手紙が到着した。

——前文略——昨夜（二一日）夢を見ました。目を覚ましてその夢について考えている

時、テレパシーが入りました。

夢とは、次のようなものでした。

地から幾條もの流れ（筋のような）が天に向かって昇って行くと、天から雨が降るように幾條もの流れが地に向かって降りて来る。それらが交差して、しぶきのように、あたりが見えない程に多くなっているのが見えました。

「地より天に向かう祈りと天より地に向かう祈りが多ければ多い程、地球は浄められます。」

その時、次の靈感を受けました。

地の人間（ワンダラー）が天の神様に多く祈れば祈る程、天の神様はそれに応えて、愛、真、啓示、靈感を雨が降るように地に向かって降りして下さる。そしてそれらが多くなつて、しぶきをあげるように交錯する時、地球は浄められると思いました。

全員のワンダラーの方々が、カルマを真で解かれ目覚められるには、ワンダラー全員が天の神様に祈れるだけ祈る、真をこめて天の神様にお願いの祈りを捧げることです。

まずワンダラー全体の目覚めをお祈りすることにより、天の神様は多くの真の靈感を、目覚める靈感を地に向けて掛けて下さるのです。

それによって浄められる、即ち目覚められるのだということが判りました。祈りの大切

なことを天の神様に改めて教えられた思いが致します。

いつでも、何をしていても、心は天に向け、全員のワンダラーの目覚めを祈りたいと思います。——以下略——

九月一六日、午後四時、N夫人は天より次のテレパシーを受けた。

「地の皆さんの働きに感謝致します。今日までに、鏝球王国を迎えられるところまでに、天と地は進んで参りました。

今まで天のしるしとして多くの難題のしるしを示して参りましたが、ここに多くの難題のしるしは終わります。

皆さんが共に進んで行かれますよう、天の神々は、これからは皆さんワンダラーの働きをじっと観察して行きます。」

註「多くの難題の天のしるし」は終わったが、天のしるしが全部無くな  
った意味でないことを附記する。

九月一八日。「鏝球王国建設の儀式」は午後一時より始まった。

W氏は次のように語った。

「カルマを真で解かれて、新しく生まれ変わった多くのワンダラーの方々が一つに結ばれて前進して行くことについて話し合う集まり（即ち本日の集まり）の案内を出したあとで、天より、この集まりは、『鏝球王国建設の儀式』であると言われました。」

続いて今日の儀式について、次のように説明した。

最近に至り、私達ワンダラーが、使命をどのように果たして来たか、どのように進行させて来たかが、次第に鮮明になって来たのであります。

この十八年間に、ワンダラーは、「世の終わり」と「新しい世の誕生、建設、完成」という使命（儀式）を次のような「世界」でそれぞれ行って来たのであり、またこれからは行ってゆくのです。

① 無の世界

② 霊の世界

③ たましいの世界

④ 形の世界（これが、これから始まるのである。）

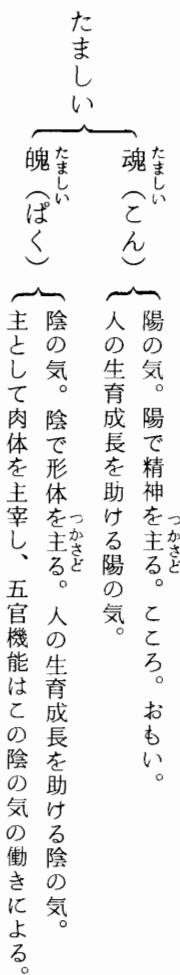
この順序で、①を完成させて②に移り、②が完成すると③に移ってきたのです。そこで、これにそって今までの歩みを振り返って申し上げて見たいと思います。

① 「無の世界」において、「世の終わり」が行われ、「新しい世」が成就して「無の世

界」での戦いが終了したのが、昭和五〇年九月三〇日であった。「無の世界」では「新しい地球」となったのである。（「オイカイワタチ」本書、別冊(一)及び別冊(二)118頁参照。）

② 「霊の世界」について。去る（昭和五二年）六月一九日の「この地球最後の儀式」をもって、新しい地球、神の国鏝球王国においては「霊の世界」が完成成就し、万物一切のものの「霊」は鏝球王国の神の国の「霊の世界」に帰って来たのである。

③ 「たましいの世界」は、カルマを真で解かれたワンダラーの方々によって建設されつつある。今日（九月一八日）の儀式は「鏝球王国建設の儀式」である。



これは「たましい」の説明（諸橋轍次著、大漢和辞典）であるが、ワンダラーは、鏝球王国の「たましいの世界」におけるたましいの誕生を、天の神様と神々様と共に行うのである。

去る七月二二日の沖繩ひめゆりの地の儀式において、「たましいの世界」の「本の心」（魂・陽の気）が、天の神様と神々様と地の神々の結びの大御業により、天より天下ってこの地に生まれたのであった。

これにより、去る七月二五日、天より次のお言葉を頂いた。

「サナンダ様の（思いのままの）完全な地球となりました。」

これからは、全員のワンダラーが天の神様より鏝球王国建設の良きカルマを頂き、そのワンダラー達の働きにより（天の神様のみ心を頂き、サナンダ様のお考えをその通り頂いて）「ワンダラーの思いのままの良き地球」にしてゆくのである。

去る九月八日、有珠山の地での儀式における天と地の結びにより、「本の気」（魄・陰の気）が新しい地より湧き上がって誕生した。

ここに、新しい地球、神の国鏝球王国の「たましいの世界」において、すべてのものの「魂」こん「魄」ぱくは誕生した。

この「本の心」と「本の気」が、来る二三日（秋分の日）に富士山の湧玉の池にて行う儀式により、結ばれて「たましい」となり、「たましいの世界」が完成成就して「鏝球王国の儀式」となるのである。

④ 「形の世界」について。陽（魂）と陰（魄）の働きが結びついて「たましい」となり、生を得、働きを得る。そしてこの働きが、「形の世界」を造ってゆくのである。

九月二三日、午後二時より二時三〇分まで、富士山の湧玉の池にて「鏝球王国の儀式」が行われた。肉体での参加者は代表の拾数名であったが、全員の方々が「霊」と「たましい」で参加された。

午後二時よりワンダラー全員で次のような祈りを捧げた。

鏝球王国の儀式の祈り。

「天の神様、サナンダ様、神々様、天と地が共に正しくなり、永遠にすべてが正しくなりますよう、『本の心』と『本の気』とが大きく結ばれ、正しい地球が育ち、そこで生活できますよう、いままで邪気に包まれ隠されていきました生気を、万物の根元であります生気を、ここに現わして下さいますようお願い申し上げます。」

この時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「鏝球王国は復帰しました。」（神様の創りたもうた本来の姿に復帰したのである。）

「無の世界」が確立してから、このような経過をへて「有の世界」は誕生したのである。ここに魂（本の心・陽）と魄（本の気・陰）が結ばれて、鏝球王国（たましいの世界）は誕生した。これからはこの（たましいの）働きが始まり、いよいよ「形の世界」における鏝球王国の建設が始まったのである。

この儀式の日、午後一時四五分、Mさんは湧玉の地にて太陽を見る。太陽をとりかこむ

雲の紋様を眺めた時、次のテレパシーを受けた。

「すべてが『形の世界』の新しい地球、鏝球王国に整う。」

Mさんは、「祈り」を捧げた直後、続いて次のテレパシーを受けた。

「聖火台に火が点火された。」

この聖火は、一九六三年にカミラ様より引き継がれた。この暖かい焔を保った、ワンダラー全員は、今まで長いあいだ走りに走って走り通してきた。そして今やっと鏝球王国の聖火台に点火され、新しい炎が赤々と燃え上がったのである。

ワンダラー全員がこの焔を益々燃やして鏝球王国を守り、育てて、「形の世界」を建設して行くのである。」

続いて次のテレパシーを受けた。

「すべてのものの『たましい』は鏝球王国につながった。」

「これから（形の世界の建設の段階）がワンダラーの働く本番の時である。ワンダラー全員の活躍する時が来た。」

この日K夫人は午前三時に起きた。午前四時丁度に、金のトビの線画を霊視する。この時、ご皇室の参加と、それに大勢の人達でなにか大切な尊い儀式が行われているのであると直感したのであった。

九月二四日、昨日行われた儀式の報告と、「鏝球王国の復帰」の感謝の祈りを、この日集まられたワンダラーの方々と共に行った。

この時、N夫人は次のテレパシーを受けた。

「皆さんの良き働きにより、鏝球王国を迎えました。皆さんに感謝致します。これからも勇気を持って進んで行きましょう。」

W氏は次の通り宣言した。

「本日九月二四日をもって、新しい世界鏝球王国の『形の世界』の建設がワンダラーの皆さんによって始まりました。勇気を持って進んで行きましょう。」

Mさんはその日の朝、次のテレパシーを受けた。

「形の世界に入りました。」

I氏は、「鏝球王国の儀式」について、後日次のように語った。

ひめゆりの地は、地球の陽の気(魂)の中心であり、有珠山は地球の陰の気(魄)の中心である。

ひめゆりと、有珠山において行われた儀式により、これらの地は高い波動の気の中心として働き始めた。

陽の気と陰の気が結ばれて「たま」となる。陽の気だけでも、陰の気だけでも完全には働かない。「たま」とは陽と陰の気が相互に働いて一体になっている状態をいう。

二三日の鏝球王国の儀式によって完全な「たま」が完成し、その働きが始まったのである。陰陽の気が一体となって働く、完全なるピラミッドに富士山はなったのである。

去る九月一二日に、N夫人は、「ピラミッドは完成致しました。」とテレパシーを受けている。

去る九月一六日、(午前二時三〇分)高知のN夫人は、ピラミッドについて次のような靈感を受けられた。

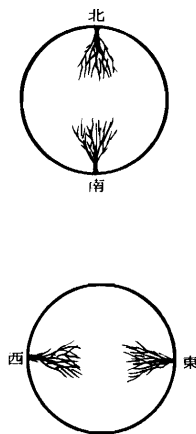
ピラミッドの真の意味は王家の墓というところにあるのではない。それは、「天の意を地に頂く所、聖なる所。」である。

ピラミッドの頂点が本当の意味の王の王としての心を持ち、底辺はこれを正しく頂き、一つの心で結ばなければ、天も地もくずれ去り、形骸のみとなってしまふ。

湧玉から地球全体に流れる気は、まるで「灌溉」のようでもあり、その網の目のように広がる気の通路は「水ももたらさぬ程に」細かく地球全体を覆うのである。

陽の気は「一」で、陰の気は「一」であらわされる。「一」と「一」が結合して「十」となる。「十」が働き回転する(渦のように)姿が⊕で示される。そして一体となり○となる。

(I氏が) かつて霊視した灌溉の光景は次のようなものであった。



高い波動の気が地球全体に広がるということは、地球における意識、肉体、物質の波動が高まることを意味する。全てが真に目覚めることである。気の働きは、天体の位置と無関係ではない。二三日が秋分の日(地球と太陽の位置が特別な時)であったことは、物質(形)的な次元においても意味があることと思われた。

去る一八日、「鏝球王国建設の儀式」は終わった。この時、既に、これからは「形の世界」に入っていくのであるといわれていたが、次のことは、これからのワンダラーの進む道を示されたものであった。

この日、夕方五時三〇分〜六時頃、Mさんは天のしるしを見た。東の天空一杯に、天の神様が大きな御手をかざされたようなオレンジ色の雲がある。西の天空には強く、強く輝くオレンジ色の巨大な夕映えがある。その夕映えの中に、ほんの僅かに、オアシスを思わ

せる青い空がある。そしてその青い空の中に錦鶏が一羽、オレンジ色の雲に抱かれるようにして飛んでいるのが見えたのである。

この時、次の靈感を受けた。

天の神様はまず我々ワンダラーに大きな御手をかざされる。これから進む道に期待をかけられ、御守り下さるのである。安心してすべてを天にお任せすることが大切である。

これからは「形の世界」に入っていく。地球人類は、また全てのものは、いろいろなことを体験してゆくことであろう。

その時に、一般の人々は、どうしてこのような体験をするのか解らないので動揺することになるであろう。その時が到来したならば、私達ワンダラーは、慌てず、騒がず、静かに今までのことを一般の人々が理解できるように語って聞かせ、「愛」をもって「事」にあたるのである。

即ち、この時こそが全てのワンダラーが使命を果たす時に他ならないのである。

この「事」を私達が語る時、ワンダラーの魂を見ることのできない世間の人々は、当然形の世界から入ってくる。したがって、全てのワンダラーは、形の世界において、自身自身を正しく磨いておかねばならないのである。

即ち一人一人のワンダラーが「真の心」を持って、これと同じ「真の人間性」を日常生

活の中で養って行かねばその使命を果たすことはできないのである。

全てのワンダラーが大きな「真」で地球を浄化し鏢球王国を守り育てて行かねばならない。

去る一九日、未明、Mさんは次の霊夢を見た。

ある乗り物に三名の人が乗っている。(円盤のようでもある。)空から太陽を見た。すると太陽を十字に四等分した右上の部分に、極めて鮮明に「出」という文字が画かれている。これを見た時、次のテレパシーを受けた。

「私達ワンダラーは、いよいよこれから地球浄化、形の世界の浄化に出発するのである。」  
続いて次の霊夢を見た。

「ある国で多くの人々が心から楽しそうに結婚式に参列している光景である。それは生命誕生を意味する儀式であった。実に素朴で簡素であり、驕りもつくろいもない。極めて心地の良い素晴らしい儀式であった。」

同日(一九日)、夕方五時〜六時、

東の空を見る。頂上から裾の方にかけて夕日の反射を受けた近くの山は、全体が薄いピンク色に輝いている。

西の空に目を転ざると、金色の雪を積らせたように縁の部分だけを鮮やかに輝かせた雲

が見える。このあまりの素晴らしい光景に声もなく、暫く眺めていた。それから少しの間目を他に移し、再び西空を見た。すると帆かけ舟にそっくりのピンク色の雲のようなものがすーっと動いてゆくのである。(他の沢山の雲は動かない。)見ているうちにその「帆かけ舟」は、北から西へ飛び去った。その瞬間、「円盤である。」と判った。この円盤は、先日見た輝く円盤と同じ位置に見え、同じ方向に飛んでいったのである。

間もなく西空一杯が黄金色こがねいろに輝き、幾条もの太い黄金色の雲の線が横に力強く描かれ始めた。やがてそれらの雲は一八日に見たのと同じ天の神様の御手が変わって、東からはピンク色の御手が、西からは黄金色こがねいろの御手が、天空を覆ってゆく。これを見ていたMさんは、地球全体を、やさしく力強く抱きかかえられたのであると直感した。この時、次のテレパシーを受けた。

「全ワンダラーよ、目覚めなさい、目覚めなさい。この素晴らしい使命を果たせる時が来たのです。天の神様と一緒に強く進むのです。何も心配することはありません。」

九月二六日、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「これからは、形の世界で、まずワンダラーが体験せねばならないのです。

ワンダラーは一番先に自覚して、形の世界でのいろいろの体験を受けて行くのです。」

九月二十七日、午前九時、

W氏は出勤の途中庄内川畔の堤防にて、えんえんと続く何千、何万という数の「トンボ」の集団を見た。しかもこの膨大な数のトンボが全部行列をなして西に向かって元気よく進んで行くのである。その上さらに驚嘆したことは、この全部が（見える範囲では一匹のものなく）つがいをなしていたのだった。これを見た時、W氏は、なにか自分に教えるものがあるに違いないと思った。

この日、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「九月二三日をもって、今までのすべてのもの（すべての人々、全人類、全動物、全草木、一切のすべてのもの）は新しく生まれ変わり、ここに働きが始まった。」

「いよいよ形の世界においての戦いが始まったのである。（しかもこれは決して生やさしい戦いではない。）」

「トンボのつがいの大集団の西への移動によって、新しく生まれ変わったすべてのものの生命力はかく溢れ出ているのだということを、天はW氏に見せられたのである。このように、これからはすべてのものが、生き生きした生命力の溢れる姿となるのである。」

「これから生まれ出ずるものは、正しい世に、正しいみたまをもって正しい位置において誕生するのである。」

今日（二十七日）は仲秋の名月である。

一八時二〇分、大きな満月は黄色に輝き、その廻りには薄黄金色の光がハケでなでたようにある。この満月を見てみると、心の中には至福の喜びが大きく満ちあふれて来て、Mさんは感激にひたつたのであった。この時、次のテレパシーを受けた。

「地球は正しい位置に戻って鏝球王国となり、天の神々様は大変お喜びであります。」  
一八時三〇分、

天空の星を見た。すると星々の間に、目で見えない星がピカピカと光っている。しかもそのような星が沢山見えるのである。その時、「宇宙の喜びである。」と直感した。

一九時、

月の中に山が見える。それは富士山の形をしている。「鏝球王国の富士山が、ピラミッドが出来上がった。」と直感した。  
続いて次のテレパシーを受けた。

「完全に『形の世界』に入った。全員のワンダラーが、形の世界の鏝球王国の建設という使命を果たすのである。」

形の世界の建設は、まずワンダラーの日常生活の身の廻りから始まる。そして、その環

が地球全体に広がって行くのである。それに伴って様々の形の変化が行われる。

地球浄化、形の世界の浄化と鏝球王国の形の世界の建設は同時に行われて行く。それはワンダラー全員の絶え間ない努力によってなされてゆくのである。すべてが、ワンダラー全員の肩にかかっているのである。

「今ここに、ワンダラー全員の使命を果たす時が来た！」

## 第二部 終わり

### 追稿

（註この別冊③の校正及び印刷の手続が終了したあと、次の重要な儀式が行われるに至り、ここに追稿をして、本書の締めくくりとした。）

一月二日、未明、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「沖繩のひめゆりの地に行きなさい。その意味は自分で考えなさい。」

私達は、かねてから、まだ目的と内容については明らかではなかったが、再びひめゆりの地で「儀式」が行われることに気付いていた。またMさんは、去る五日の夜半、「年内

に行かねばならない大切なことがある。」という靈感を受けていた。

一月一七日。

この儀式は、来る一月二六日、午前七時、現地ひめゆりの地で行われることに決定された。

この時、「万たるワンダラー誕生の祝事の儀式」というテレパシーをN夫人が受けた。

「儀式の祈り」は次の通り定められた。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様、ありがとうございます。

去る七月二二日、ここひめゆりの地にて、天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々が結ばれて行われました大御業、ありがとうございます。

去る九月八日、有珠山において天と地が結ばれて行われました大御業、ありがとうございます。

去る九月二三日、富士山の湧玉の池にて行われました「鏝球王国の儀式」により、ここに魂（本の心）と魄（本の気）とが結ばれて「有の世界」が誕生しましたこと、ありがとうございます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様、これから働きを「形の世界」に移行して

下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、神々様、「万たるワンダラー」を誕生させて下さいますようお願い申し上げます。

大地を大きくゆすり、明るく生命力の満ち満ちた世界となし、鏝球王国を成就させて下さいますよう、天の神様、サナンダ様、神々様、お守りお導き下さい。

地の神々様、形の世界に鏝球王国を成就するためのお働きをお願い申し上げます。私達ワンダラー全員をお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

神様の永遠に降り給う地、ひめゆりの地に湧玉の地をお移し下さいますようお願い申し上げます。

一月二〇日、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「沖繩の地における儀式の準備はすべてここに整いました。」

一月二二日、

この日、ワンダラー十数名集まり、「沖繩の儀式」について全員の心を一つにした。

この日、高知のN夫人は次の光景を霊視し、かつテレパシーを受けた。

白い三角の雲に乗られた天の神様のお姿を拝した。そのあとには御二人の神様がおられる。天の神様はいつものお顔に大変よろこばしいやさしさを込めて、次の宣言をなされた。

世の終わりの輝かしい道は整いました。

一月二六日、午前七時。

前夜の雨で清められた沖繩ひめゆりの地において、夜明の静寂と表現しがたい素晴らしき霊気を全身に受けて、

「万たるワンダラー誕生の祝事の儀式」  
が行われた。

この時、Mさんは次の光景を靈感と共に全身で感得した。

「天より数限りないまるまるとふとった可愛らしい赤ちゃん（ワンダラー）がつぎつぎと降りて来る。この赤ちゃんをMさんは両腕に抱きかかえる。するとその赤ちゃんはすーっと消えるように彼方に去って行くのである。この光景が暫くのあいだくりかえされた。これはまさに万たるワンダラーの誕生であると判った。」

この日の朝六時四七分、W夫人は次の光景を霊夢で知らされた。

「万たるワンダラーに迎えられて、皇太子殿下は（たまたいで）午前七時きっかりにひめゆりの地に来られ、この儀式に参加されたのであった。」

一二月四日、

#### 「鏝球王国（形の世界）誕生の儀式」

が行われた。去る二六日の儀式の日から一二月三日まで「万たるワンダラーの誕生」が続いたのであった。このこと（万たるワンダラー誕生）により、この日（四日）この儀式が行われ、鏝球王国は完全に「形の世界」に移行したのである。

やがて、誕生された万たるワンダラーの方々は、己の使命に目覚め気付いて、鏝球王国の完成成就に向かってたくましい活躍が始まることであろう。ワンダラー全員が目覚め気付いた時、鏝球王国はここに成就する。だが、この道はけわしく厳しい道である。

昭和五年一月三日、

古い地球でのすべてのお役を終えられた富士山の湧玉の池にワンダラーが集い、次の儀式が行われた。

#### 「輝かしい世の終わりの儀式」

これからは、「世の終わり」がどのような形で示めされようともあわてふためくことなく、心静かにしっかりと真の心で受けとめ、まわりに真（ことさま言霊）を語るのである。

終わり

## 附・新しいワンダラーの誕生

新しいワンダラーの誕生の一例を次に記述する。

昭和五二年八月二日に「この地球の浄めの儀式」が行われた。この時、サナンダ様より先に（一六日）頂いた、次の言葉が発表された。

「これからすべての人々、目覚められます方々に、契約の箱を渡します。契約の箱とはワンダラーを指します。それは光です。この方々が真の愛を入れて進んで行かれますよう。天の神様、この方々を大きな愛で導いて下さいますようお願い申し上げます。」

これからは（この儀式のあとでは）、「オイカイワタチ」の本等が縁などとなつて、全国に目覚められる元ワンダラーの方々、また新しく誕生されるワンダラーの方々の数がどんどん増えてゆくであろう。（その数は方にもぼるのである。）

真によって身に持つ不必要なカルマを解かれ、目覚められたその方々には、契約の箱が渡されるのである。

ワンダラーとして生まれ変わられる方々のこの輪は、時と共に次第に大きく広がりにつつある。

八月二三日。二一日の儀式のあとはじめ浦和市のF嬢（二〇才）が〇〇氏を訪れた。彼女は〇〇氏の前で身に持つ不必要なカルマを全部語り、出しつくされた。〇〇氏はこの「カルマ」を天の神様の御前に持って行き、これを捧げた。そして、天の神様はその「カルマ」をお解き下さったのであった。

身に持つ不必要なカルマを真で解かれ、生まれ変わられたF嬢に、天の神様は、契約の箱<sup>を</sup>を渡されたのである。

ワンダラーとして誕生されたF嬢から、その後の近況が手紙で知らされたので、次に紹介する。

### 八月二四日付の手紙

——昨日（二三日）は一日中とてもうれしく、かつて経験したこともない喜びに浸っております。

お話を伺っている間も、帰りのバスを待っている間も、私の魂は諸々の束縛から、今日

(二三三日) 解放されたのだと感じました。なんと長い間迷いの世界にいたのでしょうか。でも、この迷いの世界も昨日(二三三日)で終わりました。

帰り道に、次のテレパシーを受けました。

「救われました。友よ、手をたずさえて。」

この時、私は本当に救われたのだと確信しました。

東京から浦和へ帰る電車の中で、続いて次のテレパシーを受けました。

「やっと、これで契約が果たせます。」――

九月一日付の手紙

――天の神様、サナンダ様、神々様に祈り、愛の心を持って進めば、どんなことも、苦しいことも、なんの恐れることもなく、穏やかな心で日々が送れると信じています。

八月二十六日、午前〇時一〇分、次の光景を霊視し、テレパシーを受けました。

雄大な富士の裾野に青々とした田園が広がっています。その時、次のテレパシーを受けました。

「みのり、みのり、みのりの年。」

この時はこの意味がよく判らなかつたのですが、三〇日にこのことを考えていますと次の靈感を受けました。

「青々とした『田』はワンダラーで、眠れるワンダラーが目覚め萌えだす。そうして神様の地を守るようにのびて行く。そのあとワンダラーの方々の努力は実を結び、『形の世界』に新生地球が移行するのだ。

新世界は『みのりの地』であり、『形の世界』に移行するのは『みのりの年』である。」

九月二一日付の手紙

――私は未熟ですが、果たせるだけの使命を果たすように頑張ります。

九月二日、一五時三〇分、空に橋のような形の雲が出来、太陽の光がその両側より強く光り輝いていました。その時、次のテレパシーを受けました。

「天に橋がかかり、地と結ばれました。」

九月三日、一八時二〇分、「王」という文字を画いた天のしるしの雲を見ました。

九月七日、一七時頃、雲で作られた様々の天のしるしを沢山見ました。

錦鶏が沢山天空に舞っておりました。そして西南西には柱を表わす雲があり、北々西に小文字のオメガ(Ω)の文字があります。そこから一羽の錦鶏がこの柱の方向に飛んで行くように見えました。

また、その柱の右隣りにはオメガの文字の方を向いた大きな錦鶏が見えました。その時、この象徴について次の靈感を受けました。

「オメガの中から飛び立って行く錦鶏は地球を表わす。古い地球の殻を破って、世の終わりを迎えた地球が鏗球王国としての一步をふみだす。天の神様のもとに新しい世が始まる。」

九月一日、朝七時頃の夢です。

どこかの建物に、浩宮様のお召しで行きました。若い人達が集まっています。ロビーのような所で、宮様から直接部屋の鍵を頂きました。ラセン階段を上ったところの部屋らしいのです。廻りから「特別室の鍵だ。」という声がします。

「宮様はなぜ私をお呼びになられたのですか。」と伺がってみますと、

「鍵をなくさないように。」とのみ言われました。

そのあと札のとれた鍵があつて二人の女性が一生懸命に札を付けようとしています。駄目でしたので、私が付けてみますと簡単に付きました。そして宮様にお渡ししました。

この夢はここで終わり、この時はこの意味が充分に理解出来ませんでしたので、一四日にこのことを深く考えていますと、次のことがハッキリと判つて来ました。

「特別室には何か重要な意味があるように思われます。開いている部屋でなく、閉じている部屋です。『新しい地球』であると思われました。そしてこの部屋(新しい地球)の鍵を持っている人は複数だと思えました。宮様も持っていたらっしゃいました。そして、鍵が

全部そろわなければ開かない部屋だと思えました。またこの鍵は、私を使命を果たすべく導くものであると思えました。

また、鍵が全部そろうことは、ワンダラー全員が目覚めて立ち上がり使命を果たすことだとわかりました。――

九月一六日、次のテレパシーを受けました。

「近く皇太子殿下(明仁殿下)はカーアハミテスの位におつきになる。いよいよ新生地球のための第一歩の事業に着手される。」

……今私はとても幸せだと思えます。沢山のワンダラーの方々が目覚められ、この喜びを多くの方々と共に出来ることを祈っております……。

一〇月一七日付の手紙

九月二三日、一六時三〇分、車中よりD型の黄金色こがねいろに輝く雲を見ました。太陽の右上に小さな玉が輝いているのを見ました。

この日(二三日)、二一時四五分、次のテレパシーを受けました。

「今日鏗球王国は復帰しました。これで王国は確立しました。もう何事があってもゆるぎない国となりました。これから生まれる人々も、育って行く人々と共に手を取り、建設を始めましょう。新しい地球は、たましいの世界有の世界に確立しました。おめでとうございます。す

べての人々の心の中に生まれたのです。」

九月二十四日、一六時、

天女の舞う天のしるしを雲で見ました。

一〇月一日、二四時頃、次の光景を靈視し、テレパシーを受けました。

「暗黒の中にいます。扉が開きました。美しい力強い光が扉から射し込んで来ます。扉はどんどん開き、ついには二つの世界（消える古い地球と生まれる新しい地球）をへだてる壁もなくなっていました。」

天から、『案ずることはない。時は来たり。』という声がします。

栄光の日です。もう闇に迷うことはない。明るい光の中を進む日々です。」

一〇月四日。

「天を仰げ。思いを天に向けよ」というテレパシーを受けた時、突然円盤が頭上を飛び去った。すると続いて次のテレパシーを受けました。

「ミサが始まる。もうすぐに……」

ミサは清めであり、地球の浄化であると判りました。

——私は魂も精神も大きく成長することを祈るだけです。一生懸命使命を果たすべく歩み続けたいと念願しております。——

——靈感を受けるには、心静かで、なにもものにも囚われないことが大切だと思います。私の精神状態が安定している時テレパシーを感じ、受け入れることが出来るのですが、不安定だったり、なにかに囚われている時にはなかなか感じる事が出来ないのです。心静かに全託して、ということは大変なことです。これからの人類にはどうしても必要なことなのです。天の神様、サナンダ様、神々様、宇宙の方々の御指導のもとに、自己を鍛えるより他にしかたないことと思います。——

以上

(注)ここに記されたワンダラーの誕生は、一つの例であって、すべてがこの通りではない。これからは、その時、その場所、その人と、いろいろ状況の異なる条件で、多くのワンダラーが誕生する。その数は万たる数にのぼるのである。

その時、その場所に居合わせた方々（真でカルマを解き目覚められたワンダラー）は、訪れられた方々に、真の心で接し、真と愛の心で受け入れ、真を語って、目覚めるワンダラーの助けとなる使命を持つのである。

新しい地球、鏗球玉国はこのように新しく誕生した、生き生きとたくましい多くのワンダラー達によって建設される。この聖火は点火され、引継がれ燃え榮えて、地球を包んで行く。そして、この万たる数のワンダラーの方々の手によって鏗球玉国は建設されていく。

## あとがき

昭和五二年六月三〇日、

『天の神様のみ心のままの地球となりました。』

昭和五二年七月二五日、

『サナンダ様の（思いのままの）完全な地球となりました。』

このように天からお言葉を頂いたとおり、もう決して壊れることのない新しい地球が、この目では見えない世界において厳然と確立したのである。

ここで、今日に至るまでの経過を振り返って見よう。

(1) 「無の世界」における聖戦は昭和三五年に始まり、昭和五〇年九月三〇日に終わりを上げた。こうして「無の世界」では完全に「新しい地球」が完成したのである。（本書、別冊(一)・(二)へ合本参照)

(2) 続いている聖戦により、この「新しい地球」に、鏝球王国の「霊の世界」が誕生した。

これによって昭和五二年六月一九日、「この地球最後の儀式」を行うことが出来、これをもってワンダラーの今までの命（使命）は終わりを上げた。そして、場面は今までとは全く違った場へと転換してゆくことになったのである。

(3) この新しく展げた場面においては、ワンダラーの生まれ変わり（誕生）が行われることとなった。こうして、去る八月二一日までに多くのワンダラーは、身に持つ不必要な悪しきカルマを天の神様の前に全部出しつくして真で解き、ここに新しく生まれ変わって（誕生）、新しい命（使命）を天の神様から頂いたのである。この新しい命とは、鏝球王国の建設（「たましいの世界」と「形の世界」における）の良きカルマ（役目）のことである。

建設の良きカルマを頂いた多くのワンダラーは、その後、それぞれに与えられた役を果たして来た。（これからも沢山の役を果たすのである。）そして、去る九月二三日に富士山の湧玉の池にて「鏝球王国の儀式」が行われたことにより、

すべての人々（他の遊星から来た方々全員）、全人類、全動物、全草木、一切のすべてのものは新しく生まれ変わった（誕生）のである。

ここに鏝球王国は確立し、もう何事があってもゆるがない王国（地球）は確立したのである。鏝球王国の「たましいの世界」は誕生したのである。

以上の厳粛な事実気付いた時、多くのワンダラーを始め全人類は、天の神様の大愛に涙することであろう。

(4)いよいよ鏗球王国の建設は、最終段階の「形の世界」に入った。「形の世界」の建設は、古い地球の浄化に正比例して進行する。否、建設に比例して古い地球は浄化される。ワンダラーは、地球の大浄化が来ることを待たないで、神の国、鏗球王国を「形の世界」に創るために来たのである。言葉を替えれば、ワンダラーは地球の浄化を、形の世界の浄化を成しとげるために来たのである。(建設と浄化は表裏一体の同意語である。)これからはこの大事業にワンダラー全員が一つの心に結ばれて、大きな力となって進まなければならない、そうでなければこの大事業は出来ないのである。

これからもワンダラーの進む道には厳しく苦しいものがある。しかし、これは、いかに苦しくとも逃げることの出来ない道なのである。

一〇月一〇日、サナンダ様より次のお言葉を頂いた。

「苦しみ悲しみの中に、ワンダラーは真でカルマを解く戦いを行います。

世の混乱した姿を正しくするには、まずワンダラーの歩む道を正しくして、進んで行くのです。

スムーズに進む道を皆さんは歩んで行かれますよう。

ここに、苦しみ悲しみの中に、真を理解しカルマを解いて行かれますよう。

勇気を持って進んで行きましょう。

ワンダラーの喜びのないところに人類の喜びはありません。」

一〇月一二日

「皆さんが、すべて真でカルマを解いて下さい。一人一人、あなたは、あなたで、真でカルマが解けますよう、解いて進んで行かれますよう、天と共に進んで行きましょう。」

したがって、世の終わりはいつ来るのか? という問いに対しては、私達は次のように答えるであろう。

世の終りは今ノである。ワンダラー全員が一つの心に結ばれ、一人一人が、それぞれの場で、苦しみ悲しみの中に真を理解し、一つ一つのカルマを解いて、鏗球王国の建設を一步一步進めてゆく。これらのことが完成した時がすなわちその時である。

このように、ワンダラーの働くべき時が、今ここに来た。そしてまた、ワンダラーの思いのままの正しい働きが続けられる限り、天の神々は援助の手を差し延べられるであろう。去る七月一六日、サナンダ様のお言葉。

「皆さん(ワンダラー全員)の思いのままの地球となりますでしょう。」

このお言葉の意味が、ここに理解されるのである。

ワンダラーによる鑿球王国の建設が遅れば遅れる程、人類の苦しみ、悲しみも長く続く。反対にスムーズに進めば進む程、人類の苦しみ、悲しみも短かく、輝やかしい喜びの世の終わり<sup>4</sup>が来るのも早いのである。建設とは、ワンダラーの目覚めである。

これからの道においては、すべてがワンダラーの責任となる。すべてがその双肩にかかってくるのである。ワンダラー全員が「紅の真<sup>くれない</sup>」を持って使命を果たす時が、今、ここに来た！ワンダラーの使命を果たす時は、今においては他にないのである。

これからは、目で見えない世界での聖戦は終わり「形の世界」に入ってゆく。この建設は全員のワンダラー（万たる数のワンダラー）によってなされる。この道は真で判り、この目で見かつ体験して進む道である。

また、これまでの長い聖戦の記録である「オイカイワタチ」（本書・別冊(一)・(二)・(三)の使命は、これからの多くのワンダラーの方々に「形の世界」を建設して進む道での良き道標となるものであると信じている。

鑿球王国について。

新しい地球の呼称として、これまでもしばしばあらわれてきた「鑿球王国」という言葉に関しては、耳なれぬものであるだけに、仲間の中にはこの言葉に対して疑問と抵抗を持った方々もあった。

H氏もその一人であった。そして、この疑問は遂に不信にまで至らんとしたのだった。そこで彼はこれを正すために真剣に天に祈り、また天に問うたのである。すると次のテレパシーを受けた。

「疑うことなく信じなさい。」

「この新しい世を表わすのには、この言葉が最も適切なのです。」

このことに心を致されたのことは知らないが、天は時には龍宮といわれ、綿津見宮といわれている。いずれも新しい世、地上天国を指すのであって、言葉にとらわれないで読者の好まれる名称をここにあてはめて頂いても差しつかえないのである。

鑿球王国の意味を私達は次のように理解している。

「聖なる天子が統べられる国、美しい黄金<sup>天国</sup>の地球。」

最後に、この別冊(三)発刊にあたり、ここに発表した以外にも仲間からは多くの体験が寄

# オйкаイワタチ [非売品] 編著者 渡 邊 大 起

オйкаイワタチとは宇宙語である。その意味は………  
 『神様の命を受け、神様の手足となることを一人一人が心に誓って進化の周期の来た遊星（地球）に生まれ変わり、その遊星（地球）を神様の世界とする目的のために身を挺する魂を持った人達（ワンダラー）の集まりである。』（本書115頁）

**第 1 卷 (本 書)**  
 昭和33年から49年までの17年間にわたるワンダラーのこの地球での聖戦の足蹟を記す。  
 第1部（6章）円盤・宇宙人と来訪の真相／第2部（9章）オйкаイワタチの使命／附の部（2章）宇宙を垣間見て。  
 地球の「無の世界」における聖戦の記録など。

A 5 版 235頁

**第 2 卷 [別冊1・2] 合 本**  
 昭和50年から52年4月までのワンダラーの「世の終わり」と「新しい地球誕生」の戦いの足蹟を記す。  
 別冊1（3章）は地球の「無の世界」における聖戦。天の神様、神々を従えて地球に降り給う、など。／別冊2（4章）は地球の「無の世界」における聖戦。新しい世の王を頂く、など。

A 5 版 227頁

**第 3 卷 (別冊3)**  
 昭和52年11月までのワンダラーのこの地球での戦いを具体的に記す。  
 第1部（3章）鏝球王国の霊の世界誕生、一地球の「霊の世界」における聖戦。／第2部（6章）鏝球王国の建設、一地球の「たましいの世界」における聖戦など。／附「新しいワンダラーの誕生、

A 5 版 294頁  
 口絵、カラー 8頁

**第 4 卷 (完・上)**  
 昭和53年12月までの聖戦、即ち、「形の世界」の目に見えない霊界、幽界における「世の終わり」と「新しい世の誕生」を記す。  
 第1部（7章）万たるワンダラー誕生、「鏝球王国の国造り成る」など。／第2部（2章）新しい地球、鏝球王国完成、「天孫降臨」など。／第3部（5章）レタマヤの世の終わり、「エクアドルの儀式」、「古い地球葬送」など。／巻末に年表。

A 5 版 297頁  
 口絵、カラー10頁

**新刊、第 5 卷 (完・下)**  
 (附・講演記録)  
 昭和56年1月をもって天の神様のなさる儀式、即ち「湧玉の祝事の儀式」は全て終了し、「形の世界」の現象界において、いよいよ「その時」が来た。世界中の全ワンダラーが働く本番の時が来た。  
 第1部（4章）「形の世界」（霊界・幽界）の聖戦終わる「みそぎ」など。／第2部（2章）「形の世界」（現象界）の終末の期を迎える「万たるワンダラー、儀式に参加」など。／第3部「湧玉の祝事の儀式」／第4部「ワンダラーの使命は開始された」。  
 「形の世界」の霊界・幽界、現象界での聖戦。  
 巻末に講演記録および年表。

A 5 版 380頁

**講演記録**  
 あなたの使命は開始された！  
 昭和55年2～5月にかけて、大阪、東京、札幌で行われた「オйкаイワタチ大講演会」の講演記録である。（第5巻の末尾にも全体を収録）真の自覚めと使命の自覚のための助けとなるものである。  
 世の終わり新しい世の建設を担われる「真」の判る多くの方々— 光る魂の方々—への呼びかけに役立つ書である。

A 5 版 88頁

誦読した後、本書に強い関心がありましたら、あなたの知人で同じ志を持つ方々（地球の大周期の大変化と新しい世の建設に使命を持つ方々）をご紹介して頂きたいと思えます。私は、この方々は、地球と人類に、奉仕の使命を持って生まれた方々と信じます。私はこの方々に本書を読んで頂きたいと希っておりまして。あなたの親切な協力をお願い申し上げます。

せられており、また原稿を締切った後から寄せられた体験も沢山あったが、これらは紙面の都合で割愛した。このように今回は特に多くの方々のご協力を頂いたことを記しておきたい。山本画伯は、わざわざ本書のために絵を描いて贈って下さった。加古川市の船倉氏には、誤字等に関して校正の労を賜わった。さらに、多くの方々の献身的な御努力によって、この本の編集、印刷、発刊は可能となったのである。ここに、これらの多くの方々、及び読者の皆様に、深く感謝を申し上げる次第である。

一九七七年一月一日  
 編 著 者

発行所 **オйкаイワタチ出版会** 〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18  
 東海理化販売ビル内

●「オйкаイワタチ」は第1巻～第5巻の5冊より成っておりますので、この順序でお読み下さるよう特にお願い申し上げます。（途中からでは真意が御理解になれません。）  
 ●上記書籍及びしおりを御希望の方は、「オйкаイワタチ出版会」にお申込下さい。

**オйкаイワタチ 第3巻(別冊3)[非売品]**

---

昭和53年1月20日印刷発行  
昭和57年4月2日 再 版

編著者 渡 邊 大 起

発行所 オйкаイワタチ出版会  
〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18  
東海理化販売ビル内

印刷所 加納印刷工業  
〒461 名古屋市東区筒井二丁目12番2号  
TEL052-937-7121

---